
魔法学院生徒物語

霊琉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法学院生徒物語

【Nコード】

N2059W

【作者名】

霊琉

【あらすじ】

魔法が当たり前に存在している世界。クロリア王国にある世界最大の魔法学院マジックゲートの優等生と落ちこぼれが様々な事件に巻き込まれていく物語。

ブログ（前書き）

不定期更新。登場キャラ募集中。

注意事項

ド素人が書くので期待はしないこと。行き当たりばったりのストーリーです。

ブローグ

- - ドクン……ドクン - -

光など微塵も入り込まない真っ暗闇。心臓の音が響くだけ。
何時間、何日……いや、何年間も経っているかもしれない。
視るという行動はとうの昔に忘れた。聴覚は働いてはいるが心臓
の音しか聞こえない。

嗅覚を働かせても腐ったような臭いしかない。声をだそうとし
ても口が何かに塞がれてくぐもったうなり声しかあげられない。
自分が誰なのかもわからない。いや、忘れてしまった。

- - カツツ…… - -

何処からか床に何かが当たる音が聞こえる。

- - カツツ、カツツ - -

少しずつ音が近づいてくる。……これは足音だ。ひさしぶりに聞
く、自分以外がたてる音。

その音は突如として聞こえなくなる。

- - キイイ…… - -

何かが床とこすりつけられる音とともに、真っ暗闇の景色が真っ
白に染められた。

目を刺すような痛みにたまらず目をつむる。……視覚は働いた。
黒以外の色を見た。

……マブシイ……

口に手が添えられ、次の瞬間口を塞いでいたモノが外される。

「ウウツ……ダ、レ、ダ……」

ひさしぶりに声をだした。目も徐々に光になれば、景色が映し出される。

「私は君を助けに来た。……君を苦しめたヤツらに天罰を与えよう」
目に映ったのは光を背に、語りかけてくる少年。差し伸べられている手と少年を交互にみる。

「……キューセイシュ、カ？」
少年は腕を引っ込め、考えるように手を顎にあてる。

「救世主？ ……悪くはない。そうだな……それがいい」
少年は納得するように何度も頷いた。再び手を差し伸べ言った。

「私はメシア……救世主だ。私とともに世界を変えよう」

……神を見た。……いや、神になるであろう少年を見たと言えば
良いだろうか。

救世主は世界を変えるべく降臨する。

彼が創る世界の先に一体何が待っているのか……。

適当な世界設定みたいなもの（前書き）

＊注意事項＊

加筆する可能性あり。深くは考えてないので期待はしないこと。

適当な世界設定みたいなもの

この世界には魔法が存在する。魔法を使うには魔力が必要だ。魔力は生まれつき持つものでほとんどの人が持っている。

魔力には属性があり、使用者の属性に合った魔法の威力が高くなる。

強い魔法であればあるほどより多くの魔力を消費する。

魔法は様々な種類があるが大きく分けて4つの種類がある。

『白魔術』……防御や治療など主に使用者を補助する魔法が多い。

『黒魔術』……相手を攻撃する魔法のほとんどがコレに分類される。そのなかには使用者の生命を削る危険なモノも存在する。

『錬金術』……物質を別の物質に変えたり、物質を作り出す魔法というより技術。

『召喚術』……遠く離れた魔力を持つ生物を呼び出す魔法がコレにあたる。熟練した者は異世界の生物を呼び出せるという。

この世界では魔法学院と呼ばれる学校があり、初等部（6年間）、中等部（3年間）、高等部（3年間）、上等部（4年間）に分けられる。

魔法学院は全寮制の場合が多く、基本的に2人部屋しかない。

魔法学院の敷地内には校舎に加え、食堂や図書館、寮がある。

食堂は1階が初等部、2階が中等部用、3階が高等部、4階が上等部用とわかれている。

図書館は3階建てで1階は普通の本、2階は魔法に関する本、3

階は王国や世界の歴史を記した本や資料などがある。

魔法学院の生徒には成績に応じてランクが決められる。

AからFの基本ランクに加え、優秀な者……いわゆるエリートランクのS、落ちこぼれのGがある。

ランク分け試験は年に3回、長期休業前に行われる。

ランクは学院内だけではなく世界中で共通している。やはりランクが高いほど社会的地位も上がる。ランクは魔力の大きさと魔法の技術、知識、体力などにより決められる。高ランクが待遇がよいにもかかわらず手を抜いて低ランクに見せかける人もいる。

この世界に住んでいる人間を含む全ての生物に魔力がある。ごくまれに魔力が極端に少ない生物も存在する。

少ないとは言っても全くないということはない。魔力が少なくても訓練などで大きくすることができる。

『ランクの基準』

魔法学院初等部…… E

魔法学院中等部…… D

魔法学院高等部…… C

魔法学院上等部…… B

ランクの基準はあくまでも各課程終了時にこのランクにはなっていないというもののだが、ほとんどの生徒は1ランク下だ。魔法学院は高等部まで通うことが義務づけられている。

この世界には魔術協会と呼ばれる機関があり、簡単に言うと魔法を扱う者の管理をする。

魔術協会は魔法学院上等部を卒業した者しか入会出来ない。

よって魔術協会はエリート集団だという認識が世界中の人にある。

魔術協会は世界中にあり、その本部はクロリア王国にある。

そこでは4年に1度世界中の魔術師が集まり世界一の魔術師を決める大会がある。参加資格はAランク以上であること。

優勝者には世界最大の図書館……『世界書庫』に入ることが許される。

『世界書庫』には世界中のすべての書物がある。中には禁断の魔法とされる魔法の使い方が書かれている本も存在する。

『世界書庫』がどこにあるのか知るものはクロリア王国国王と魔術協会会長、大会優勝者のみである。

第1話（前書き）

＊注意事項＊

名前は適当。意味はほとんどない。つまらないと思っけど読んでくれる方に感謝いたします。

第1話

- クロリア王国魔法学院マジックゲート中等部 -

魔法学院では優秀な魔術師になるための勉強が行われる。

「私達魔術師にはランクがあります。ミスター・リカッド、ランクについて簡単に答えなさい」

呼ばれたレイル・リカッドは面倒臭そうに立ち上がる。

「はい。ランクとは魔術師の実力を示すためのものです。ランクが高いほど地位も高いです」

「まあ良いでしょう。座りなさい」

「はい」

レイルが座るのを確認すると教師は周りを見渡す。

「ランクはAからFがありAが最も高いランクです。ですが、例外も存在します。ミスター・クルー答えなさい」

「はい。Aよりも高いランクとしてSランクがあります。そして…」

カシア・クルーは1人の少年を見た後、再び前を向いて答える。

「Fランクにも満たないランク。落ちこぼれのGランクがあります」

「そうです、その通り！ 初等部の者でさえEランクが多いのにシルフィード・マグナス、アナタは落ちこぼれなんですよ！」

シルフィードは名前を呼ばれたのにもかかわらず机に突っ伏している。

「マグナス君は寝てまーす」

「またですか！ 中等部に入って2ヶ月、寝てばかりじゃないですか！」

騒ぐ教師の声に反応してシルフィードは顔を上げる。

「やっと起きましたか……だいたいアナタは」

「……うるさいババア」

シルフィードは吐き捨てるように言っつて再び机に突っ伏した。

「な……ババアですって！ 教師に向かってババアと……寝るな！」

教師はシルフィードの頭をつかみ、無理やり顔をあげさせた。

「シルフィード・マグナス、放課後職員室に来なさい。これは絶対です。拒否権はありません」

「……わかりました」

「よろしい」

わかりましたと答えたが、シルフィードは職員室に行く気は全くない。

放課後になったらすぐに寮に戻るつもりだ。

- -そして、放課後 - -

シルフィードはそそくさと学院を抜け出して、寮の自分の部屋に来ていた。……いや、行こうとしていた。

「……通せよ」

「ダメだよ。ちゃんと職員室に行かなきゃ」

教室の入り口に立つ女生徒アイリ・シグニットをシルフィードは睨みつけている。

アイリは優等生だ。真面目で成績も良く、中等部1年生にして既にCランクだ。

「教師の犬が……。そこまでして教師に気に入りたいのか」

「そんなことはない」

「ならそこを退け」

「行かないと授業中はまた説教ばかり……。マグナス君のせいで授業が進まないんだ」

「授業中邪魔にならないように寝ているだけだ。それなのに教師がくっつく……。それだけだ」

「それだから落ちこぼれなんて言われるんだ！ 初等部の頃から授業中は寝てばかりじゃないか」

「いいから退けよ……学院内での魔法使用は授業中以外禁止されている。純粋な力だけだと強いのは俺だ」

魔法学院は魔法を学ぶ所であって使う所ではない。実習で魔法の練習をする以外は許可がない限り使ってはならない。

使った場合は生徒指導の対象となり、それ相応の処罰がされる。

「お、脅してるつもり？」

強がってはいるがアイリは痛いのは嫌いで、内心ビクビクしている。

シルフィードは中等部１年生の中でも力は強い方で、素手同士なら上級生にも負けないだろう。

「脅してるわけではないけど……早く退かないと本気で殴る」

シルフィードは手に力を入れて、拳を上には振り上げる。

「ヒッ……」

殴られる。そう思ったアイリは震えながらその場から退いた。

「それでいいんだ」

シルフィードは廊下に出て寮に向かった。……向かおうとした。

シルフィードが廊下に出て歩きだそうとしたが足を動かすことが

できなかった。シルフィードが足下をみると、光でできている紐で足が縛られていた。

「……アイリ、校則違反だ。優等生のお前ならわかるよな、許可なしに魔法を使つてはならないことぐらい」

「それを言うなら……」

「俺は魔法学院に入ってから一度も校則違反はしてない」

「授業中寝ているし、教師の言うことも聴かないじゃない」

「授業中に寝てはいけないという校則はない。教師の話をきけという校則もない」

「で、でも……それは当たり前のことだから」

「当たり前？　なら校則を守ることは当たり前じゃないのか」

「……うるさい。いいから職員室に行きなさい！」

「……今解放すれば見なかったことにしておく。幸いにも他の生徒は寮に帰ったみたいだしな」

シルフィードの言葉にアイリは迷った。きっとこのまま職員室に行かせれば魔法を使ったことをバラされるだろう。

校則違反の処罰は様々だが、どんな罰でもランクに影響するだろう。

酷ければ自分もGランクに落とされるかもしれない。

「……本当に、誰にも言わない？」

しばらく互いに黙っていたのだが、さきにアイリが口を開いた。

「もちろんだ。今すぐ……」

「何をやっているのですか！」

「……チツ。来るのが早いんだよババア」

タイミングが悪い、とシルフィードは思う。もう少し遅ければ魔法は解かれていた。それに自分もこの場に居なかった。
アイリは青ざめた顔で教師を見ている。

「ミス・シグニット、ということですよ」

「も、もうしわけ……」

「すべて俺が悪いんです。職員室に行かず寮に帰ろうとした俺を止めただけです」

「……そうであろうとも校則違反を犯した者には処罰をしなければなりません。2人ともついてきなさい」

黙って教師の後をついて行く2人。アイリはたまにシルフィードを見ながら歩いているが、シルフィードはただ前を向いたまま歩いていた。

「ここで待っていないさい」

そういつて教師は学院長室に入っていく。

「ど、どうしよう。学院長室だよ」

もちろん学院長はこの学院でもっとも偉い。さらにこの学院の学院長は中等部時代で既にSランクの魔術師として学生でありながら魔術協会の手伝いをしてきた。

そして、王国内だけではなく世界中でも有名で、『伝説の魔術師』の1人として今でも活躍中である。

「もとはといえばお前が魔法を使うから」

「……ごめんなさい」

2人は互いに顔を合わせようとせず、アイリはうつむいて、ただ時間がだけが過ぎていく。

「入りなさい」

学院長室から男性の声がした。シルフィードはアイリをチラッと見た後、学院長室の扉を開けた。

「シルフィード・マグナス、失礼します」

「アイリ・シグニット、失礼します」

2人が中に入ると、2人をつれてきた教師と白髪混じりの男性……学院長がいた。

「話は聞いた。魔法を使ったようだね」

「もうしわけございません！」

アイリは深々と頭を下げるが、シルフィードはじつと学院長を見ている。

「君は授業態度が悪く、教師の言うことも聴かない……何故かな」

「校則にはありませんし、学院で習うことがすべてだと思っていますせん」

「それでも学院の生徒として見せかけでも真面目にしていると助かるがね」

「……あいにく、俺は不器用ですから」

「まあ自分に正直なのは良いことだ。さて、今回の処罰のことなのだが……」

「退学でも良いですよ」

「高等部までは義務だから退学はないよ。酷くても留年どまり」

留年と聞いてアイリの顔が青ざめていく。

「君達2人のどちらかが1ヶ月後にあるランク分け試験で2ランク上がれば処罰を取り消そう」

「……俺は退学が良いです」

「ち、ちょっと待ってください！ 2ランクって無理ですよ」

「君には無理だろうね。でもGランクだったら簡単じゃないかい」

「必死になって頑張りなさい」

学院長室を出て2人は並んで校舎を出た。

「……決めた」

「何を？」

「マグナス君に勉強を教える」

「はあ！」

「だってそうしなきゃ。お互い頑張りようよ」

「お前がAランクになればいいだけだろ」

「無理だよ！ 今だって必死に勉強してCランクなのに」

「とにかく、俺はどうでもいいんだ」

「そ、そんな」

俺は勉強なんてしないと言ってシルフィードは歩きだした。

第1話（後書き）

登場キャラ募集中。ストーリーも募集中。もちろん期待はしない
こと。

第2話（前書き）

＊注意事項＊

思いつくがまま書いて書けたら投稿してます。不定期更新どころ
じゃありませんが御了承ください。

第2話

「ねえ、お願い」

「何度言われても俺の気持ちは変わらない」

魔法学院マジックゲート敷地内にある食堂。中等部用の2階、入り口から1番奥のテーブルにシルフィードとアイリはいた。

もともとシルフィードが1人で昼食を食べていたら友達と一緒にきたアイリに見つかり、アイリがシルフィードと相席したのだ。ちなみにアイリの友達も相席している。

「ねえ、アイリ……気の毒だけど処罰は免れないと思うよ」

「で、でもマグナス君だって勉強すれば……」

「どうせ勉強しないでしょ。それに処罰が留年だとは限らないよ」

「そうかもしれないけど……」

「なあ、そろそろ良いか？ 食べ終わったから帰りたいんだが」

「え！ 午後からの授業はどうするのよ」

「……アイリ、今日の授業は午前中だけだよ」

「え……そうだったけ」

今日は職員会議で午前中しか授業がない。職員会議は初等部から
上部までの教師が参加するためかなり時間がかかるらしい。

「さすが優等生……授業がなくても授業するんだな」

「うう……」

アイリは恥ずかしそうに顔を赤く染めている。

「マグナスは今から暇なの？」

アイリの友達セレーナ・クラントはシルフィードにたずねた。

「今から寮で昼寝をするんだ」

「つまり暇ってことね。……今から遊びに行かないかしら？」

「……どこに行くんだ？」

「もちろん学院敷地外。あまり街の中に行ったことないからね」

この学院だけではなくほとんどの場合が大きな街の中に建っている。生徒は平日は校舎と寮を行き来するだけだが休日になると街に出て買い物をしたりする。

買い物をするには無論お金が必要だが、物などの代金もランクによつて異なる。ランクが高いほど安く買える。Sランクになるとほとんどの店で無料になる。

お金についてだが学生はバイトで稼ぐ以外に王国から援助金をも

らっている。毎月貰えるがやはりランクによって異なる。バイトの給料なども同じく異なる。」

ちなみ学院内ではお金は必要ない。学費もないので誰でも入学出来る。「Gランクの俺としては街に行くのは遠慮したい」

「大丈夫だよ。私Eランクだけどアイリが居れば安く買えるんだ」

笑顔で言うセレーナにたいして呆れたようにアイリはため息をつく。

「それでも遠慮しとくよ」

立とうとするシルフィードの腕をセレーナがつかむ。

「……殴るぞ」

「ひっ」

シルフィードの脅しにセレーナではなくアイリが怯える。セレーナはシルフィードに睨まれているが腕をはなそうとしない。

「いくら不良生徒でも女子を殴るわけにはいかないんじゃないの」

「……いいからはなせよ!」

「そんなに私達と一緒に居るのが嫌なの?」

「……嫌だね」

「あつそ……わかったよ、アイリ2人で行こう」

「え！ う、うんわかった」

セレーナはシルフィードの腕を乱暴にはなし、大股で歩き去っていく。アイリは慌ててセレーナを追っていた。

「……何なんだよ」

1人残されたシルフィードはしばらく呆然としていた。

- - 魔法学院マジックゲート校門 - -

「ムカつく！ やっぱアイツムカつく！」

「えっ……と、どうしたの？」

「どうしたもこうしたもないわよ！ アイツ、Gランクのくせに生意気」

「そんなこと言ったらダメだよ」

「何で？ 処罰のことだって人事みたいに……ホントどうするの！」

「……どうしよう」

アイリはその場で止まりうつむく。

「……こうなったらマグナスを落とすしかないか」

「落とすって？」

「もちろん、マグナスをアイリに惚れさせる。好きな人のためだったら頑張るだろうし」

「ち、ちよつと、それはいくら何でも」

セレーナはアイリが顔を染め慌てる様子を見てニヤニヤと笑っている。

「あれあれアイリちゃん。もしかしてマグナスが好きなのかしら？」

「……うん」

アイリが答えた瞬間セレーナの動きが止まった。そして信じられないという顔をして口をパクパクさせていた。

「ほ、本気なの？　だってGランクだよ！」

「ランクは関係ないよ。……マグナス君格好いいしああ見えて優しいんだよきっと」

「……たしかに格好いいけど、優しいとは思えない」

「優しいよ！」

「そ、そう。……今日はどこに行こうか？」

「話変えないでよ」

「い、ごめん」

「まあ後からマグナス君の良いところを話してあげるから」

「あ、ありがとう」

セレーナは苦笑いしながらこの友達は大丈夫なのだろうかと心配する。

・・クロリア王国首都クロリア・・

「やっぱり街は良いね」

「そうかな？ 私は静かなところがいいな」

アイリは小さな村で生まれ、初等部に入る時にこの街にやってきた。

はじめの頃は怖かったのだがいつの間にか慣れてしまい、今では休日になると友達とこうして街に遊びに来ている。

「……タシカニコノマチハサワガシイネ」

「え？」

アイリが振り向くと、緑髪の少年がいた。その目は真っ赤に輝いている。

「ハジメマシテ、ルー、トイイマス」

緑髪の少年ルーは丁寧なお辞儀をする。

「あ、初めまして。アイリ・シグニットです」

「私はセレーナ・クラントです」

2人もルーに自己紹介をした。

「あの……外人さんですか？」

「ン……ワタシ『リトリッジ王国』カラキタンダ」

リトリッジ王国は小さな島国だ。魔法学院もあるが小さい。だが、遺跡が多く、たくさんの学者達が訪れる。

「へえ、リトリッジ王国ですか」

「リトリッジ王国は歴史的な建造物で有名な国だ」

「フレイル先輩！」

ディザ・フレイル。魔法学院マジックゲート中等部3年でBランク。顔立ちが整っていて優秀であり特に女子から人気がある。

「ヤア、ディザ」

「お2人は知り合いなんですか？」

「ああ、友達だよ……今日はこの街を案内するんだ。それじゃ、また」

ディザとルーは手を振りながら街の人ごみの中に消えていった。

「……フレイル先輩と話しちゃった」

「そうだね。ビックリしたよ」

同じ中等部とはいえ、なかなか会うことが出来ない憧れの先輩と話したことでセレーナは興奮していた。

――クロリア王国図書館――

「……ヤハリソノセカイタイカイトヤラニユウシヨウシナケレバセカイシヨコニハイケナイノカイ？」

「ああ、大会優勝者にしか『世界書庫』の場所も教えられないからな」

2人の少年はクロリア王国図書館で資料を探していた。禁断の魔法に関する資料は普通の図書館に存在しないことは2人にはわかってはいたがもしかしたら……という考えが捨てきれなかった。

結局何も見つからず、2人は図書館の隅で話していた。

「……イツソノコトコクオウヲオドシタラドウダ？」

「そんなことをしたら私達は犯罪者だ」

「オソカレハヤカレクニ……セカイヲテキニマウスンダカラベツニイイダロウ」

「ダメだ」

「ハア……セカイタイカイガアルノハライネンダロ。ソレマデマツノカ？」

「……実験をしようと思う」

「ナンノジツケンダ？」

ディザは質問には答えず、図書館の出口へと向かう。図書館を出てしばらく歩いた。ふと立ち止まったディザは振り向いてルーを見る。

「……まずは仲間を探さないとな」

「ワタシタチダケデハダメナノカ？」

「駒があれば戦略も広がるからな」

「ダガ、ソレナリニユウシュウナモノヲサガサナイトイケナイ」

「大丈夫だ、あてはある」

――魔法学院マジックゲート――

夕食の時間となりほとんどの生徒が食堂で食事をとっている。

「……で、頼みって何ですか？ フレイル先輩」

ディザは1人の女子と相席していた。その女子の顔は若干赤い。

「つきあって欲しいんだ」

「…………え？」

「君じゃないといけないんだ。…………頼む」

「わ、私なんかで良ければ…………喜んで」

「ありがとう。それじゃ、後で僕の部屋に来て欲しい」

「わ、わかりました」

ディザは立ち上がり、食堂をあとにした。外は既に薄暗くなり日は沈んでいた。

「オドロイタナ…………コクハクカ？ ココロニモナイコトヲペラペラト」

「いや、あの言葉は本気だよ。彼女しかいないからね実験の適応者は…………」

この日、1人の女生徒が学院から姿を消した。

第3話（前書き）

＊注意事項＊

今週は体育祭＆文化祭の練習や準備のため更新はなかなか出来な
いと思います。

暇な時に少しずつは書いていくつもりです。

第3話

気がつくと闇の中だった。どこを見ても真っ黒な景色が続くだけ。

メイス・アグライアは魔法学院マジックゲート中等部3年だ。メイスは先ほどディザに告白され、彼の部屋に行ったはずだった。

部屋に入った瞬間意識を失い、気づいたらここにいた。

どうやら景色が真っ黒なのは目隠しをされているからみたいだ。体を動かそうとしても動かないのは体を縛られているからだ。

でもどうして？

メイスは考えるがわからない。ディザがしたかもしれないということは考えられなかった。

でもディザの部屋で何かがあった。これはたしかだった。

「だ、誰か！」

メイスは叫ぶが、メイスの声が響くだけだった。近くには誰もいないようだ。

「誰か……助けてよ……」

――魔法学院マジックゲート――

「行方不明？」

「そう。アグライア先輩が昨日の夜から行方不明」

食堂で朝食をとりながらアイリとセレーナは話していた。行方不明になった先輩はセレーナが初等部の頃からお世話になっている優しい人だった。

寮は初等部から高等部まで一緒だ。上等部の校舎は離れたところにある寮も校舎の近くにある。

「いったいどこに行っただろう」

「それがまったく謎なんだよね……」

「ところで、なぜお前らは相席なんだ？」

そう、アイリとセレーナは今日もシルフィードと相席だ。

「気が変わったかなーとか思ってるけど……」

「それはない。……さて」

「どこに行くの？ 暇なら今日は休日だし……」

「あいにく、俺には用事がある」

「どんな？」

「部屋に戻って眠るんだ」

「暇ってことだね。よし、行こう」

セレーナはシルフィードの腕を掴み、立ち上がる。

「おい、はなせよ」

「ダメ……アイリはそっち持って」

「わ、わかった」

アイリも立ち上がりシルフィードの空いている腕を掴む。

「お、おい！」

「それじゃ、出発！」

シルフィードは2人に引きずられて食堂をでた。アイリとセレーナは学院内にある図書館までシルフィードをつれてきた。

「……いい加減はなせ」

「じ、ごめん」

「頼みがあるの」

「……断る」

「まだ何も言っていない！」

「言わなくてもだいたいわかる……ランク分け試験のことだろ」

図星だったのかセレーナは沈黙する。シルフィードはため息をついたあと図書館から出ようと歩きだす。

「質問していい？」

「……何だ？」

「マグナス君は試験で本気を出した結果Gランクなの？」

「試験で手を抜いてランクを低く見せるメリットはないだろ」

「そう。……もし、手を抜いているのなら、1度だけで良いから本気だしてよ」

「……考えとく」

シルフィードが図書館から出て行くのをアイリは黙ってみていた。

「……アイリ、できる限りの協力はするね」

「セレーナ……ありがとう」

・魔法学院マジックゲート男子寮・

シルフィードは図書館を出たあと自分の部屋に戻ろうと寮に帰っていた。

「よう、落ちこぼれ。朝食のあと姿が見えなかったがどこにいたんだ」

「図書館まで連れ去られた」

「はは、とんだ災難だな」

寮の入り口でシルフィードに声をかけてきたのは中等部1年のフィル・フォモール。Dランクでシルフィードと同じ部屋だ。

「で、フィルはここで何してる？」

「お前を待ってたんだ。……お前以外全員そろってる」

悪かったな、と言ってシルフィードは寮の中へ入っていく。フィルも追いかけるようについていく。

男子寮は初等部から高等部までが一緒なのでかなり広い。しかし、一緒なのは入り口だけで、そこから3方向に道が分かれている。

初等部は入り口からみて左、中等部は右、高等部は正面の道を進めば自分たちの寮につく。

3階立てで一応どの階でも行き来ができるようにつながっている。

シルフィードは入り口から右に進み、数部屋通り過ぎたあと足を止め部屋に入った。

「ずいぶん遅かったな」

「ああ、すまないな」

ここはシルフィードの部屋だが今この部屋に居るのはシルフィー

ドを含め6人だ。

「みんな揃ったから始めるか……」

ボサボサの黒髪長髪の眼鏡をかけたDランクのリーチ・ランダインは話を切りだす。

「俺達は日頃の授業態度や生活態度が悪い。それは学院内でも有名なだ」

「今更わかりきったことを……」

呆れるように呟いたのはEランクのテスラ・ヴァインス。

「これは先輩から聞いた話だが、どうやら教師達は俺達に何かしらの処罰をあたえるつもりらしい」

「処罰なあ？　んなの無視すればいい」

Dランクのキース・ユナイゼルは校内で暴力をふるうことが多く生徒達から怖れられている。

「無視したら処罰が重くなるぞ」

キースを注意するリサーバ・ランダインはリーチの双子の弟でDランクだ。

「俺、処罰を受けるかもしれない」

「シル、本当か？」

「ああ、今度のランク分け試験で2ランク以上上がらなかったら処罰だと」

「それってお前と同じクラスの女子も言われたんだろ？」

「さすがフィル、情報が早い」

フィルは噂好きな生徒で話を盗み聞きたり聞き出すのが得意。真偽は問わず生徒の様々な噂を知っている。

シルフィードは学院長室で言われた処罰免除条件を皆に話した。

「お前なら安心だな……でもお前は処罰を受けるつもりなんだな」

「ランクを上げるつもりもない処罰を受けるつもりもない」

「……どうすんだよ」

キースがニヤニヤしながらシルフィードに聞く。他の4人も気になるのかシルフィードを見る。

「ランク分け試験は手抜き。処罰の件で呼び出されても行かない」

「駄目だろそれは。それに運命共同体の女子生徒はどうなる？ 見捨てるのか？」

「そつえば何度か試験で頑張るようにと頼まれた」

「……アイリ・シグニットだろ？ アイツ結構人気あるぜ」

「人気？」

「ああ、可愛くて頭もいい。処罰免除になればアイツのことだし何かしらのお礼はするんじゃないか」

「興味ないね」

「だから落ちこぼれて言われるんだ」

「何の関係があるんだ」

「せめて異性にたいしては積極的になれよ」

「だから何の関係があるんだよ」

シルフィードとキースの言い争いに皆は苦笑いをする。

「でも処罰って何だろうね。免除条件もあるくらいだからかなり重かったりして」

「重いと言っても最悪留年ぐらいだろ」

「……いや、噂だと死んだほうがマシだというような処罰があるらしい」

「へえ……なら女子は絶対我慢出来ないな」

フィルとリサーバはシルフィードを見るが、シルフィードは全く気にしていない。

リーチはため息をつく。そして口を開いた。

「シル、男の俺からみてもお前は格好いいと思う」

「……気持ち悪いぞ、お前」

リーチの言葉にシルフィードは冷たく対応する。反応だけではなく視線も冷たい。だが、リーチは気にせず続ける。

「それなのにお前のことを好きな女子を聞いたことがない……嗜好きのフィルでさえも」

「ああ、そうだな」

「俺はその原因を考えて見た……それはそのランクだ」

一旦話を区切りリーチはシルフィードの目を見る。

「ランク分け試験で処罰免除されたらシグニットからの評価も上がる。周りの見る目も変わる。良い方向にね」

「興味はない。特に色恋ごとにはね」

まだ中学生だからな、と言ってシルフィードは部屋を出ようとする。

「どこに行くんだ？」

「ちょっと勉強にね」

そう言ってシルフィードは部屋を出た。

「……ふん。素直じゃないね」

「シルのことだ。もともとやる気だったんだろ」

「そっといえばさっきの噂って本当？」

テスラの質問に「嘘に決まってるだろ」とキースとリサーバは笑った。

「……どうだろうな」

フィルは誰にも聞こえないように呟いた。

- 学院敷地内図書館 -

「はあ……無理だ。2ランクってAランクだよ。Bランクにも届きそうにないよ」

「諦めたらダメだって」

「いや……頑張るだけ無駄だ」

アイリとセレーナが声がした方を向くとシルフィードがいた。

「どっいつことー」

「上等部でもAランクはほとんどいない……客観的事実を言っただけだ」

「何でそういうこと言うのかな！ もともとアンタが……アイリ」

セレーナの言葉を遮るようにアイリはセレーナの手を握る。

「もう……良いよ。処罰がそんなに重いとは限らないから」

アイリはそう言ったが今にも泣き出しそんな顔をしていた。それを見たシルフィードはため息をつきながら頭をかいた。

「……そういえばマグナス君はここで何をしてるの？」

「勉強だ」

「……え？」

「だから勉強しに来たんだ。1度だけでも本気を出そうかと思って」

アイリは驚いたようにシルフィードを見る。セレーナも目を見開いてシルフィードを見ている。

「……何だよ」

シルフィードは顔をしかめ2人を見る。

「……いったいどういう風の吹き回し？」

「たんなる気まぐれ。文句は言わせない」

「……ありがとう。マグナス君」

「礼を言われるようなことはしてない」

シルフィードは2人から離れ2階に上がる。

「……マグナス君は優しいよ」

「そうかもしれないわね」

第4話（前書き）

＊注意事項＊

今回は体育祭やらの練習で疲れたまま書いたのであまり出来は良くないと思います。

第4話

- 学院内図書館2階 -

シルフィードは机の上に様々な本を広げたまま寝ていた。ノートもあるが、開かれているページには何も書かれていない。

「……起こした方が良いかな？」

「当たり前じゃない。叩き起こそう」

アイリとセレーナがシルフィードの背後からゆっくりと近づく。

「あれ？ たしかシグニットさんだよな」

「！」

驚いた2人が振り向くとリサーバがいた。

「何だ、リサーバか……おどろかさないでよ」

「……セレーナ居たんだ」

リサーバとセレーナは同じクラスだ。それも奇跡的に初等部の頃から毎年。セレーナは親しげに接しようとするがリサーバは嫌そうな表情をする。

「リサーバは何でこんな早くから？」

「ソイツの付き添いだ」

リサーバはまだ眠っているシルフィードを指す。

「へえ、2人は知り合いなの？」

「ああ……シルによろがあるなら起こそうか？」

リサーバはセレーナから視線を逸らしアイリを見る。

「たいした用事じゃないから大丈夫」

アイリが答えようとしたが、さきにセレーナが答えた。

「……なら良いけど」

リサーバはシルフィードの隣に座る。

「そうだ、今度の夏休みはどうするの？」

「家に帰るけど……それがなにか？」

「気になっただけ」

「……そうか」

リサーバは小さく舌打ちをしたあと、手にしている本を開いて読み始めた。

「何読んでるの？」

セレーナはリサーバが読んでいる本を見ようと覗き込む。リサーバは鬱陶しそうにしているがセレーナは気づかない。

「『黒魔術の応用』だ」

「リサーバは黒魔術が得意なの？」

「そんなことはない」

リサーバとセレーナが話している後ろでアイリはどうしようかとウロウロしている。

シルフィードに話しかけたいが寝ている。起こそうかと考えるがもしかしたら嫌われるかも……。

アイリはしばらく考えていたが、意を決して起こすことにした。

「ねえ、マグナス君」

声をかけながら肩を揺する。するとシルフィードは起きた。

「ん……アイリか。何か用？」

「う、うん。ちゃんと勉強してるかな、って」

アイリは不安そうにシルフィードと、机の上のノートを見る。

「見てのとおりだ」

「……勉強してないね。寝てたし」

「……心配しなくても手は抜かない」

「そう」

アイリは安心したような顔をする。

「マグナス君は夏休み家に帰るの？」

「いや、俺は学院に残る」

「そうなんだ。えっと……私も残るんだ」

「へえ、そうなのか」

「うん、だから……その……夏休み一緒に宿題しない？」

「ん、わかった」

「ありがとう！」

アイリはセレーナを見る。いつの間にかセレーナはリサーバの隣に座っていた。

「リサーバには将来の夢あるの？」

「いや、まだ決めていないな」

そっか、と言ってセレーナは再び話しかける。さっきからセレー

ナが話しかけリサーバが答えるだけ。話しかけるセレーナは楽しそうだがリサーバは面倒臭そうだ。

「そうだ、ランク分け試験来週だけど調子はどう？」

「まあまあだ」

「そう……わ、私はたぶんランクは変わらないかな」

「そうなんだ」

リサーバの視線は本に注がれたまま、まったくセレーナを見ない。

「さて、そろそろ昼食だ。行こうかりサーバ」

「もう、そんな時間か。……シル、勉強してないだろ」

「気にするな。……それじゃ、お先に」

シルフィードとリサーバは席を立ち、図書館を出た。

「リサーバって格好いいよね」

「そう……だね」

「今日いっぱい話しちゃった」

アイリは、はしゃぐセレーナを見て若干呆れていたがシルフィードと話せてアイリも胸の鼓動が高まっていた。

・ ・ 食堂 ・ ・

「アイツってうるさいよな」

「アイツ？……セレーナか」

シルフィードとリサーバは食堂で昼食を食べていた。

「そうだ！ アイツ嫌いだな」

「どうしてだ？」

「俺が好きなタイプは物静かな人だな。……お前は？」

「俺か？ そうだな……あまり興味ないな」

「お前な、もう少し女子に興味を持てよ。校則違反をしてまで魔法を使って女子の下着を見るヤツもいるんだぜ」

「それは変態だろ」

そうだな、とシルフィードとリサーバは顔を見合わせ笑ってた。

「来週のランク試験は本気を出すのか？」

「ああ。俺も自分がどれほど力があるか確かめたいからな」

「そついえば最近お前の魔法みてないな」

「最近は使ってないからな」

「実技の授業もサボってるな」

「だって面倒臭いからね」

お前らしいな、と言ってリサーバは立ち上がった。

「午後も勉強するのか？」

「いや、午後は姉貴の買い物についていけないといけない」

「ああ、ウィンか……ご愁傷様だな」

ウィンディーネ・マグナスはシルフィードの姉だ。皆からはウィンと呼ばれている。ランクはBで中等部1年だ。同じ年だが誕生日はウィンが早い。

「何がご愁傷様なのかなリサーバ君」

リサーバがゆっくり振り向くとウィンディーネがいた。

「う、ウィン！」

「久しぶり〜。そうだ、リサーバ君もついてこない？」

「遠慮する!」

リサーバは逃げるように去っていった。

「相変わらずだね……行こうか、シル」

「わかったよ姉貴」

――クロリア――

シルフィードとウィンディーネは街で有名な洋服屋に来ていた。

「ねえ、これ似合うかな？ あ、これも良いなあ」

「……はあ」

ウィンディーネは自分が気に入った服を見つけてはシルフィードに似合うかどうか聞いてくる。

「ため息ばかりついてちゃ幸せが逃げちゃうよ」

「思っただけどき、弟よりも彼氏に頼んだ方が良いよ」

「ふふ、シルくうん！ 私に彼氏が出来ないのを知って言ってるのかな？」

ウィンディーネに彼氏がいたことはない。頭も良く、容姿もかなり良い。なら何故彼氏が出来ないのか？

本人は彼氏が欲しいと言ってるが、ウィンディーネが告白すれば高確率で成功するだろう。

だが、ウィンディーネは自分から告白したことはない。告白されそうになったら無理やり話を逸らすとする。

「作ろうとしないだけだろ」

「そう思う？ でもシルも彼女いないじゃん」

「まったく興味ない」

「まだ中1なのに悲しいこと言うね」

「姉貴も中1だろ」

「むう。……そうだ、私達付き合わない？」

「何言ってるんだよ、姉弟だろ」

「でも血は繋がっていない」

シルフィードとウィンディーネに血の繋がりはない。シルフィードの父とウィンディーネの母が再婚して姉弟となった。

シルフィードの母はシルフィードが小さい頃に病気でなくなった。ウィンディーネの父は魔術協会に勤めていたが、魔獣討伐の時に魔獣に殺された。

シルフィードの父とウィンディーネの父は小さい頃からの付き合いで2人とも魔術協会に勤めていた。

ウィンディーネの死後、シルフィードの父とウィンディーネの母は話を重ねるたびに互いに惹かれ合っていた。

ちなみに、魔獣とはモンスターとも呼ばれ、人間以外の魔力を持つ生物のうち人間に害をなすものを言う。

「何を言ってるんだよ」

「結構本気なんだけどね」

「……俺は姉貴を姉弟としてしか見てない」

「……そう、なんだ」

「ごめん、用事があったんだ」

「あ、わかった。……じゃあね」

シルフィードが去っていく姿をウィンディーネはじっと見ていた。

第5話（前書き）

＊注意事項＊

いつも短いですが今回は更に短いと思います。読んでくれる皆様に感謝です。

第5話

一学期の終業式前日、クラス分け試験の日を迎えた。

試験は筆記、実技がある。

筆記は魔法知識、一般常識などがあり、魔法以外にも数学や様々な問題がある。

実技は魔力の大きさを測ったり、魔法の技術を測ったりする。他にも体力も計測する。

学院生は学院内で試験を受ける。

- - 試験会場 - -

シルフィードは筆記を終え、実技に入っていた。実技も残すのは魔法技術だけだ。

「シルフィード・マグナス。使用魔法系統を言的に向かって魔法を放ちなさい」

ターゲット
的は大きさが異なる10個あり、魔法使用10回以内でどれだけ当てられるかの試験だ。

「……使うは黒魔術、系統は炎」シルフィードはまず一発放った。

シルフィードが放った魔法は……全ての的を中心に射抜いた。

「……は？」

シルフィードの魔法は1つの火の玉だったが、途中で10の矢に分かれそれぞれが的の中心を射抜いた。

呆氣にとられた試験官はしばらく呆然としていたが、ハツとしたように実技の終了を告げた。

- - 食堂 - -

「試験どうだった?」

シルフィードがいつもの場所に座った瞬間、アイリがやってきた。

「……ダメだった」

「え……。そう……」

アイリ自身ランクは上がってないと感じていてシルフィードが最後の希望だったが、ダメと聞いて顔を青くした。

「……冗談だ」

「ち、ちよつと! 心臓に悪いよお」

今度は顔を赤くして頬を膨らませるアイリを見て、面白いヤツだなとシルフィードは思った。

「……ヤケに親しそうに話してるね。もしかして付き合ってる?」

「ち、違つよ……ってウィン！」

アイリは顔を赤くして振り向くとウィンディーネがいた。アイリとウィンディーネは同じ部屋だ。仲が良く、セレーナも含めよくつるんでいる。

「あれ？ セレーナは居ないの」

「セレーナはリサーバ君のそこだよ」

「へえ、それぞれ好きな人のもとへ行つたのね」

「ち、ちよつと！ ウィンディーネは行かないの？」

「来てるじゃない。私が好きなのはシルだよ」

「え……。そつか、血は繋がってないんだよね」

「うん。負けないよ」

「え、ええー！」

ライバル宣言をするウィンディーネに顔を赤くしながらアイリは驚いたように叫ぶ。さらに叫んだことで周りの視線を集めた。そのことでさらに顔を赤くする。

「ほら、シルに好意を寄せてる乙女は居るんだよ……って、シル！」

ウィンディーネが振り向いた時にはシルフィードは既に食堂から居なかった。

「ジッケンハセイコウシタカ？」

ルーは2階で読書しているディザを見つけ話しかけた。

「失敗だ。……肉体的にも精神的にも脆すぎた。せめて、Bランクだな」

ディザはつまらなそうに言った。

「ソウイエバ、ランクワケシケンハドウダッタ？」

「変わらないね。それに、ランク分け試験よりも実験が優先順位が高い」

さて、と言ってディザは立ち上がる。ディザはルーを見て笑みを浮かべる。

「ランク分け試験の結果は明日の朝、学院内の掲示板に表示される。そこから高いランクのヤツを探す」

「ヘエ、アラタナジッケンダイヲサガスンダナ……ナカマサガシハオワッタノカ？」

「仲間？ ……ああ、駒のことか。今作っている最中じゃないか」

ディザが何を言ってるのかイマイチ理解出来ないルーは首を傾げる。

「実験の成功体が駒となるんだ」

ディザが行う実験は、人間の体を器として別の魂を入れ込むモノだ。

入れ込む魂は人間ではなく、悪魔だ。

悪魔は強い者であれば人間と同じ見た目になることができる。だが、全体的に言っていると出来ない悪魔が多い。

弱い悪魔と言えども人間で言えばBランクを超える。器が脆いと魂が入り込めず器は精神的に崩壊する。入り込めたとしても肉体が魂の動きについていけないと器は崩れる。

成功した場合は人間の姿と悪魔の姿を使い分けることが出来、部分的に変化させることも出来る。

器になった者の魂は悪魔の魂によって消え去ることが多いが、器の魂が悪魔の魂よりも強ければ悪魔の魂は消え去る。悪魔の魂が消え去っても悪魔の姿になることが出来る。

場合によっては両者の魂が消え去り、新たな魂が入ることもある。それとは逆に、両者とも消えず1つの器に2つの魂が入ることもある。

「ナルホド……」

「まだ早いが今日は寝る……じゃあな」

- - 男子寮前 - -

ここにはセレーナとリサーバがいた。

「……いつまでついてくるんだ？」

「あ……ちょっと話があるんだ」

「何？」

俺は早く部屋に行きたいんだが、とりサーバは小さく呟いた。

「私、リサーバのことが好き！ つきあってください」

「……ふえ？」

いきなり告白され、目を見開いて口をパクパクさせるリサーバ。顔が真っ赤なセレーナはリサーバを真っ直ぐ見つめている。

「ち、ちょっと待て……お前、俺が好きなのか？」

「うん。……返事は遅くても良いから、待ってるね」

呆然とするリサーバを背にセレーナは女子寮へと帰って行く。

- - 次の日 - -

全校生徒が掲示板の前に来ていた。掲示板は敷地内に多数存在するが、どの掲示板の前にもたくさんの生徒がいる。

「……やりすぎだな」

自分のランクを見てシルフィードは呟いた。

シルフィードの視線の先にはこう書かれていた。

『中等部一年シルフィード・マグナス……Sランク』

第6話（前書き）

＊注意事項＊

今回も短いと思いますがご了承ください。

いきなりですが皆様のアイデアを募集したいと考えています。後
書きに簡単に説明しますので気が向いたら読んでください。

第6話

Sランク……魔術協会によって定められた魔術師ランクの最高位。終業式が終わった後、シルフィードとアイリは学院長室に呼び出されていた。

「約束通り、処罰は免除だ。しかし、Sランクになるとはね」

「自分でもビックリしています」

「Sランクになったということで王宮に来るようにと連絡があった」

Sランクになった魔術師は国王に会わなければならない。基本的にその場で魔術騎士団と呼ばれる王宮警備隊のようなモノにスカウトされる。

「……夏休みなのに」

「規則だからな、学院内ではなく国内での」

シルフィードはため息をついた後学院長室を出て行った。アイリはその後ろをついて行く。

「凄いよ、マグナス君。いきなりSランク!」

「ああ、やりすぎた」

「……やりすぎた?」

「ああ、せめてBランクにしようかと思っていたけど久しぶりに使ったから力を出しすぎた」

「ランクは高い方が良いと思うけど」

アイリはそう言い、不思議そうに首を傾げた。

「目立ちたくないんだよ」

「Gランクの時点でかなり目立ってたよ」

ツツコミを入れるアイリに「違うんだ」と言っただけでシルフィードは頭を抱え込んだ。

「Gランクなら国では目立たない。でもSランクなら国内だけじゃなく世界中に注目されるんだ」

Gランクは珍しいことではない。ランク分け試験をサボればすぐになれる。だが、Sランクは本気を出してもなることは難しい。

知識や技術など努力で補う点に加え、素質も必要だ。だからSランクは国内だけではなく世界中で貴重だ。

「でも、凄いよ。それに、そんな凄い人と知り合いだなって……」

「はあ……明日早速王宮だ。幸いにもこの街に王宮があるのがせめてもの救いだな」

魔術学院は世界中にあり、クロリア国内にも多数存在する。王宮

からかなり離れたところに存在する学院もあり、そこにいたら何日かけて王宮に行くのだろうかと思つた。

――クロリア王国図書館――

「ナア、オレガオモウニSランクヲジッケンダイニスレバイインジヤナイカ」

「Sランクは無理だ。王宮からの呼び出しもたまにあるだろうし、Sランクがいなくなれば大騒ぎだ」

「……ナラ、Bランクノウィンディーネトカイウヤツカ？」

「ああ、幸いなことにウィンディーネは夏休みも学院に残るそうだ」

ディザはウィンディーネと同じクラスの男子に聞いてもらい情報を得た。

「デモウィンディーネトSランクノシルフィード、ドチラモマグナスダトイウコトハキヨウダイナンドロ？」

「そうだ、シルフィードが王宮に行つてゐる間に実行する」

ディザは薄気味悪い笑みを浮かべていた。

――男子寮――

シルフィードは王宮へ行く準備をしていた。フィルは終業式が終わった後すぐに荷物を持って家に帰った。

なので、夏休みの間は1人でこの部屋を使えるはずだったが王宮に呼び出され、さらには数日間は王宮に泊まることになった。

王宮には教師も一緒に、ノウフォン・ミケロッドという女教師……いつもシルフィードがババアと呼んでいるがまだ23で美人だ。

「……で、なぜお前がここに」

シルフィードは自分のベッドの上で寝転がっているキースにたずねる。

「暇だから……明日からお前は王宮、俺はリトリッジに旅行。しばらく会えないからいいじゃん」

「旅行？ リトリッジって言えば文化財巡りか……お前歴史に興味があつたか？」

そんなわけないじゃん、とキースは笑う。

「俺が興味あんのは昔そこで研究されてた魔法だ」

「……たしか召喚術の類だったな」

召喚術にも様々なものがあり、遠くの物（人）を近くに呼び出したり、魔獣を呼び出したりするものがある。

禁止されているものとしては悪魔や天使などの召喚がある。

「昔は召喚した悪魔を人間と一体化する研究がされていたらしい」

「それは悪魔が人間の体に乗っ取るのとは違うのか？」

悪魔は人間の体に憑依することが出来る。その時の人間の魂は気を失っている状態だという。

「体だけじゃなく魂も一体化させるんだ」

「なら強い魂が残るわけか」

「お、そうだ。だが例外もあるらしいが」

「そもそも成功してるのか、その研究は？」

「その資料がないんだ」

かなり前の研究なので資料が紛失してもおかしくはないが誰かが故意に紛失させた可能性もある。

もしくは盗まれた可能性もある、とキースは考えているようだ。

「リトリッジに行つて研究に関する情報を手に入れられるといいな」

そうだな、と行つてキースはシルフィードの部屋を出て行つた。しばらくすると、今度はリーチとリサーバが部屋に入ってきた。

「なあ、リサーバの悩みを聞いてくれ」

「……どうしたんだ？」

「いや、この間セレーナに告白されてさ……それまで嫌いだったの

に、最近何だか妙に意識しちゃって」

「付き合えばいい」

顔を赤くして言うリサーバにシルフィードは冷たく言い放つ。リ
ーチはシルフィードの隣で頷いている。

「だろ？ 俺もそう言ったんだが……」

「俺は……俺のタイプはセレーナみたいなタイプじゃないはず、な
のに、なのに……この気持ちは何なんだあ！」

「リーチ、リサーバを連れて部屋から出てってくれ！」

「了解」

「は、放せ兄さん！ 俺は、俺はあ！」

――ボタン――

リーチはリサーバを引きずって部屋を出て行った。だが、シルフ
イードの部屋にいてもしばらくの間リサーバの叫び声が聞こえてい
た。

「……もう、誰も来ないよな」

頭を抱えてベッドに倒れ込むシルフィードだが、すぐにノックの
音が聞こえる。

「今度は誰だ……」

シルフィードはゆつくりと扉に向かって歩いていく。シルフィードが扉を開くとアイリがいた。

「あ……こんばんは」

「……ここ男子寮だぞ」

「わかってるけど……王宮へ呼び出して凄いな」

「もとはといえばお前のせいだからな」

「うん、そうだね……ごめん」

「……まあ、俺も悪いが」

「いや、マグナス君は校則違反をしてないから……私が校則違反をしてそれに巻き込んでしまっ……」

アイリは徐々に落ち込んでいく。それを見て気まずそうにシルフィードは頭をかく。

「お前、何しに来たんだ？」

「あ、そうだった。帰ってきたら一緒に宿題して欲しいんだ」

「ああ、勿論だ。約束してたからな」

「……ありがとう。それじゃ、行ってらっしゃい」

「……行つて来ます」

アイリはニツコリと微笑み、部屋を出て行つた。

「さて、寝るか」

ベッドに向かおうとするが、再びノックの音がした。シルフィードはため息をついて扉を開けた。

「ヤッホー、シル。ウィンだよお」

――ボタン――

シルフィードはウィンディーネと目があつた瞬間扉を閉めた。

――ドントッ、ドントントッ――

「開ける」

ウィンディーネは扉を叩き壊すような勢いでノックをする。しばらくシルフィードは無視をしていたがノックが止まることはなく、いやいやながら扉を開けた。

「ヤッホー、いきなり閉めるなんてヒドいよ」

「さっきから次々に入ってこられて最後に姉貴って……気が滅入るな」

「本当にヒドいよ」

ウィンディーネは頬を膨らませる。

「で、何のよう?」

「明日王宮に行くんでしょ。……その前に話したいことがあって」

「……何だよ?」

真剣な表情になるウィンディーネをみて、シルフィードは顔を引き締める。

「朝から誰かに見られている気がする」

「……ストーカーか?」

「そんなんじゃない。はっきり言えないんだけど人のようで人ではない気配がするんだ」

「何だよそれ」

「わからない。でも、確実に誰かが見てる……今は気配はしないけど」

ウィンディーネは室内にいる時はあまり気配を感じないが、窓の近くや外に出ると誰かに見られている気がするという。

「……気をつけろよ」

「心配してくれてるんだ」

「そりゃあ、姉貴だしな」

「そこは大切な女だからとか言っただけだな」

「大切なのは変わらない」

「そうだね。それじゃ、お休み。……なるべく早く帰ってきてね」

「……わかった」

ウィンディーネが部屋を出てからもシルフィードは扉をじっと見ていた。

「……ウィン」

第6話（後書き）

＊募集説明＊

体育祭が終わり、本格的に受験シーズンとなつて参りました。なかなか時間が取れず、登場人物のアイデアなどがあまり浮かびません。

それで、もしよろしければ皆さんからアイデアを貰いたいと思います、募集に至つたわけです。

募集するのは？登場人物、？国です。

？登場人物は名前、年齢、性格、ランクなど詳しいほど有り難いです。

物語にどのように関わらせたいかも記載してくれると助かります。

？国はいずれ主人公達を旅行等といった形で外国に行かせたいと考えているのでそのためです。

場合によってはその国が舞台となる小説も書くかもしれません。

こちらも詳しく記載してくれると有り難いです。

募集により集まったアイデアは出来る限り使わせて頂きますが、希望通りに書けないこともあるかもしれませんのでご了承ください。

採用することにしたアイデアは活動報告にて知らせたいと思っています。

募集はしばらくしたいと思っています。是非ともご協力をお願いします。

します。

第7話（前書き）

＊注意事項＊

最近、新たに小説を書くかどうかと考えています。書くとしてもこの小説は続けますし、同じ世界観にするつもりです。

まあ、あくまでも考えているだけですが……。実行した場合は更新スピードが落ちます。ご了承ください。

第7話

・クロリア王国クロリア王宮・

シルフィードは王宮の前に来ていた。王宮は首都クロリアの中心に位置している。王宮内部は一般人立ち入り禁止だ。

立ち入りが許されているのは呼び出しを受けた者、許可をもらった者、魔術協会幹部、魔術騎士団などだ。

「ミスター・マグナス、くれぐれも失礼のないように」

「わかってます、ミケロッド先生」

2人は魔術騎士団の兵士に案内され部屋に連れて行かれた。

「全員が到着するまでの数日間、2人にはこちらの部屋で過ごして頂きます」

王宮敷地内にある客人用の建物には二人部屋が多数あり、食堂や浴場もある。

二人部屋のひとつに通された2人は部屋を見回す。

「……凄い」

部屋を見てノウフォンが呟いた。部屋はそれなりに広く、どの家具も高価なものだろう。寮とは大違いだな、とシルフィードは思った。

「お食事の時間になりましたら呼びに来ますのでそれまでゆっくり
しててください」

兵士はそう言って部屋を出て行った。

「全員って何人来るんですか？」

シルフィードはノウフォンにたずねる。

「全員で7人来ます。1番若くてアナタと同じ年齢。今回は全員学生なので最高22歳までです」

初めてSランクに上がった者は長期休業期間中に王宮に行かなければならない。学生、社会人に関わらず呼び出しはかかる。学生の場合は教師がついて行くことになる。

「……はしゃぐのは良いですが、呼び出されたのは俺ですから、あまり騒がないで下さい」

「……はい」

ノウフォンは教師だが、まだ若く王宮に来たことも初めてで、この部屋ほど豪華なホテルにも泊まったこともない。はしゃぐのも当然だ。

ノウフォンは顔を真っ赤にして俯いた。

「……ミスター・マグナス、聞きたいことがあります」

「俺にミスターをつけたのは久しぶりですね……何を聞きたいんですか？」

「今までGランクでいたのは何故ですか？」

「Gランクだと期待すらされませんからね、気楽にやれる」

「そうですか……その、落ちこぼれと言ってすみません」

「気にしてないです。それよりさっきからどうしたんです？」

「いえ……私としたことがランクだけで生徒を見ていました。これからは気をつけます」

「は、はあ……頑張ってください」

ほとんどがランクで見えると思うが、とシルフィードは言いたいがここはノウフォンを応援することにした。

・マジックゲート敷地内図書館・

「えっと、ここはこうして……」

「あ、そうか……」

ウィンディーネとアイリは図書館の2階で夏期休業中の宿題をしていた。

「もう着いた頃かな？」

「近いからすぐに着くよ」

「わかってるけど……あ、セレーナ」

アイリがふと階段の方をみると顔が赤いセレーナを見つけた。セレーナはアイリに近づいてくる。

「あ、アイリ……思いつき私を殴って」

「な、何言ってるの!」

「わ、私ね。リサーバからOKもらったの」

「何が？」

「告白……付き合ってくれるって」

「ほ、本当! 良かったね……リサーバ君は？」

「さっきリーチと一緒に家に帰ったよ」

その時に付き合ってくれて言うてくれたんだあ、とセレーナは満面の笑みで言う。

「……本当に殴っていい？」

ウィンディーネは笑顔でアイリにたずねる。

「が、我慢してくれると嬉しいな」

「そっか……ちょっと部屋に戻るね。夕食には来るから食堂の席取っててね」

「わかった」

ウィンディーネは図書館を出て、女子寮に向かおうとするが視線を感じて振り向いた。

「……やあ」

「フレイル先輩」

ウィンディーネが感じた視線の正体はディザだった。

「ちょっといいかな？」

「……何ですか？」

「……初めて君を見たときから……何だい？」

ウィンディーネが睨んでいることに気づいたディザは言葉を止める。

「先輩が、昨日からずっと私を見ていたんですか？」

「？ 一体何のことだ」

ウィンディーネはランク分け試験の翌朝から視線を感じるということをディザに伝えた。

「いや、僕は知らないよ？」

「なら、一体誰が……」

ディザは、もしかしたらルーか？　と思うが口には出さない。

「僕が犯人を探すよ」

「気持ちは嬉しいです。だけど、まだ先輩のことを信じたわけではないので遠慮します」

そう言っ てウィンディーネはディザに背を向けて歩き出した。

「ザンネンダッタナ、ディザ」

「……犯人はお前だろ？」

「ソウダ。デ、ドウスル？　ケイカクハシツパイダナ」

「いや、違う。いざとなったら無理やりにも……まだ手はある」

アイツは手に入れる。ディザはウィンディーネが去った方をただジッと見つめていた。

「……どうやって学院内に入ったんだ？」

「キギョウヒミツダ」

――クロリア王国クロリア王宮魔術騎士団訓練所――

王宮内に存在する魔術騎士団の訓練所、そこで2人の兵士が剣術の練習をしていた。

この世界は魔法がよく使われるが、武術も勿論使われる。武術は剣術や柔術、槍術など、様々な種類が存在する。

武術は魔法学院でも学ぶが道場も存在する。

訓練所で使う武器はすべて訓練用の武器であり、殺傷能力はほとんどない。

「騎士長、ありがとうございます」

1人の兵士グレイ・グレファスは騎士長と呼んだ兵士に礼を言う。

魔術騎士団は数チームに分かれていて、それぞれに隊長と副隊長がいる。隊長がチームのトップだということに大して、騎士団のトップは騎士長と呼ばれる。

ちなみにグレイは隊長だ。隊長は日替わりで騎士長に訓練を見てもらえる。

「そういえば今騎士長の息子さんが王宮内にいるようですよ」

「シルが？」

騎士長の名前はグノムス・マグナス、シルフィードとウィンディーネの父親だ。Sランクにして騎士長である彼はクロリア最強の魔術師と呼ばれている。

だが、それはあくまでも王宮内だけの話だ。なぜなら魔術騎士団のメンバーは一般人には知らされることはないからだ。

グノムスがSランクであることを知っている人は居ても騎士長で

あることを知っているのはほんのわずかだ。

「Sランクになったみたいですよ」

「何、アイツが……目立ちたくないと言っていたのにSランクになるとはな」

グノムスが腕を組みながら呟く。グレイはそれを見て微笑んだ。

「騎士長はお子さんの話になると楽しそうですね」

「まあな、親バカと言われることもある」

グノムスは笑いながら着替えるために宿舎に向かう。グレイはそうですね、と言ってグノムスを追いかけた。

- - 王宮内客人用食堂 - -

シルフィードとノウフォンは兵士から食堂に案内された。食堂も大きく、学院とは大違いだ。ノウフォンが目を輝かせているのを苦笑いしながらシルフィードも周りを見回す。

既に4人が席に座って料理を待っていた。どうやら今日来たのはシルフィード達を含め6人のようだ。

席は既に決められていて、シルフィードの席の隣は同年である少女だった。シルフィードが席に座ると少女が話しかけてきた。

「はじめまして、エミリー・シュバルツといいます。ランクは……わかりますよね。サンライト学院の中等部1年です。よろしく願います」

「俺はシルフィード・マグナス、マジックゲートの1年だ。気軽にシルと呼んでくれ。よろしくな」

サンライト学院。首都クロリアから東に向かい森を抜けるとヴァニアスという街があり、その街にサンライト学院は建っている。

「同い年なんですね。そこにいるアリサ・ヘストルは高等部1年だそうです」

シルフィードがエミリーの視線をたどるとアリサという少女がいた。まだ女子しか来てないのか……、とシルフィードは居心地が悪そうに周りを見る。

食堂の扉が開き、2人の男性が入ってきた。その内の1人をシルフィードよく知っていた。

「ええ皆さん、王宮へようこそ。私は魔術協会に勤めているバル・ゼブルです」

「俺はグノムス・マグナス、数年前から魔術騎士団騎士長をやっている」

グノムスの言葉に周りはざわめく……といっても6人しかおらず、1人は平静を保っている。

どの国にも魔術騎士団は存在する。その中でもクロリア魔術騎士団はトップクラスの实力を持ち、騎士団のトップである騎士長は最強の魔術師だ。

そんな凄い人に会えたことに5人は驚いていた。エミリーとノウ

フォンは、ふとあることに気づいてシルフィードを見る。

「マグナスって……もしかしてシル君のお父さん？」

「……ああ、そうなるな」

2人が、信じられないという様子でシルフィードを見ているとグノムスがシルフィードに近づいてきた。

「久しぶりだな、シル。元気にしてたか？」

「勿論だ。父さんこそ元気だったか？」

「当たり前だ。俺を誰だと思っている。……話したいことは山ほどあるが、また今度な」

さて、と言ってグノムスは周りを見渡す。

「今回のランク分け試験では、なんと7人、しかも学生がSランクになった。これは異例なことだ」

毎年、新たにSランクが1人出れば良い方だ。ほとんどの場合Sランクになった者は王宮に泊まるのは1日だけだ。

全員が揃ってから国王に会うのだが、7人もいて学院がバラバラだ。揃うまで時間がかかるので長ければ1週間王宮に泊まる可能性もある。

この世界の交通手段は基本的に徒歩だ。手名付けた魔獣に乗ったり、魔獣が引く馬車ならぬ魔獣車があるが魔獣だということでは不安

に思う者が多く、滅多に使われない。

「魔術騎士団に入ればいつでも王宮に入れるが、学生は騎士団に入れない。まあ全員が入るとも限らんな。王宮で過ごす数日間、是非とも楽しんでくれ」

グノムスが言い終わると同時に厨房の扉が開き、料理が運ばれてきた。

どの料理も高級な食材を使っている。

「……美味しそう」

エミリーは呟く。口には出さないがみんなも同じ気持ちで料理から目を離さない。

「それでは召し上げ」

シェフがそう言っていると待ってましたと言わんばかりに誰もが料理を食べ始めた。

「……みんな凄いな」

シルフィードは周りを見てそう呟いた。ガツガツと食っている者が多かった。それに対してエミリーはゆっくり食べていた。

「食べるの遅いんだな」

「いえ、そうではなくゆっくり味わって食べたいんです。こんなに美味しい物、今度いつ食べれるかわかりませんから」

なるほど、と思ったシルフィードもゆっくり食べていた。

ふと、扉が開き女性が入ってきた。

「マグナス様、ロフォカル様がお呼びしてます」

「ルキフグスが？ わかった、ありがとう」

グノムスは女性に案内されて食堂を出て行った。

- - 王宮内魔術協会会長室 - -

魔術協会の本部はこの街にあり、すべての魔術協会を統べる会長の部屋は王宮内にある。

会長ルキフグス・ロフォカルに呼び出され、グノムスは会長室に来ていた。

「魔術協会ヴァニアス支部から連絡があつた。最近遺跡荒らしが頻発している」

ヴァニアスの北には遺跡があり、まだ発掘調査の途中だ。そこに盗賊がやってきて遺跡で掘り出された物が盗まれたり壊されたりしている。

「そこで、魔術騎士団に救援要請が来た」

魔術騎士団は王宮警備以外にも王国内で起きる様々な事件の調査や討伐依頼を受けることもある。

「盗賊なら支部でも対処出来ると思うが」

「報告によればSランク魔術師が盗賊の中にいるようだ」

魔術協会本部でもSランクは数えるほどしかない。支部に至ってはAランクが1人いれば良い方だ。

「わかった。今すぐにでも向かう。俺1人でも充分だが、念のためグレイも連れて行く」

「ああ、大丈夫だと思うがくれぐれも油断はしないでくれよ」

わかっていて、と言ってグノムスは会長室を出た。

第8話（前書き）

＊注意事項＊

だんだん登場人物が増えて来たのでそのうち人物紹介を作ります。
います。あまり深くは考えてないので期待はしないほうがいいです。

第8話

夕食を食べた後、それぞれ用意された部屋に戻った。シルフィードは王宮内の散歩をしている。もちろん許可をもらっている。

シルフィードが散歩をしていると、シルフィードと背があまり変わらない少年がいた。少年はシルフィードに気づいて近づいてきた。

「おい、お前。王宮で何してる」

「俺は国王に呼び出されただけだ。お前は誰だよ」

「お前、Sランクなのか！……俺はルベライト・セイファートだ」

「セイファート……もしかして」

「ああ、お父様は国王だ」

スプリガン・セイファート、クロリア王国の国王だ。

「王子に向かってお前と言ってしまい申し訳ございません」

「大丈夫だ。それより、お父様に呼び出されたということはSランクだろ？ 凄いな」

「いえ、ちょっとした手違いで……」

「手違い？ まあいい、お前に頼みがある」

「私に出来ることなら何なりと」

「俺と友達になってくれ！」

「……友達に？」

予想もしなかった頼みごとにシルフィードは聞き直した。

ルベライトは生まれた時から今まで1度も王宮から出たことがない。魔法学院で学ぶとされていることは専属の家庭教師が教える。

王宮内にはルベライトと同年代の者はいない。それなりに話す人はいても友達と言うには年が離れている。

ルベライトは魔法学院に通っていたら中等部1年でシルフィードと同学年だ。

「私のような者でよろしければ」

「ああ、それと友達に敬語使つなよ」

「……わかった、ならルベライトと呼ばせてもらう。俺はシルフィード・マグナス、シルと呼んでくれ」

「マグナス……騎士長の息子か」

「ああ、そうだ」

「騎士長にはいつもお世話になっている。魔法や武術は騎士長から教えてもらっている」

騎士長の息子ならSランクだということも頷けるな。ルベライトは腕を組んで頷いた。

2人しばらく魔法学院のことや王宮のことを話していた。

「む、そろそろ戻らなければ皆が心配する。シル、また明日会えるか？」

「たぶん、許可がもらえたらの話だが」

「そうか、いざとなったら俺が出向く」

「はは、ならまた明日だルベライト。おやすみ」

「ああ、おやすみ」

ルベライトが帰って行くのを見送ったあとシルフィードは客人用別館に戻った。

客人用別館の2階に宿泊用部屋があり、シルフィードが用意された部屋に向かっていると、部屋の前にエミリーがいた。

「どうした？」

「あ、シル君。今夏休みですから宿題があるんです。わからないところがあるからもしよろしければ教えてもらいたいと思ひまして……」

「いいけど……教師に聞けばいいんじゃないか？」

「私の付き添いの先生はもう寝てしまって……今日はもう遅いですし迷惑ですよ」

「あ……そうだな。なら明日明るいうちに来てくれ」

「わかりました」

エミリーは微笑んでお辞儀をしたあと部屋に戻っていった。

- - 次の日 - -

朝食を食べにシルフィードとノウフォンが食堂に向かうと、アリスと付き添いの教師がいた。

「あ、オハヨー。……名前なんだっけ？」

「シルフィード・マグナス。気軽にシルと呼んでくれ」

「ん、了解。私の名前はエミリーに聞いたよね。……年離れているけど敬語はいいからね」

「わかった」

「あ、シル君。おはようございます」

遅れてきたエミリーがシルフィードに挨拶をする。

「おはよう」

「エミリーちゃん、私には？」

「はい。アリサさん、おはようございます」

「よくできました」

満足したようにアリサが言う。

その後、料理が運ばれてきて皆美味しく食べたあと昼食まで自由に過ごすことになった。

予定では今日来るSランクは2人。午前中に来ることになる。

朝食のあと部屋に戻ったシルフィードが散歩しようか考えていると、扉を誰かがノックした。

「はい」

「シル君、今勉強を教えてもらえるでしょうか？」

「ん、わかった」

シルフィードは扉を開けエミリーを招き入れた。ちなみにノウフオンは教師達と食堂で話していた。

シルフィードがエミリーに教えていると再び誰かがノックした。

「今度は誰だろう？」

シルフィードが扉を開けるとルベライトがいた。

「シル、来てやったぞ」

「頼んでないけどな……まあいいや」

シルフィードはルベライトをエミリーに紹介する。王子と聞いてエミリーは驚いた。エミリーはかなり真面目なようで、ルベライトに対して敬語を止めようとはしなかった。

そして昼食の時間。シルフィードとエミリーが食堂にいくと見知らぬ学生2人と教師1人がいた。

「帰りたい帰りたい帰りたい」

「え、えつと……」

「カムバック、俺のフリータイム！」

「え、え、え」

「……お前らもうちょい場所をわきまえろ」

ずいぶん個性的な生徒のようだ。

「でもよ、先生。俺は無理やり連れてこられただけっしょ？ 帰りたいくもなるじゃん」

「わ、私は嬉しいけどな……」

「あゝ？ お前がいることも帰りたい原因だ」

「え……ごめん」

「とにかく今すぐ帰らせてくれ」

「うぜえ、帰りたいなら帰れ。だが帰ったら殺す」

「物騒だな、オイ」

教師に向いてない、とシルフィードは思う。口だけではなく態度も悪すぎだ。

「ヴォイド君？」

「ん？ ……ノウフォンか！」

ノウフォンが教師に声をかけるとすぐに反応した。

ヴォイド・アキシオン、都市シルドリアにある学院ソーディアムの教師でノウフォンの幼なじみだ。

「お前が引っ越して以来だから五年ぶりか？ あまり変わってないな」

「それを言うならヴォイド君もだよ」

そうだな、と言ってヴォイドは笑った。

「……昔から綺麗だったけどさらに綺麗になった」

「ヴォイドも……さらに格好良くなった」

「……何だコレは、ラブコメか？」

「同感だな……俺はシルフィード・マグナスだ」

「俺はコーネリア・オブシディアンだ」

「私は……」

少女が自己紹介しようとするのをコーネリアが遮る。

「コイツはミレイナ・クロツカス……あまり関わらないほうが身のためだ」

「……ごめん」

「……ふん。ちなみに中等部1年だ」

「俺と同じ年か、よろしく」

「ああ」

シルフィードとコーネリアは握手をした。ミレイナは俯いたまま、指定された席に座った。

ちなみにノウフォンとヴォイドはまだ話している。若干2人の顔が赤いのでシルフィードはもしかしたら両思いじゃないかと考える。

しばらくすると他のメンバーも揃い料理を食べ始めた。

――首都クロリア――

ウィンディーネは昼食を食べたあと1人で街に来ていた。街で一番大きな商店に行き本を買うつもりだ。

商店についたウィンディーネは書籍売り場に着くとすぐに目的の本を探し始めた。本の名前は『恋する乙女 夏休み特別号』だ。

『恋する乙女』は国内で人気がある女性用雑誌で内容は「男にモテるには」、「素敵な彼の見つけ方」、「成功する告白」など恋愛に関するものばかりだ。

目的の本を見つけたウィンディーネは手に取ってパラパラとページをめくってみる。

「へえ、そんな本読むんだ」

ウィンディーネが振り返るとディザがいた。

「こ、これはですね……」

ウィンディーネは慌てて本をもどし、何か言おうとするが言葉がみつからずオロオロとしている。それをみたディザは笑みがこぼれた。

「わ、笑わないでください。それより何のようですか？」

「ん、本を買いにきたら君を見つけたからね」

「そうですか……何の本を買ったんですか？」

「これだよ」

デイザがウィンディーネに見せたのは『魔法構成知識応用魔術作成基礎応用編』と書かれた本だ。

「な、なんだか難しそうですね」

「簡単だよ、魔法を作る人がよむ入門書みたいなものだ」

「自分で魔法を作るんですか？ 凄いですね」

「本当に凄いのは最初に魔法を作った人だよ。そしてそれがみんなに使われてる。僕もみんなに使われるような魔法を作りたいんだ」

「先輩が作る魔法ですか……使ってみたいですね」

「そう？ なら、出来たら教えるね」

「ありがとうございます」

嬉しそうにウィンディーネは笑った。2人は本を買ったあと一緒に学院に戻ることにした。

「あの……信用してないって言ってますませんでした」

「いいよ、気にしないで。……話があるんだけどここではちょっとあれだから人気のないところに行こうか」

「？ はい、いいですよ」

不思議に思いながらもウィンディーネはディザについていった。
ディザは薄暗く人がまったく通らない路地裏にウィンディーネを連れて行く。

「あ、あの……話って何ですか？」

「……初めて君をみた時から心を惹かれていた。僕と付き合ってくれないか？」

ディザの告白に驚いたがウィンディーネは申しわけなさそうにディザをみた。

「ごめんなさい、私には好きな人がいるんです」

ウィンディーネの好きな人。それはシルフィードだ。1度振られはしたがまだ諦めていない。

「……やっぱりか」

「え？」

「ルーの報告どおりか。こうなったら些か気が引けるが……やるしかないようだ」

「あ、あの、何のことですか？」

「僕は君が欲しい……実験台として」

「……やっぱり、視線の犯人は！」

「ちょっと違うな、それは僕の仲間がしたことだ」

「仲間？ …… それよりも実験って何ですか！」

「どうせ君は帰れないから教えても問題ないか」

そう言っで、ディザは話だす。人間を器として悪魔の魂を注ぎ込むこと。それにはより高ランクの魔術師が望ましいが、高すぎると悪魔の魂が消えるかもしれないこと。

そして、既に1度実験をして失敗したこと。

「アグライア先輩を実験台にしたんですね」

「ああ、そうだ。そして次の実験台は君だ」

ウィンディーネは逃げようとするが、背後に気配を感じて振り向く。

「ヤア、コンニチハ」

「だ、誰？」

「君が感じた視線の正体。そして、実験の成功例だ」

ディザはルーについて話す。ルーははるか昔実験が行われていた頃の最後の成功例であること。

実験の途中で研究所が何らかの原因で廃棄され、ずっと閉じ込められたままだった。研究所が廃棄される前に悪魔の魂が入り、人間

の寿命をはるかに越えてしまった。

悪魔によって得る力は違うものの、悪魔の寿命は引き継がれる。寿命といえど悪魔は寿命は永く、不老不死になったといってしまう過言ではない。

ルー以前の成功例はどうなったのか？ それは、生き残りはいるだろうがほとんど始末された。不老不死とはいえどあくまでも寿命では死なないだけで心臓を一刺しすると死ぬ。

ルーを研究所から出したのはディザ……ではなく、リトリッジに住む男性だと言う。

その男性は今行方不明であり、死んだという噂もある。

ディザもその男性に会ったことがある。本名は知らないが、男性はメシアと名乗っていた。

「さて、お喋りも終わりだ……手荒なことはしたくない、潔くついてきてくれると有り難い」

「……わかりました」

「聞き分けがいいやつは嫌いじゃないよ」

ディザはウィンディーネを街の外れにある廃屋に連れて行く。その地下には研究所だったため、そこでディザは実験をしている。

「……何をすればいいんですか？」

「何もしなくていいよ。暴れると困るから拘束させてもらっけど、真っ暗な部屋にいてもらっただけだから」

「どうやって悪魔の魂を？」

「召喚術を使って魂だけを呼び出す」

召喚術は魂を入れる器があれば器に魂を呼び出すことができる。

死人の魂を呼び出すことも可能だが、死んでいる魂を呼び出すのは難易度が高く、成功しても魂はすぐに器から抜け出す可能性がかなり高い。

ウィンディーネは拘束され真っ暗な部屋に閉じ込められた。

暗い……。長い時間閉じ込められたら気が狂うかもしれない。

逃げた方が良かった、とウィンディーネは考えるがすぐに思い直す。逃げてもディザには捕まった。下手すると抵抗したことで殺されたかもしれない。

実験は死ぬ可能性が高いだろう。死ぬ前にもう一度だけでもシルフィードと話したかった。父親に会いたかった。母親に抱きしめてもらいたかった。

自然と涙が流れてくる。

ウィンディーネは涙をこらえようとするが、止まることはなく、むしろ溢れ出してきた。

もう一度みんなに会いたい。

そう思ったウィンディーネはゆっくりと意識を手放した。

第9話（前書き）

＊注意事項＊

今回はシルフィードは出てきません。今回は戦闘描写が入ります。
下手でしたので期待はしないこと。

第9話

- - ヴァニアスの遺跡 - -

魔術騎士団騎士長のグノムスと魔術騎士団第1隊隊長のグレイは盗賊討伐に来ていた。

盗賊が出るのは夜が多く、夜まで待っていた。辺りはもう真っ暗だ。立てられている松明の火だけが辺りを照らした。

「この遺跡によく盗賊が現れるということは拠点はここからあまり遠くないはずだ」

「そうですね。……それにしてもSランクなのに盗賊なんて。何があつたのでしょうかね」

「正確にはSランク相当だ……。案外、普段は真面目に働いてるかもな」

その可能性もありますね、と納得するグレイ。

「遺跡の発掘調査は盗賊の影響で一時中断、遺跡内には魔術協会ヴァニアス支部によって作られた警備隊が配置されている」

「盗賊、現れるでしょうか？」

「……おい、集中しろ」

「騎士長？」

グレイがグノムスを見ると、グノムスは腰につけた剣に手を当てて目を閉じていた。

「……来る」

「ウオオオ！」

グノムスが目を開いた瞬間、盗賊達が暗闇の中から現れた。

「クロリア王国魔術騎士団騎士長グノムス・マグナス、いざ参る！」

「おなじく、クロリア王国魔術騎士団第1隊隊長グレイ・グレファス、いざ参る！」

2人は剣を抜き、盗賊達にかかっていく。既に周りからは剣と剣がぶつかりあう金属音や、魔法がぶつかる音が聞こえていた。

「遺跡内への進入は許すな……！」

――ガキンツ――

「ほう、これを防ぎますか？　今回は楽しめそうですね」

何かの攻撃を受け止めたグノムスは松明の火に照らし出された敵を見て驚愕する。

姿形は人間だ。だが、グノムスの剣は剣ではなく、爪を受け止めていた。人間の爪としては異常に長く丈夫だ。

「もしや、魔人か？」

魔人とは悪魔の力を持った者のことを言う。生まれた時に既に持っている者もいると言われているが、ほとんどの場合は何らかの原因で突然変異が起きて身体能力などが急上昇する。魔人は自然的に発生する症状だが、人工的に魔人にする研究が行われていた。

どちらの場合でも体を局所的に変化させることが出来る。

「さあね、そう呼ばれることもあるね」

「……やっかいだな」

グノムスは魔人から離れて距離を取る。

「……だいぶ、倒されたようだね」

周りからはほとんど音がしなくなった。ぼんやりと見える程度だが、倒されたのは盗賊ばかりのようだ。

盗賊は実力的には魔術協会の人間の足下にも及ばない。

「どうやら、あとはお前だけのようだね」

「……みたいだね。君が僕の足止めをしておいたことで被害はまったくなくなつたようだね」

「おとなしく投降すれば、命は助けることを誓う」

「投降……つまりは降参だね。降参ってさ勝ち目が無いときにする

ものだよね」

「ふん、お前に勝ち目があるとしても」

「思うね。本気で戦ってやるよ……ヴオ、オ、オオン！」

魔人が雄叫びをあげると、魔人の全身が姿を変える。

その姿はまるで狼……。丈夫な爪を持ち、松明の火に照らされ銀色に輝く毛を持つ。顔も、まさに狼だった。鋭い牙を持ち、常に獲物を狙うような目をしている。

「ガハハハ！ 怖じ気付いたか、人間共」

「貴様も人間だろうが」

「僕は人間よりも、は・る・かに優れている……この姿になると殺人衝動が湧いてくる。さあ、狩りの始まりだ」

そう言つと魔人は姿を消した……。ように見える。魔人は人間の目にはとまらぬ速さで動いている。

「……まずは、1人」

どこかで声がしたかと思えば、1人の魔術師の首が切り裂かれ血が飛び散る。

「マズい、お前ら一カ所に固まるんだ！」

グノムスが叫び、魔術師達が動こうとするが、次々に血を吹き出

し倒れていく。

「ちっ、所詮は魔人……化け物か」

グノムスが気づいた時には、生き残りはグノムスとグレイだけだった。

「はあ、ヤッパリつまらない。……残りは2人だね。そういえば魔術騎士団なんだって？ 残念な結果にはならないでね」

魔人は動きながら話しているので、何処にいるのかわからない。

「き、騎士長！」

「落ちてけグレイ……そこだ！」

グノムスはある一点に向かって剣を突き刺す。すると、何も無いはずのところから血が飛び散った。

少し離れたところで、何かが落ちる音がした。グレイを見ると魔人だった。

「グウウ……まさか、僕に攻撃が当てられる人間がいるなんて」

「確かにお前は早いよ。だが、気配は感じる。気配を消せればお前にかなう人間はいないだろう」

「指摘をありがとう。でも、コレくらいじゃまだ倒れない」

やはり傷が浅いか、とグノムス思った。グノムスはグレイに話しかける。

「……グレイ、お前は逃げる」

「き、騎士長！」

「このままだと2人とも死ぬ……俺でも勝てない」

「そんな……」

「だから、逃げる。逃げて、ルキフグスに伝えろ。俺達が束になっても勝てない」

「……わかりました。ですが、必ず生きて帰ってくると約束して下さい」

「……了解だ」

グノムスの返事を聞いたグレイは頷いて走り出した。

「……以外だな、待ってくれるとは」

「ふん、初めて楽しめそうなヤツが来たからね。不意打ちは勿体ない」

グノムスはニヤリと笑う。

「そうかい、ならばお見せしよう。俺の最強魔法を……」

グノムスは目を閉じて集中力を高める。すると、徐々にグノムスの周りが明るくなっていく。

「な、何だコレは！」

魔人は驚き周りを見渡す。周りは相変わらずの暗闇だ。グノムスの周りだけが、眩い光に照らし出されていく。

すると魔人は不思議なことに気づく。確かに明るくなっていくが見えるのはグノムスだけ。景色は松明で照らされた範囲しか見えない。

これは、魔法弾だ。魔法弾とは魔力を込めて作られる弾で球状だ。魔法弾は魔力を込めれば込めるほど威力が高くなる。

グノムスの魔力は国内で最大といっても過言でもなく、まさにグノムスの最強魔法だろう。

「だが、それほどの威力、こんなところで撃てば……」

「心配するな、障壁を張った。今、俺達は強固な球体に閉じ込められていると思ってい」

さらに、とグノムスは続ける。

「この障壁は魔法を弾き返し倍にして返す……障壁内に存在するものは跡形もなく消え去るだろう」

すまないな、ウインディーネ、シルフィード……お前達が立派になった姿を見られなくて。

……サラ、ごめんな。お前より先に逝くことを許してくれ。そし

て、早く支えてくれる男を探してくれよ。俺より良い男はいないだろうがな。

グレイ、俺の代わりにアイツらを守ってやってくれ。

みんな、さよならだ……。

終わりだ、と言ってグノムスは障壁に魔法弾を放つ。障壁内は眩い光で溢れる。

- - ピシッ - -

あまりの威力に障壁にはヒビが入り始める。

- - ピシピシッ - -

ヒビが入った場所、そこからヒビは広がって行く。そのヒビからは光が漏れ出している。

ついに、障壁は耐えきれなくなり、崩れ去る。その瞬間、障壁内に閉じ込められていた光が辺り一面を数秒間照らし出していた。

……障壁が合った場所から植物が消え、砂漠のようになっていた。そう、砂以外は何もなかった。

かろうじて遺跡は無事、討伐も成功したが、クロリア王国最強だとされる男の生死が不明となった。

第10話（前書き）

＊注意事項＊

少しずつ話がグダグダになってきました。やはり文才はないようです。

これから数週間、更新が出来なくなると思います。理由は進学のための書類の準備や勉強で忙しくなりそうだからです。

期待している人は居ないと思いますが、お気に入り登録をしてくれている方がいますので一応ご報告します。

最後に一言、こんな駄文を読んでもくださりありがとうございます。

次回の更新は早くても10月になると思います。

第10話

- - クロリア王宮 - -

明朝、シルフィードは王宮敷地内を散歩していた。許可はもらっている。ルベライトが友達だからいつでも遊びに来れるようにと、国王に頼み許可を得た。

この許可は王宮が存在している間は消滅しない。つまりは半永久的に王宮の出入りが自由だ。

許可の話はともかく、何故明朝から散歩しているのか。昨日の深夜、突然窓から光が差し込みシルフィードは起きた。すぐに光は消えたが、シルフィードの眠気は完全に消え去った。

眠たくなるまで散歩しようかと考え、シルフィードは部屋を出たのだが、体を動かすことで完全に体が目覚めてしまい、今に至るというわけだ。

「ん……確かシルフィード君か。君は早起きだね」

シルフィードはいつの間にか宿舎に来てしまった。バルはルキフグスの秘書という立場で王宮に泊まっている。

仕事はまったくしていないが……。

「いえ、夜起きてしまつてそれから眠れないんです」

「それはイカンな。睡眠は成長にはとても大事な要素だ」

「以後、気をつけます」

「うむ」

満足したように頷いたバルは王宮内に入っていった。

そろそろ戻ろうかと思い、シルフィードは部屋に向かった。

「で、お前は何してる」

部屋の前にはミレイナがいた。

「早く起きたから暇だったんだけど……迷惑だよね。ごめん」

「別に大丈夫だけど、コーネリアや先生は？」

「私たち3人で来たから性別が違う私が1人部屋になったの。……それに先生は違うけどコーネリア君は相手してくれないから」

「……お前、コーネリアと仲が悪いのか？」

「……先生達以外、学院のみんなはコーネリア君と同じ態度だよ」

「何故だ？」

ミレイナは話して良いものかと悩むが、意を決して話そうとした。

「私、呪われてるの」

「……呪われてる？」

ミレイナは頷く。

「私が近くにいると魔法が失敗したり、怪我をするんだ」

「偶然だろ」

「初めは誰でもそう言ってくれた。でも、私が居るときに限って起こるんだ……それからだよ、私がみんなから避けられてるのは」

「……ツラくはないのか？」

「そりゃ、ツライよ。でも、どうしようもないんだ」

ミレイナは今にも泣き出しそうだ。

「……呪われてるのなら呪いを解けばいいだけだ」

「何度も、何度も試したよ。……それでもダメだったんだ。何の呪いがかけられているかもわからない」

「……俺が見つけてやる」

「え？」

「俺がその呪いを解く方法を見つけてやる！」

「で、でも……」

「アテはある。来年行われる世界大会に優勝して『世界書庫』に行く」

世界大会は文字通り、世界中の魔術師（Aランク以上）が集まり世界一の魔術師を決める大会だ。

優勝するのは並大抵のことではない。だが、シルフィードは絶対優勝するとミレイナに誓った。

「ありがとう。私なんかの為に……」

「困った時に助け合うのが友達だ」

「友達？」

「ああ、俺とお前は友達だ」

「……ありがとう、本当にありがとう」

――首都クロリアのはずれにある研究所――

「ここは？ ……そうだった、私は実験台にされて……」

あれ？ とウィンディーネは思った。体はまったく動かず真っ暗で何も見えないが、自分は生きているのかと。

――ギイイ――

いきなり扉が開き、眩い光が差し込んだ。あまりの眩しさに目を

刺激されて目をつぶったウィンディーネはビックリしたが、ホツとした。

自分は生きている。おそらく実験は成功したんだと。

「おめでとう。まさか、成功するとは思わなかった。……君は悪魔の力を持った人間、つまりは魔人になったわけだ」

魔人と聞いてウィンディーネはハツとした。もう自分は人間ではなくなった。実験には成功したが人間としての自分は死んでしまった。

「さて、君に頼みたいことがある。僕らと一緒に世界を変えよう」

「……世界を？」

「ああ、こんな汚れた世界、ないほうがマシだ」

「汚れた？」

「一見平和そうに見えてもどこかで戦争が起こっている。正義だといわれている魔術協会も裏で何をやっているかわからない」

禁止されている研究をしているという噂もある、とディザは言う。

「そして国は、腐っている」

ディザは語る。

国は優秀な人間の手助けはするが、低ランクには手をさしのべな

い。

主要都市の近くに巣くう盗賊は討伐するが、それ以外は見向きもしない。

「国は……僕の村を燃やした!」

「……村?」

ディザが生まれた村は平和だった。小さな村だったからか、村のみんなは仲良く、まるで家族のように助け合っていた。

村には祠があつて、その祠には魔法具とよばれる魔力を持った道具が祀られていた。それが狙いだろつか、ある時盗賊がやってきた。

盗賊は大人数できて、女子供関係なく虐殺した。命乞いをしようとも盗賊は殺していく。村には火が放たれ瞬く間に燃え広がった。

村が燃えるなか幼かったディザはただ、助けが来るのを待ち震えていた。

きつと助けが来る。そう信じて……。

いつの間にか寝ていたディザは残酷な現実を目の当たりにした。

家だった場所には焼け焦げた木材や灰しかあらず、黒こげになった死体があちらこちらに横たわっていた。

ディザだけが村だった場所で立っていた。

ふらふらと歩いていたディザは、祠だった場所に来了。案の定、

魔法具は盗まれていた。

周りを見渡したディザは、比較的火の被害が少なく完全には燃えることはなかった家が並ぶ場所へと歩いた。

生き残った者を探していたが、そこにも死体ばかりが転がっていた。どの死体にも切り傷があった。

1体だけ、木材に押しつぶされて死んだ盗賊の死体があった。

盗賊が着ている服を見てあることに気づいた。盗賊が来た時は夜だったから気づきはしなかった。

盗賊の服は魔術協会の制服だった。魔術協会には制服がある。一見すれば助けに来た魔術協会の魔術師が不運にも死んでしまったように見える。

だが、誰も助けに来なかったことをディザは知っている。そして、魔術協会が魔法具欲しさに今回の盗賊騒ぎを起こしたことも理解した。

ディザはそれから特に何もするではなくふらふらと歩いていた。

すると、そこに旅人が来た。若そうな少年で、彼はメシアと名乗った。メシアは学院高等部を卒業して旅に出ていたらしい。

ディザはメシアに連れられて、リトリッジに行った。ディザが学院に入る年齢になるまでリトリッジで過ごした。クロリアの学院に行くことにディザは疑問を持ったがメシアの言うことに従った。

メシアには一緒に暮らしている少年がいた。名前はルー。どうやら魔人で、姿を自由に变化させることが出来るらしい。

ディザとルーはすぐに打ち解け友達になった。

ディザが魔術協会……国に復讐をしようとしたのはメシアから聞かされた話が原因だ。

メシアはディザが生まれた村と同じように魔術協会によって滅ぼされた村や街が多数あると言った。

それはこれから起こるかもしれないと言われたディザは、それを止めるために復讐を誓った。

「……メシア様は世界に仲間を探しに言ったようです。だから私も仲間を増やすことにしたのです。……拒否権はない」

「……しばらく考えさせてください」

「……無駄なことだが、まあいい」

ディザは地下研究所を出た。

「……ディザ、ウィンディーネハマジンデハナイ」

「……どういうことだ。実験は成功したはず」

「アア。アクマヲシヨウカンスルツモリガテンシヲシヨウカンシタヨウダ」

「つまりは、天人か……」

魔人は悪魔の力を得た人間だった者だ。魔人以外にも似たような存在がある。

天人とは天使の力を得た者。他にも獣の力を持った獣人がいる。

魔人と天人は寿命が長くなるが、獣人などは寿命は変わらない。

魔人と天人の相性は悪く、互いに抑制し合う。

「……厄介だな」

ディザは振り向き研究所を見て呟いた。

第11話（前書き）

＊注意事項＊

暇な時に書いていたら出来たので更新しました。相変わらずの駄文です。それでも良ければ読んであげてくれると幸いです。

第11話

- クロリア王宮 -

「……盗賊討伐は成功。だが、グノムスが犠牲になったか」

ルキフグスは討伐から戻ってきた 그레이 の報告を聞いた。グノムスが負けたということよりも魔人がいたということに驚いていた。

「人間としては強い方だった。所詮魔人には勝てない」

バアルはソファに座り、紅茶を飲んでいる。

「問題は、本当に魔人なのかどうかだ。…… 그레이 の話を聞いたが、獣人の可能性がある」

「むしろ、その可能性が高い」

出現したのは狼男だからな、とバアルは付け足す。

獣人にも種類があり、大きく分けると3つ。陸での行動が得意な者。水中での行動が得意な者。空中でも行動出来る者。

一般的に陸で活動する者を獣人、水中で活動する者を魚人、空中で活動する者を鳥人と呼ばれているが存在を知らない者が多い。

「魔人にしろ獣人にしろ、もとは人間……魔術協会に欲しい人材だな」

「ふん、魔術協会に……ではなく、我が軍にだろ？」

「そうだな……。グノムスの息子には討伐のことを話すのか？」

「いや、まだ早い」

――マジックゲート女子寮――

アイリとセレーナはウィンディーネを探していた。昨日の昼食以降だれもウィンディーネをみていない。

「どこにいるの……」

アイリは寮の全ての部屋を回り調べたがどこにもウィンディーネの姿はなかった。

「……ねえ、コレってアグライア先輩の時と同じだね」

結局先輩は見つからないままだった。今回も同じかもしれないと思うとアイリはつらそうな顔をした。

「……ウィン」

――王宮客人用食堂――

昼食の時間、教師が5人、学生が6人いた。学生はシルフィードとエミリー、アリサ、コーネリア、ミレイナに加えもう1人いた。

名前はラダロア・ペテロゲート、ゼーレという街にあるリヒト学院上等部4年だ。

ラダロアは他の学生よりも教師と年齢が近いため、教師達と一緒に食べている。

「……あと、1人か。どんなヤツだろうな」

「イケメンの高等部がいいなあ」

シルフィードの言葉にアリサが反応した。今回呼び出された学生は上等部と高等部がそれぞれ1人に対して、中等部は4人もいる。

「ペテロゲーテさんは教師達としか話さないし、他は皆ガキだし……」

「ふん、中等部にしてみれば高等部の学生はババアだ」

「……あんたコーネリアつつたっけ？ ふざけたこと抜かしてるとぶっ殺すよ」

アリサがドスをきかせて睨みつけるがコーネリアは怯えた様子はなく何事もないように食事をしている。

「……年上を無視するなんて、良い度胸だね。……話を聞け！」

「食事中は騒がないでください。迷惑です」

「な……」

「年上なら人に迷惑をかけることは止めるべきだと思います」

コーネリアは食事を中断してアリサに話している。

「も、もとはと言えばアンタが」

「年上なら注意するべきのところを挑発にのるなんて……」

「……ごちそうさま」

「あれ？ もう食べないんですか」

コーネリアの問いには答えず、アリサは俯いて食堂を出た。

「なあ、言いすぎじゃないか？」

「ああ……案外脆いようだ」

後で謝れよ、というシルフィードにコーネリアは頷いた。

アリサは食堂を出たあと部屋に戻った。

「……まただ……私って馬鹿なのかな」

アリサは初等部のころからちょっとしたことでも怒っていた。冗談で言われたとしてもイラついた。

「はあ……」

すぐにキレることで、仲が良かった友達がどんどん離れていった。学院ではほとんど1人である。

「……友達欲しいな」

- - 首都クロリア - -

「ここがクロリアか……」

呼び出されたSランク、最後の1人カーネル・リファレンスは首都クロリアに着いた。カーネルは港町コーラルにあるセレスチャル学院高等部1年だ。

「……物の種類はコーラルの方が多いな」

クロリアは国の様々な物が集まるが、コーラルは港町なので世界中の物が集まる。

コーラルなどの港町には魔術協会とは別の組織がある。正式名称は知られていないが海軍と呼ばれている。

海軍にはAランクの魔術師や武術が得意な者が多い。

海軍は貨物船や客船などの警備として船に乗り込む。船を傷つけないために魔法は極力ひかえている。

カーネルも長期休業中には海軍の手伝いをする。海軍にはランクとは別に称号が定められている。

「ふむ……海が見えないと何だか落ち着かないな」

教師のライゼル・フォールトは海軍に入っている。ライゼルどころかセレスチャル学院の教師のほとんどが海軍に入っている。

「街を探索するのは帰りだな。今は王宮に急ぎましょう」

そうだね、とライゼルは行って2人は王宮に向けて歩き出す。

- -そして…… - -

カーネル達が王宮に着いた時は空が夕日に染められていた。

「部屋に荷物を置いたらすぐに食堂だな」

「わかりました」

2人は兵士に案内されて部屋に行った。2人が食堂に来た時、すでに他はそろっていた。

「ついに、今日全員揃いました。改めまして、ようこそクロリア王宮へ！ 私は魔術協会に勤めているバル・ゼブルといいます」

バルが説明をしている間にカーネルとライゼルは席に着いた。

「皆様には明日の朝食後、国王ならびに王妃、その御子息にお会いしていただきます。それまではごゆっくりくつろぎ下さいませ」

バルがお辞儀をすると、料理が運ばれてきた。

カーネルはアリサの隣の席に座っていた。アリサはカーネルに話しかける。

「私はアリサ・ヘストル。あなたは？」

「カーネル・リファレンス。ちなみに高等部1年だ」

「私も高等部1年！ 同じだね」

アリサは高等部の学生が来たことが嬉しいようだ。

「カーネルって呼んで良い？」

「ああ、俺もアリサと呼ばせてもらっ」

アリサとカーネルの様子を見て、向かい側に座るシルフィードとコーネリアはひそひそと話していた。

「なあ、お前謝ったか？」

「ああ、一応な」

「一応ってなんだよ？」

「それが、謝ったら泣き出して……大丈夫としか言ってこなかったな」

アリサが泣き出した原因はコーネリアに嫌われてないことが嬉しくて流した涙だが、コーネリアは知るよしもない。

エミリーとミレイナは隣あつた席に座っていた。向かい側にはラダロアがいた。ミレイナの隣にはシルフィード、ラダロアの隣にはアリサがいる。

「あの……ラダロアさんは学院を卒業したあと、どこに行くのかは決めているんでしょうか？」

エミリーの質問に考える素振りを見せたあとラダロアは答えた。

「魔術協会に入ろうと思ってるが、魔術騎士団にスカウトされたら騎士団に入ろうかと考えている」

「そうなんですか。私は教師になろうかと考えています」

「教師ですか。あなたは？」

ラダロアはミレイナに聞いた。

「私は……魔法の研究をしたいです」

「なるほど。ならば2人とも上等部まで進むんですね」

上等部に進むにはどの学院にしても試験を受け、合格しないといけないが、Bランク以上は免除になる。

必ず自分が通う学院の上等部に進まないといけないことはなく、自分が好きな学院にある上等部に行くことができる。

これは学院によって上等部で学ぶ内容が多少異なるからである。

「はい。私はマジックゲートの上等部に行きたいと考えています」

「私もそうです」

「確かにマジックゲートは国内トップクラスの学院ですからね。そのほうが良いですね」

く。
3人の話を聞いていたアリサはカーネルに上等部に行くのかを聞

「俺は上等部には行かない。高等部を出たら海軍に入る」

「海軍ってほとんど船で生活するんだよね」

「ああ。結構楽しいぞ。世界中の港町に行けるからな」

海軍の中には外国の武器を持った者も少なくない。カーネルが使
ってる武器もある島国の武器で刀と呼ばれている剣だ。

「へえ……海軍に女性っているの？」

「少ないけど何人かいるが……まさかお前」

「うん、私も海軍に入ろうかな」

「大変だぞ。力仕事も多いし」

「大丈夫。私だってSランクだよ」

「……そうだな」

微笑んだカーネルの横顔を見てアリサは顔を赤くした。

「……落ちたな」

「ああ、落ちた」

シルフィードとコーネリアはつまらなそうに食事をしていた。

第12話（前書き）

＊注意事項＊

学校の昼休みなどを使って書くことが出来ました。相変わらずの
文才の無さですがご了承ください。

第12話

朝食を食べたSランク達はバルに案内されて王宮本殿を歩いていた。教師達は客人用宿舎で待機している。

「この先が王の間……儀式などで使われる部屋となっております」

今回も一種の儀式のようなもので王の間が使われる。

バルが扉を開くとかなり広い部屋で奥には豪華な装飾が施されている玉座に国王であろう人物が座っていた。

他にも2つ玉座があり1つには王妃であろう人物、もう1つにはルベライトが座っていた。

バルが先頭を歩き、Sランク達が後ろをついていく。男子はあまり緊張した様子は見られないが女子は3人とも緊張していた。

「はじめまして、私はスプリガン・セイファート。このクロリア王国の国王だ」

ちなみに王妃の名前はビオラ・セイファートだ。

「この度はSランクにランクアップしたということで集まってくれた。皆、おめでとう」

Sランク達は深々と頭を下げた。

「今回Sランクになったのは7人の学生、これは異例のことだ。普

段なら魔術騎士団にスカウトするところだが学生ということもあり、それは無理だ。そこでだ」

Sランク達は何だろうと思って国王を見る。

「君達には合宿に行ってもらう。心配しなくても夏期休業が終わる数日前には帰ってこれる。宿題も免除しよう」

「質問ですが、合宿とはどこに？」

「コーラルという港町にあるディアス教会というところだ。クロリアから2、3日かかる。そこで合宿をしたあとそのまま解散だ」

ディアス教会と聞いてカーネルは誰にもわからないようにため息をついた。どうやら知り合いがいるようだ。

Sランク達はすぐにコーラルへ出発することになった。教師達については知らない。

コーラルまでは手懷けられた馬のような魔獣が引く馬車ならぬ魔獣車を2台使って向かう。

魔獣車の中は意外と広く1台で6人はゆっくり寛げる。王宮の物なので豪華な造りで長い間座っていても疲れがたまらないようになっている。

「……なんでルベライトが乗っているんだ？」

シルフィードは目の前にいる国王の息子、つまりは王子に質問する。

「お父様に頼んだ。暇だからな」

ちなみにこの魔獣車にはシルフィードとルベライト、コーネリアとカーネル、ライゼルが乗っている。もう1つの魔獣車にはエミリー、ミレイナ、アリサ、ラダロアが乗っている。

魔獣の上にはバルとグレイがいた。グノムスのことはまだシルフィードには伝えられていない。

もう1つの魔獣車では……。

「エミリーとミレイナは好きな人いるの？」

女子3人で恋愛トークなるもので盛り上がっていた。ラダロアは爆睡中だ。

「好きというわけではありませんが、気になる人はいます」

「わ、私も……」

「誰？ 今回のメンバーにいる人？」

エミリーは顔を赤くし、ミレイナはうつむいた。

「お、当たりか。もしかして……シルフィード！」

「「ち、違います！」」

「……その慌て方は肯定しているようなもんだよ」

エミリーとミレイナは顔を真っ赤にしてうつむいた。

「でも、2人とも同じ人が好きなんだね……。ま、私はカーネルだからライバルは……。あれ？ 今から行くのはカーネルが通う学院がある町……。しかもカーネルが生まれたのもそうだし……」

アリサが悩み出したのを見ながら2人は互いをチラチラとみていた。

「シュバルツさんはシルフィード君のことが……」

「エミリーでいいですよ。シルフィード君のことは好きです」

「私もです。あ、ミレイナって呼んでください」

「ミレイナさん、私は合宿の間に告白しようかと考えています」

「え、そんなに早くですか？」

「はい、合宿が終わればいつ会えるのかわかりませんから」

そうだった……。とミレイナは思った。合宿の間に告白しないと、もうチャンスはないかもしれない。

「ミレイナさんは、告白しないんですか？」

「私は……シルフィード君にふさわしくないから。あきらめます」

ミレイナがあきらめる理由は自分が近くにいることでシルフィー

ドが危険な目に合うかもしれないと思ったからだ。そう考えているとミレイナは合宿中はなるべく1人であるほうが良いと思った。

ふと、魔獣車が止まる。皆が何だろうと思っているとバアルが夕食を食べるためにこの村に寄ると言った。ちなみに昼食は弁当だった。

シルフィード外に出ると目を見開き驚いた。

「ここは……」

「そう。アルfumだ」

アルfumは小さな村で学院はない。シルフィードの故郷でもあるアルfumには一軒の料亭がある。その料亭にはアルfumだけではなく遠くの町から来る客もいるほど料理が美味しい。

料亭に入ると店長がシルフィードに話しかけてきた。

「お、シル坊か。ひさしぶりだな。聞いたぜSランクになったらしいな。俺だけじゃない、村のみんな知ってるぜ」

「何で知ってるんですか」

「細かいことは気にするな。今夜はお前達のためにとびっきりの料理を作ったぜ。味わって食えよ」

そう言って店長はテーブルをさす。テーブルにはまるで王宮の料理みたいに豪華な料理が並んでいた。

席につくとすぐにみなは料理を食べ出した。味はもちろん美味しい。王宮の料理にも劣らない味だった。

シルフィードとグレイ、バルは夕食後シルフィードの家に向かった。

「……母さん、ひさしぶり」

「シル、Sランクおめでとう」

シルフィードの母親、サラ・マグナスは笑顔でシルフィードを出迎えた。

「元気にしてた？ 友達と仲良くしてる？」

「心配しなくても大丈夫だよ」

そう、と言ってサラは安心したように目を細めた。

「シルフィード、スマンが先に戻ってきてくれ」

グレイに言われ、シルフィードは2人よりも先に魔獣車に戻って行った。

「サラさん、すみません。グノムスは……」

「いいんです。いつかはそうなると思っていました」

「……あとウィンディーネのこと何ですが」

バルはウィンディーネが行方不明になったことをサラに伝えた。
サラは目を見開き口に手を当てた。

「そ、そんな……ウインが……」

「現在、協会の方で搜索していますが一向に見つかる気配は……」
「そう、ですか……頼みがあります」

「何ですか？」

「シルだけは、必ず守ってあげてください。Sリンクですがまだまだ子供ですから」

「……わかりました」

グレイ、バルは深く頭を下げたあと魔獣車へと歩いていった。

「……サラさんは強いな」

「ええ、普通なら泣いてもおかしくない」

「……母親とはそういうものなのだろうな」

第13話（前書き）

＊注意事項＊

勉強の合間に書いていたらいつの間にか書く合間に勉強している状態になった……。今回もグダグダです。

第13話

ウィンディーネはリトリッジに来ていた。ウィンディーネは天使の力（本人は悪魔の力だと思っている）を使う練習をしていると翼を生やすことが出来た。

翼を使って飛ぶ練習を夜中に行っていると上達したのでリトリッジまで来たのだ。ディザから遺跡を調べることが頼まれたのも理由だが。

遺跡は夜には入れないので日が明けるまで待っていた。ウィンディーネがウロウロしていると、後ろから声をかけられた。

「ウィンか？ お前も遺跡見学とは奇遇だな」

「き、キース！ ほ、本当ビックリ、まさかキースに会っなんて」

キースはウィンディーネが学院で行方不明になっていることを知らない。そのことにウィンディーネはホッとしながらキースと一緒に遺跡をまわることを提案した。

「そうだな、1人よりも楽しいからいいだろう」

その後2人で遺跡を見学したあと、食堂で昼食を食べていた。

「ん、この料理美味しい！」

「良かったな」

キースは船着場で貰ったパンフレットに印をつけていた。

「何してるの？」

「見学した遺跡に印をつけている。今まで手がかりはなしか……」

「手がかり？」

「ああ、ちょっとした調べものだ」

「ふうん」

ウィンディーネは食堂を出たあと、キースに帰ると伝え人氣がないところに行った。

「……ドウダ？ ナニカハツケンシタカ？」

「いえ、何も発見できませんでした」

「フン、ヤクタタズダナ」

「……すみません」

ルーもリトリッジに来ていた。リトリッジにはルーの家があるのでウィンディーネはそこに泊まらせてもらっていた。

「オマエハディザニゴウリュウシテイロ」

「はい、わかりました」

ウィンディーネはルーに頭を下げ、早足で立ち去った。

- 港町コーラル、ディアス教会 -

コーラルは段差や坂が多い港町だ。ディアス教会は高台にあり、町全体を見渡すことが出来る。

セレスチャル学院は島に建ててあり一本の橋によって本土と繋がっている。

コーラルで最も高い建物である灯台兼展望台はクロリア海軍本部の敷地内に建っている。

「ん、風が気持ちいいな」

魔獣車から降りたアリサは大きく伸びをした。

「……海ですね。はじめまして見ました」

エミリーは目を輝かせて海を眺めている。

コーネリアは「帰りたい」とブツブツ呟いている。ミレイナは皆と離れたところから海を見ている。

「海か……この海の間こうにはまだ見ぬ世界が……」

ルベライトは海を見ながら自分の世界に入り込んでいる。

「皆さん、ようこそディアス教会へ！」

教会の中から修道服を着た女性……シスターが走ってきた。そして、……カーネルに抱きついた。

「ええ！」

アリサは声をあげて驚いた。アリサ以外も声には出さないが驚いた様子だ。

カーネルは顔をしかめ、シスターを引き剥がす。

「姉さん、いつも言ってるじゃないか。人前では抱きつくな」

「なら、人前じゃなければいいのね」

満面の笑みのシスターを見てカーネルはため息をついた。

「か、カーネル、この女性は？」

カーネルが答えようとしたが、シスターがそれを遮った。

「私はパーズィ・リファレンス、カーネルの姉でディアス教会でシスターのバイトしてまーす」

「バイト……シスターのバイトって……」

「人手が足りないんですよ。最近、神への信仰心がない者が増えて……私もですがね」

教会から神父と思われる男性が出てきた。

「信仰心がない人が神父って……」

「気にするな、この教会の人間はみんなそうだ」

それじゃ教会に何でいるの？ というアリサの疑問に答える者はいなかった。

- - 次の日の朝 - -

「納得いかねえ！」

まだ薄暗い空の下、コーネリアは叫んでいた。コーネリアは畑の草むしりをしていた。

「何で俺が草むしりなんか……ミレイナにだけやらせればいいんだ」

ミレイナも畑の草むしりをしていた。ミレイナはコーネリアとなるべく視線を合わせないようにうつむいて作業をしていた。

「……疫病神が」

「……ごめん」

シルフィードとルベライトは教会の部屋（客人用）西側の掃除をしていた。

「ルベライト、掃除はやったことあるのか？」

「いや、初めてだ。意外に楽しいな」

「はは、そうか」

エミリーとラダロアは教会東側の部屋の掃除をしていた。

「ラダロアさんは彼女はいらっしゃるんですか？」

「ん、いるよ」

「告白はどちらから？」

「相手からだよ」

「どのような告白をされたんですか？」

「ストレートに好きですって言われたよ。……言葉よりも気持ちがこもっているかどうか大事だよ。頑張って」

「は、はい」

アリサとカーネル、パーズィは皆の料理を作っていた。

「アリサってカーネルが好きなの？」

「え……は、はい。どちらかといえば……」

「そう……殺す」

パーズィは手に持っている包丁をアリサに向ける。

「姉さん！」

「はい」

カーネルに声をかけられパーズィは料理を再開する。包丁を向けられていたアリサの顔は真っ青だった。

「大丈夫か？ すまないな、姉さんは俺のことになると少しアレだな」

「弟思いの素晴らしい姉でしょ、ねえアリサさん」

「は、はい」

「弟に寄り付く悪い虫はどんな手を使ってでも駆除したいの。協力してね」

満面の笑みのパーズィに怯えながらアリサは頷いた。

朝食の時間になり、作業を中断、もしくは終わらせ皆は食堂に集まる。

「うわぁ、美味しそうだな」

テーブルに並んだ料理を見てルベライトは言った。

「さて、本来なら教会では食事の前に感謝の言葉を捧げることがあるんですが……この教会ではありません」

神父の言葉にカーネルとパーズィ以外のみんなが「本当にこの教会大丈夫なのか？」と思った。

「いただきまーす」

パーズイは最初に料理に手を出した。シルフィードはふと気になったことを神父にたずねた。

「そういえば、この教会のシスターは……」

「ええ、パーズイ1人です。まあ、手伝いというなのバイトに来る人もいますが」

本当にここ教会か？ と思ったのはシルフィードだけではない。ちなみにグレイとバルは海軍に泊まっている。ライゼルは学院に戻っている。

気持ちを切り替えて皆は料理を食べ始めた。料理は美味しく、最近美味しい料理ばかり食べるな、とシルフィードは思っていた。

朝食後、初日ということもあり、自由に町の見学をすることになった。……アリサを除いて。

アリサはパーズイに捕まりカーネルのあとをつけている。

「な、何をするんですか？」

「カーネルに悪い虫がつかないように見張り。あと、アリサもその対象にならないように気をつけてね」

「は、はい」

2人がカーネルをつけていると、1人の女子がカーネルに話しか

けた。

「……また、あの女懲りずに」

カーネルと話している女子がふとパーズィを見た。その女子は目を見開いたあと、かろうじて冷静を装い、カーネルとわかれた。

女子がその場で立ち尽くし震えているところにパーズィは近づく。

「えっと、まだおはようかな？」

「お、おはようございます先輩」

「うん。……カーネルのこと好き？」

「す、好きです。あ、別に特別な意味はなくて友達としてです」

「そう、ならいいや。じゃあね」

女子はパーズィに頭を下げたあと逃げるように去っていった。

「……カーネル君って彼女がいたことは？」

「ないよ。私が阻止するから」

だろうな、とアリサは思った。逆にパーズィに認められたらカーネルの彼女になれるかもしれない、と考える。

それを承知でアリサはパーズィに自分の気持ちを伝えることにした。

「パーズィさん。私、カーネル君が好きです」

「友達として、でしょ」

「異性としてです」

パーズィはアリサを睨みつける。アリサは怯えるがパーズィを見つめたままだ。

「パーズィさんがどう思おうが、この気持ちは変わりません」

「……ふう。わかった、応援してあげる」

「……え？」

「私と面と向かって言えたのはアリサが初めて。みんな睨んだら逃げていくからね」

「え？ え？」

「私がカーネルの相手を見定めるような真似をしているのはね、カーネルの頼みなんだ」

「どういうことですか？」

「カーネルさ実はシスコンなんだ」

「……へ？」

というより姉離れが出来ないだけなんだ、と言ってパーズィは話し出す。

それを簡単にまとめると、姉離れ出来ないカーネルを心配したパーズィが彼女を作るようにカーネルに促すと、パーズィが選んだ相手なら……ということになったらしい。

カーネルが姉離れ出来ないと同様にパーズィも弟離れが出来ない、本人は認めてはいないが……。

実際、カーネルにふさわしくなかった相手はカーネルに近づかないように脅迫紛いのことをする。ちなみに、パーズィはカーネルが好きで姉弟じゃなかったらいいのにと何度も思ったことがある。

「そう……なんだ」

「あれ？ ガツカリしたかな」

「いえ、ちよつと意外で……」

「そう。なら、カーネルのことは……」

「好きであることに変わりはないですよ」

「良かった。よろしく頼むよ」

パーズィは笑顔でアリサに握手を求める。アリサはそれに応じた。

「よろしくお願いします」

以後アリサはパーズィのことを姉さんと呼び始めた。

シルフィードとルベライト、コーネリアは海岸を歩いていた。

「俺、釣りってやったことないんだ」

「安心しろ、明日の手伝いで釣りをするからな」

「本当か！ 楽しみだな」

はしゃぐルベライトと対照的にコーネリアはふらふらと歩いていた。

どうやら草むしりが予想以上にツラかったようだ。

「そういえば、えっと……そう、ミレイナ。コーネリアの彼女か？」

「あんなヤツが彼女だって？ アイツ、学院の嫌われ者だぜ」

ちなみに魔獣車の中でコーネリアはルベライトとは友達になった
(カーネルも同様)。

「嫌われ者？」

「アイツがいると悪いことが起きるんだ。合宿中にも起こらないと
は限らない」

「一種の呪いか……」

だろうな、と言ったあとコーネリアは「帰りたいな」と呟いた。

ミレイナは1人で教会の高台から海を眺めていた。教会の敷地内には神父がいるが教会には少なからず人がやってくるため神父は常に教会の中にいる。

「……海ってキレイだな」

海を眺めるミレイナは寂しそうな雰囲気を感じていた。

「……神父さんなら呪いのこと少しはわかるかも」

ミレイナはそう思って神父に聞いた。

「呪いですか……。この教会には人ならざる者を拒絶する結界があります……。呪いに関してはなんとも」

「そうですか……」

ミレイナは残念そうに2階にある部屋に戻った。ちなみに客人用の部屋は3人部屋だ。女子は1部屋で足りたが、男子は2部屋使った。

ミレイナが部屋に戻ったころ、エミリーは町のカフェでラダロアに恋愛相談をしてもらっていた。

「ヤッパリ、気持ちはハッキリストレートに」

「はい、わかりました」

「告白はこの合宿中に?」

「はい、そうでないともうチャンスはありませんから……」

「そう、頑張つてね」

「ありがとうございます」

その日の昼食は各々食べることになった。午後も自由時間となり夕食の時間になると全員が教会の食堂に集まった。

「皆さん、コーラルはどうでしたか？　良い港町でしょう。明日は主にこの教会内で手伝いをしてもらうことになりますので、ゆつくり休んでください。それではいただきます」

神父の言葉が終わるとみんなは料理を食べ始めた。

夕食のあと、浴場（男女別）で疲れを癒やしたあと、部屋に戻って早くも眠り始める者や散歩をする者がいた。

シルフィードは昼間買ってきた本を部屋のベッドに寝そべり読んでいた。その本に興味を持ったルベライトはシルフィードに聞いた。

「何読んでるんだ？」

「魔獣図鑑最新版だ」

魔獣図鑑には今までに発見された魔獣の習性や使う魔法などが掲載されている。

「へえ……それにしても暇だ。コーネリアも寝てるし」

「お前も寝ろよ……明日も早いんだから」

「まだ眠くない……散歩する」

「散歩か……俺も行くよ」

シルフィードとルベライトは教会の周りを散歩することにした。
辺りは街灯や灯台によって明るかった。

「……明るいな」

「クロリアもあまり変わらないだろ」

「はは、そうだな」

2人は高台から街を見ている。

「あ、あ、あの……シルフィード君」

シルフィードが振り向くとエミリーがいた。

「どうやら俺はお邪魔のようだな……さきに寝てる」

ルベライトはシルフィードを残して教会の中に入った。

「どうしたんだ？」

「え、えつと、えつと……」

「えつと……何？」

「わ、私……」

「ん？」

「……な、何でもないです！ シルフィード君はここで何を？」

「散歩……ルベライトが言いだしたけどな」

「そ、そうですね」

しばらく互いに黙っていた。その間、エミリーはオロオロしていた。

「……そろそろ眠ろう」

シルフィードが戻ろうとするがエミリーがそれを止める。

「あの、シルフィード君。好きな人は……いるんですか？」

「好きな人か……微妙だな」

「……気になる人がいるんですか？」

「そうだな……。1度告白されて振ったんだが、それから意識し始めたかな」

「そう、ですか……。ありがとうございました。止めたりしてすみません、おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

シルフィードが教会に入るのをエミリーは見送ったあと、エミリーも教会に入った。

シルフィードが部屋に戻るとルベライトは寝ていた。

「俺も寝るか……」

第14話（前書き）

＊注意事項＊

いつものどおりの駄文。最近早くもスランプ気味……。あまり浮かばないアイデアがさらに浮かばない。

第14話

ウィンディーネとディザは森の中を歩いていた。

「あの……どこに向かって？」

「……コーラル、国一番の港町だ。そこに協力者がいるんだ」

「協力者ですか……」

「ああ、悪魔払い師でな、召喚師でもある。……名前はデュリオ・アゲート。教会の神父だ」

――港町コーラル、ディアス教会――

ディアス教会での合宿は約一週間続いた。合宿と言ってもほとんど手伝いしかやっていない。

合宿でSランク達は仲良くなれた。ミレイナは1人であることが多く例外。

アリサとカーネルは特に仲良くなった。付き合うことになった2人は教会の手伝いも一緒にすることにした。

ちなみにエミリーはシルフィードに告白することはなかった。

合宿最終日（夏期休業期間の半分を過ぎたあたり……予定よりかなり早い）は自由時間となった。最終日前日、夕食後食堂でそれぞれ最終日の予定を立てていた。

「ねえカーネル、明日どうするの？」

「そうだな……。アリサは何がしたい？」

「わ、私はカーネルと一緒になら何でも良いよ」

「俺もだよ」

アリサとカーネルの周りには他の人が近寄りがたい雰囲気が漂っていた。

「……あの空間には入れないな」

「ふん、くだらねえな」

「おや、コーネリアはカーネルが羨ましいのか？」

「うるせえ馬鹿」

シルフィードとコーネリア、ルベライトは3人で町をうろつくことにした。……特に予定と呼べるものはない。

「ラダロアさんは明日どうしますか？」

「うん、お土産買おうかなって」

「あ、私もついていきます」

エミリー、ラダロアは家族や友達にお土産を買うことにした。ミレイナは既に部屋に戻っていた。ミレイナは明日は教会にすること

にした。

- - 翌日 - -

朝食後、自由行動となった。ミレイナが教会の敷地内をうろろろしていると、1人の少年が教会に訪れた。……ディザだ。

ディザはミレイナに会釈、ミレイナも慌てつつ会釈した。ディザは教会に入り、神父のデュリオに会う。

「やあ、久しぶり」

「はい。……そういえば敷地の外に天使の力を持つ者がいるのですが、連れてこないんですか？ 教会の結界は悪魔の力を防ぐので問題ないのですが」

「ふん、アイツは自分のことを魔人だと思っている。こちらとしてもその方が都合だ」

「なるほど……。今回の用件は魔力が流れ出る場所についてでしたね」

召喚は召喚する者の魔力が大きく影響する。魔力が高ければ高いほど召喚できるモノが増える。

また、召喚する場所も影響する。世界には魔力が流れ出る場所があるという。その場所には魔力が高い魔獣が集まる。

その場所にある魔力はそこにいる生物に流れ込み魔力を高める。また、召喚の成功率も上がるという。

「ああ、わかったか？」

「ええ、勿論。私の使い魔は優秀ですからね」

使い魔とは、契約した悪魔もしくは天使のことをいう。契約内容は様々だが、契約すると契約者は力を貸してもらえることが出来る。

「場所はここから遙か南にある小さな島です」

「流石にそこには自分で行ったほうがいいな……船はあるか？」

「そういうと思って海賊の知り合いに楽しんでおきました。この町から海岸に沿って東の方に行くと洞窟があります。その奥に海賊がいます。あ、私から紹介されたと言えば大丈夫ですので」

ちなみにコーラルはクロリア王国の南端にある。

「わかった。一応礼は言っておく」

ディザがデュリオと話しているころ、ウィンディーネは教会敷地横の石段に座って海を見ていた。

「……最近海をよく見る気がする。はあ、シルに会いたいな」

「シルとは？」

「弟だよ……って誰！」

「おっと、失礼。僕はガル……お嬢さんの名前は？」

「う、ウィンディーネ・マグナスです」

「良い名前だ」

「あ、ありがとうございます。……何かよろですか？」

「いや、なんだかお嬢さんが寂しそうに見えてね……迷惑だったかい？」

「い、いえ……あ」

「ん？」

ガルーが振り向くとディザがいた。

「誰だ？」

「僕はガルー。……君はマグナスさんの彼？」

「ふ、そう見えるか？」

「ああ、お似合いですよ」

「そうか……行くぞ」

ディザはウィンディーネの手を握り、引っ張っていく。

「え、え？ あ、さようなら」

「はい、さようなら」

森に入ったところでディザはウィンディーネの手をはなす。

「あ、あの……」

ディザは頭に手をあて何かを考えている。ウィンディーネはその様子をオドオドしながらみている。

「……アイツ……何者だ」

ふとディザが呟く。

「え？」

「アイツ……人間じゃない。気をつけろよ」

「え？……は、はい」

ディザの言葉にウィンディーネは不思議そうに頷いた。

カーネルとアリサは商店通りを歩いていた。その名のとおり店が建ち並ぶ道だ。

「あのネックレス可愛いね」

「そうだな。きっとアリサに似合うよ。買ってやろうか？」

「そ、そんな、悪いよ……高いし。あつ、あの腕時計カーネルに似

合いそう」

「ん、あれか？　ずいぶん高いな」

装飾品店で商品をみている2人は互いに相手に買おうとしてるが、相手は遠慮するというのを数回繰り返している。

「おや、カーネル君。彼女とデートですか。羨ましい」

「ガルーさん！　お久しぶりです」

「えっと……」

「ああ、紹介する。海軍兵士のガルー・ファトウスさんだ」

「ども、ガルーでいいよ。可愛いお嬢さん」

「は、はひ。わ、私はアリサ・ヘストルです」

「ガルーさん、旅から戻ってきていたんですか？」

「ああ、クロリア王国中をまわるのは時間がかかったよ」

「王国中をまわったんですか？」

「そうだよ。アリサさんの街にも行ったと思う」

「ガルーさんは海軍には」

「戻るよ、そのために来たんだ。……それに気になることもあるか

らね」

ガル―は2人に手を振りながら去っていった。

「気になることって何だろう?」

「何だろうな。……あ、これアリサに似合っんじゃないか」

「わ、キレイ。これはカーネルに似合うよ」

ガル―が去ったことでまた2人はいちゃつきはじめた。

シルフィード一行は予定通り、町をうろつろしている。エミリーとラダロアはお土産を探していた。

「そういえば、告白はしましたか?」

「いえ……シルフィード君にふさわしいのは私じゃありませんから」

「そうですか」

最終日は昼食は自分達で食べ、夕食はみんなで食べることになっている。夕食後、帰り仕度をしてカーネルはその場で学院に戻り、他はクロリアに戻って解散となる。ちなみに夕食はグレイとバアルも一緒だ。

バアルとグレイが海軍本部を出ると、ガル―がちょうど海軍に入ろうとしていた。

「おや、あなたは……」

ガル―はグレイを見て驚いた表情をしたあとグレイに話しかけた。

「ん……どこかで会いましたか？」

グレイはガル―を見たが、会った覚えはなかった。

「あ、すいません。人違いのようです」

「はあ、そうですか」

ガル―は2人に軽く頭を下げ海軍本部に入っていった。

「……どこかで見たような」

グレイは思い出そうとするが、途中で諦め教会へと歩いていった。

第15話（前書き）

＊注意事項＊

駄文です。受験真っ盛りなのに自分は何をしてるんだ、
と思いつつ書いてます。

第15話

- - 海賊のアジト - -

デュリオに言われたようにディザとウィンディーネはコーラルの近くにある海賊のアジトと化した洞窟に入った。

すぐに2人の海賊がいて、槍によって前を塞がれた。

「……何者だ」

「ディザ・フレイル、デュリオ・アゲートの紹介で来た」

「……通れ」

見張りであろう2人は槍を下げ、ディザとウィンディーネを通した。

洞窟はしばらく薄暗い道が続いていた。歩いていくと、開けた場所に出た。

そこには、どこから持ち込んだのかわからないがテーブルや椅子があり、数人の男達がいた。

「おい、アゲートが紹介したのはお前らか？ まだ餓鬼じゃねえか」

2人に声をかけたのはディザと同じくらいの年であろう少年だ。

「が、餓鬼ってアンタも！」

ウィンディーネが少年に向かって叫ぶと、周りの海賊から槍を向けられた。

「ひい……う、ごめんなさい」

「ふん、やっぱり餓鬼だな」

「餓鬼に餓鬼と言われるのは些が気が引けるのだがな」

「せ、先輩！」

「……ふうん、お前ら中等部？」

「私は3年、コイツは1年。2人ともBランクだ」

「へえ、Bね。俺は高等部1年だ……学院の休みの日は海賊をしている」

2人がBランクと聞いても海賊達はビックリしない。むしろ口の端を吊り上げてニヤニヤしている。さらには平然としている少年を見て2人は若干驚く。

「び、Bランクだから本気になればアンタなんか……」

「俺はレングス・ストリング、Sランクだ」

「え、S！」

「ああ、中等部1年のころになってな。えっと、本気になれば……」

何だって？」

「な、何でもないです」

怯えるウィンディーネに対してディザは表情を変えず、レングスを見ている。

「ふ、コイツは魔人だ。Sランクであろうと勝てはしない」

「お、魔人なの。俺は魔人じゃないけど悪魔の力持ってるぜ」

「……何？」

レングスの言葉にディザは目を見開く。魔人じゃないが悪魔の力を持っているだと……。ディザはレングスの言葉を信じられなかったが、嘘だとも思えなかった。

「俺の親父が悪魔でさ……母さんに一目惚れして種族の枠を越えてな。まったく驚きだよな」

笑いながら言うレングスは、「あ、そうそう」と言っって自分が受け継いだ力について話した。

魔力、身体能力は人間を遥かに超え、体の一部及び全体を悪魔の体に変化させることが出来る。

寿命は人間よりも少し長いらしいこと。ちなみにSランクという結果を出した時は受け継いだ力を一切使っていない。

「……化け物だな」

「化け物？ 確かにな……。さて、頼み事があるんだってな」

「聞いてくれるのか？」

「アゲートに頼まれたからな」

「そうか。……船を出してくれないだろうか？ 場所は……」

「ほう……。船を出すことで海軍に見つかる可能性がある。さらにそこは危険だ」

「それでも、行きたいんだ」

「逝くの間違いじゃ……。まあいいか。なんたつてアゲートに頼まれたんだからな」

ディザはSランクを超える者をいとも簡単に手懐けたデュリオが何者か不思議に思った。

「さて、出航は今夜だが俺はいかない」

「お、お頭！ 何故ですか」

「だって、夏期休業内に帰って来れないだろうからな。まあ、頑張ってくれ」

レングスはアジトから去っていった。

「お頭あああ！」

「……トップ以外は雑魚の集まりなのか？」

「さて、今から出航の準備だ。夜まで待つんだな」

「お、おう」

ディザとウィンディーネは洞窟をうろろして時間を潰していた。

――ディアス教会――

シルフィード達は既に夕食を食べ終え、帰る支度をしていた。

「長いようで短かったな」

「ああ、そうだな。……楽しかった」

「よっしゃ、もう帰れるぜ」

シルフィードとルベライトとは対照的にコーネリアは帰れることが嬉しく、今までで一番輝いているようだった。

「ラダロアさん、さきに行きますね」

「ああ、アリサさんね。わかってるわかってる」

カーネルとラダロアの部屋では、ラダロアがいそいそと準備をしていた。カーネルは手伝っていたが、そわそわしていて我慢が出来なくなっただのかアリサに会いに行った。

カーネルはこの町にいたので準備をする必要はない。それよりも、しばらくアリサと会えなくなるのが問題だった。

アリサが冬季休業中に来ようと思ったが、カーネルは基本的には長期休業中は船で海に出ているので会えない。夏期休業であれば時間が作れるとのことで、次に会うのは1年後となる。

「アリサ、準備は終わった？」

カーネルは部屋に着くとすぐにアリサに話しかけた。

「ま、まだだよ。お土産買いすぎてなかなか……」

「手伝うよ」

「あ、ありがとう」

仲睦まじく準備する2人を見ながらエミリーとミレイナはため息をつきながら準備をしていた。

「……告白しなかったの？」

「はい、どうやらシルフィード君は気になっている人がいるようですから諦めました」

「……そうなんだ」

「はあ、もうみんなとお別れですか……」

「まあクロリアまでは一緒だけど」

「楽しい合宿でした」

「そう、だね」

エミリーには合宿中の楽しい思い出があるようだが、ミレイナにはない。

ミレイナは1人で過ごすことが多かった。手伝いはコーネリアと一緒に1人だったので喋る相手は同じ部屋の女子2人と神父、シスターだった。

「……でも」

シルフィードに会えたから良かった、とミレイナは思う。

もう忘れているかもしれないが、呪いを解く方法を探すと言ってくれたから。それだけで、充分だった。

「どうしましたか？」

「あ、何でもないよ。サツサと終わらせないとね」

準備を終わらせた者から教会の入り口に集まってくる。

「やあ、諸君。準備は出来たようだね」

全員揃ったところ、バルとグレイが教会から出てきた。

「来た時と同じように、魔獣車に乗って帰るからな……ほら、サツサと来い」

行きと同じように魔獣車に乗り込む。

「じゃあねカーネル」

「ああ、アリサまたな」

アリサとカーネルは抱き合ったあと、アリサは魔獣車に乗り込んだ。

魔獣車が動き出し、教会から遠ざかるのをカーネルはじっと見ていた。

「カーネル、やっぱり寂しい？」

「当たり前だ。……姉さん、ありがとう」

「ん、何が？」

「……いや、何でもない」

「？ まあいいか」

パースイは首を傾げたが気にしないことにした。

――海賊アジト――

「おい、出航するぞ」

辺りも暗くなり、出航の準備が出来た。海賊の1人がディザを呼びに、アジトの奥にある休息室に来た。ベンチの上でディザは本を

読みながら待っていた。

ウィンディーネはディザの肩に頭をのせ、眠っている。

ディザが立ち上がり、ウィンディーネを支えるものがなくなり、ベンチに頭をぶつけたウィンディーネは目をこすりながら起きたようだ。

「あ、あれ？　ここは……」

「おい、寝ぼけてないで早く行くぞ！」

「は、はい」

ウィンディーネは先に行くディザを急いで追いかけた。

海賊達と2人が船に乗り込むと、すぐに船は動き出した。

「目的地まで約一週間かかるだろう。ないとは思いますが食糧がなくなったら近くの島で補給する。部屋は用意してるから着くまでゆっくりしてな」

「心遣い感謝する」

2人は用意された部屋に向かった。部屋は狭く、ベットは1つしかない。天井には蜘蛛の巣も張っていた。

「……しょうがないか。船に乗せてもらっただけでもありがたい」

食事は全員一緒にとることになっている。ディザは甲板に向かっ

た。ウィンディーネも後をついていく。

「うわぁ、星が綺麗」

「……ふん」

2人が甲板にでてしばらくすると海賊の1人がやってきた。

「おい、夕食の準備ができたぞ！」

「夕食じゃなくて夜食だと思うがな」

ディザは文句を言いながらも食べに向かった。ウィンディーネはその様子を見てふと微笑んだ。

「……シル。いつかまた会おうね」

ウィンディーネが見上げた空には無数の星が輝いていた。

第16話（前書き）

＊注意事項＊

更新再開しました。例のごとく駄文です。

第16話

ディアス教会を出て魔獣車はクロリア王宮についた。王宮の入り口では各学院の教師達がいた。

どうやらノウフォンとヴォイドは付き合い始めたようで、イチヤイチヤしている。

魔獣車から全員降りたあと各学院の教師と共に帰ることになる。コーネリアはヴォイドのもとへ歩いていく。

ミレイナは追いかけてしようとしたが、シルフィードに声をかけられ立ち止まった。

「ミレイナ、必ず呪いを解く方法を見つけてやるからな」

「ありがとう。……またね」

「ああ」

ミレイナが去るのをシルフィードがじっと見つめていると、ノウフォンがニヤニヤしながらやってきた。

「もしかして彼女ですか？」

「いいえ……先生こそ楽しみに話していた男性とはどんな？」

「ヴォイド君ですか。結婚を前提に付き合ってくれ、と言われまして」

「……良かったですね」

2人は学院マジックゲートに戻ろうとしたが、バアルに呼び止められ魔術協会会長室に案内された。

「私は魔術協会会長ルキフグス・ロフォカルだ。君が、シルフィード・マグナス君……とその教師だね」

「は、はい。何でしょうか？」

ノウフォンは緊張しながらたずねる。

「シルフィード君の父親であるグノムス・マグナスが討伐任務中行方知れずになった」

「と、父さんが……」

それと、と言ってルキフグスは言いにくそうに言葉を続ける。

「君の姉であるウィンディーネ・マグナスが行方不明になったと学院から連絡があった」

「な……母さんはこのことを……」

「ああ、知っている。……残念だが何の手掛かりもない以上、もう」

「そ、そんな……」

シルフィードは声を震わせている。

「グノムスの件は我々の責任だ。ウィンディーネのこと……」

すまなかった、と言ってルキフグスは頭を下げた。

シルフィードはふらふらとマジックゲートに向かって歩いていった。ノウフォンは心配そうに見つめている。

「……それじゃ、俺は部屋に戻ります」

「わ、わかりました」

シルフィードが久しぶりに部屋に入る。部屋は出発前と変わらぬ状態だった。シルフィードはベットに横たわる。

「……姉貴、父さん」

父親のことは仕事上覚悟はしていた。だが、まさか学院にいるウィンディーネが行方不明になるとは思わなかった。

しばらく横になっていると、シルフィードはいつの間にか眠っていた。

- - 学院内図書館 - -

アイリとセレーナはウィンディーネを探していたが、手掛かりは少しも見つからなかった。

「アイリ、シルが戻ってきたらしいよ」

「本当？ …… ショックだろうね」

「うん。ウィンだけでもツライのに、お父さんまで行方不明なんて……」

「……私、マグナス君に会ってくる」

「あ、ちょっと……」

セレーナが止めようとしたがアイリは行ってしまった。

- - 男子寮 - -

アイリはシルフィードの部屋の前に来ると、ノックせず中に入
た。

「おかえり！ マグナス君……寝てる」

ベットの上ではシルフィードがすやすやと眠っていた。

「マグナス君の寝顔、よく見ると何だか可愛いな」

アイリはシルフィードの横に座る。シルフィードの寝顔を見つめ
るアイリは欠伸をした。

「私も……少し寝ようかな」

アイリもシルフィードと同じようにベットに横になると、すぐに
眠りについた。

窓から差し込む夕日に顔が照らし出され、シルフィードは起きた。

「……いつの間にか眠っていたようだな。……ん」

シルフィードは隣で寝ているアイリを見ると、しばらく動きが止まった。目をゴシゴシとこすり、再び隣を見たが何も変化はなかった。

「な、何でアイリが俺の部屋に居るんだ！」

「ん……あ、おはよう」

「おはよう、じゃない！ 何で寝ているんだよ」

「あ……」、「ごめん。つい……」

「ついって……まあ、いい。久しぶりだな」

「……うん、おかえり」

「……ただいま」

「えっと……ウインのこと聞いた？」

「……ああ。俺がついていれば行方不明にならなかったかもしれない」

「それを言うなら、そもそもの原因は私だよ。私が学院内で魔法なんか使うから」

「……そんなことはない。さて、今から夕食だろ？　一緒に行こう」

「……うん」

学院内の食堂は休業中でも開いている。ちなみに職員達は交代で休みを取ることになっている。

食堂に来た2人はカウンターで学食を受け取り適当な席に座った。

「あ、あの……」

「決めたんだ」

「……え？」

「必ず姉貴を見つけてやるって……」

「……うん」

「居なくなつて気づいたんだ。俺、姉貴が……ウィンディーネが異性として好きなんだってことに」

シルフィードの言葉にアイリの表情は暗くなる。自分が好きな人が、目の前で自分以外の名前を、好きな人と言った。

「見つけて、自分の気持ちを伝えるんだ」

「そうなんだ……見つかるの良いね」

「ああ」

満面の笑みを浮かべるシルフィードをアイリは見る事が出来ず
目をそらす。

「……どうかしたか？」

「な、何でもないよ」

「……ならいいけど」

いつの間にか食べ終えたシルフィードを見て、アイリも慌てて食べる。その様子をシルフィードは苦笑いしながら見ていた。

夕食後、シルフィードはアイリを女子寮までおくったあと、自分の部屋へと帰るため男子寮に向かった。

「お、シル。久しぶり！」

「ん、リーチとリサーバか」

「ああ、本来なら二学期が始まる前々日に帰るつもりだったかな……リサーバがセレーナに早く会いたいと……」

「……以前は嫌っていたのにな」

「まあ、そう言うなって……。これ、お土産」

リサーバは手に提げていた紙袋からお菓子の箱を取り出し、シルフィードに渡した。

「お、ありがとう。……お菓子か？」

「俺達の街で人気のクッキーだ。学生が買うお土産の中で一番人気なんだ」

ちなみに他の街では売られてないからな、とリーチは補足する。

「しっかり味わって食べるよ」

「ああ。さて、今からセレーナに会いに行ってくる」

リサーバはリーチに紙袋を渡し、女子寮に向かって走り出した。

「おい、リサーバああ！」

「……お前も大変だな」

――女子寮――

セレーナの部屋の前に来たリサーバはいきなり扉を開けた。

「よお！ セレー……な？」

「ば、馬鹿！ ノックぐらいしろよお！」

部屋では、セレーナと同室のブルム・メルビィーユが寝巻きに着替えている途中だった。

「す、すまない」

リサーバは慌てて部屋を出た。しばらく待っていると、入れと言われて中に入った。

「……で、何のようだよ」

プルムはかなり不機嫌な様子でリサーバを睨みつける。

「えっと……セレーナは？」

「シャワーだよ」

各部屋にシャワー室とトイレが設置されている。浴場はクラス毎にはいれる日が決まっている。

「あ、ならば早くここで待ってる」

「……なら、俺は寝るから」

プルムの一人称は俺だ。言葉遣いもあり女っぽくない。

「そうだ、これお土産」

リサーバは地元のクッキーをプルムに渡そうとする。

「……クッキーか？　こんなんで俺の機嫌でも直るとでも」

「ん、要らないのか。残念だ」

「ち、ちょっと待て。要らないとは言っていないだろ！」

「……欲しい？」

「う……うん」

顔を真っ赤にしながらプルムはクッキーを受け取る。

「あれ？ プルムー、誰か来てるの？」

シャワー室からセレーナの声がする。

「あ、ああ。ちゃんと服来て出て来いよ」

「わかったー」

しばらくするとシャワー室の扉が開いて寝巻きを着たセレーナが出て来た。

「あ、リサーバ。帰ってきてたの？」

リサーバを見たセレーナは嬉しそうに微笑んだ。

「ああ、これ地元のクッキーなんだ」

「へえ、ありがとう」

「あと……これ」

リサーバは腕時計を取り出しセレーナに渡す。

「何が良いのかわからなかったから腕時計を選んだんだけど……」

「ありがとう。……嬉しい」

セレーナは顔を赤くしてリサーバを見つめる。

「あ、あのさ、俺先に寝るから……聞いてないな」

プルムはため息をつき、ベッドに入り寝始めるが、2人の会話でなかなか寝付けないでいた。

「あれ？ アイツもう寝るのか」

「プルムは夜早く寝てまだ空が暗い内に起きるんだ。……いつも起こしてもらってる」

「へえ」

「感謝してるんだ。……いつもありがとうね」

感謝するなら寝かせて欲しいんだけど、と思いながらも言つことができないプルムだった。

第17話（前書き）

＊注意事項＊

今回はかなり短いです。何を血迷ったかもう1つ小説を投稿します。そちらの方も読んでくださると幸いです。

第17話

夏期休業が終わりを迎えようとしている頃、ディザ達は目的地である島についた。

「ここが……。凄いな、居るだけで魔力が体に流れ込んで来る」

この島は魔力で溢れている。この島に居るだけで魔力が上がっていく。

その魔力を求め魔獣達が集まっている。魔獣達の魔力はSランクをも越えるものがほとんどだ。

「ここに居ればお頭みたいに強くなれるかも……」

海賊達はしばらくここに滞在するつもりだ。……まあ、ディザも海賊と一緒に行動するから強制的に残される。

ウィンディーネは翼を生やして島から出ることも可能だが……。

「……なんか化け物がいっぱいいる」

具体的に言えば、羽の生えたライオンとか、6メートルくらいの蠍とか、空とぶタコとか……。

「絶滅した魔獣や進化した魔獣だろうな……強いのは間違いない」

魔獣達はまだディザ達に気がついていない。ディザ達がここに来た目的は召喚術の練習をするためだったが、その前に自分の力を高

めることにした。

「これほどの場所なら……」

「どうしましたか？」

「予定変更だ。召喚術はやはり危険……ここで修行を行う」

「し、修行？」

「ああ、お前は自分の力を最大限に引き出せるように。俺は力を手に入れるためにだ」

こうして修行をすることにしたディザ達だが、果たして無事に島から出られるのだろうか？

……そんな心配をしてるのはウィンディーネだけなのだが。

――魔法学院マジックゲート――

夏期休業が終わり二学期となった。二学期には学院祭がある。しばらくは学院祭の準備を行うことになっている。

学院祭は2日に渡って行われる。初日は文化祭、2日目は体育祭だ。体育祭は純粋に身体能力を競うものだ。文化祭にはクラス対抗のトーナメントがある。

そして、シルフィードのクラスではトーナメントの出場者を決めていた。

「……では、出場者はシルフィード・マグナス君で」

「異議あり」

「意見がある時は手を挙げて下さい」

ノウフォンに言われ、シルフィードは手を挙げる。

「どうぞ、マグナス君」

「何で俺が……というか候補が俺しか居ないんですか？」「Sラン
クだからです」

「……わかりやすい返答、ありがとうございます」

「いえいえ」

――食堂――

「納得いかない」

「しょうがねえだろ、Sランクなんだから」

シルフィードは同室のフィルと一緒に夕食を食べている。

「しかしな、実力ならアイリだってあるぜ」

「ああ、学年トップクラスの成績だったな……」

「まったく、Sランクになって良いことねえな……さて、先に帰ってる」

「ん、わかった」

シルフィードが食堂を出て男子寮に向かっていると、アイリが話しかけてきた。

「ねえ、今度の休みに買い物行くんだけど……一緒に行かないかな？」

「今度か……わかった」

「約束だよ。じゃあまた明日」

「ああ」

アイリが去っていくのを見ていたあとシルフィードは男子寮に向かった。

男子寮に行くと、リサーバが待ち伏せていた。

「シルフィード・マグナス！俺はお前に勝つ」

「……え？」

リサーバはシルフィードを指差している。シルフィードは呆然としている。リサーバの兄のリーチはため息をついている。

「すまない、シル。コイツ、トーナメントに出るんだ」

詳しく聞くとリサーバが出場者に選ばれた。セレーナが「優勝してね」、と言ってリサーバは「お前のために優勝する」と、クラスのみんなの前で堂々と宣言したらしい。

「……………辞退しようか？」

「それじゃ、意味がない」

ビシッと再びシルフィードを指差す。

「全力のお前を倒してこそ、堂々と胸を張れる」

「お前。…………ふ、いいだろう。全力でお前を潰す。…………彼女に不甲斐ない姿を見せないようにな」

「ふん、わかってるさ」

リサーバは2人に背を向け歩き出す。

「…………中等部同士の戦いだからな、やりすぎるなよ」

リーチが苦笑いしながら去っていった。

シルフィードはそのまま部屋にもどった。

だいぶ変わった…………、とシルフィードは思う。Gランクのころと比べ話しかけてくる人が増えた。

この前なんて握手を求められた。この学院にはSランクは他には

いない。Sランクになりそうな人はいるがあと一步のところが届かないでいる。

まあ注目されてたのは前からだったけど、とシルフィードは自嘲するように笑った。

Sランクになって注目されて困ることもあった。行く先々で囲まれる。特に女子に……。

話しかけてくるだけなら良いのだが、本気で告白してくる人もいる。二学期になって1日に1人は告白してくるのだ。

中等部からだけではなく高等部の女子からも。驚いたのは初等部からも告白されたことだ。

さて、寝るか。シルフィードはベッドに入るとすぐに眠った。

第18話（前書き）

＊注意事項＊

今回は会話が多く、自分でも何だかよくわからない話になりました。

第18話

今日は休日。シルフィードは女子寮の前でアイリが来るのを待っている。

しばらく待っているとアイリが出てきた。

「あ、ごめん。待たせたみたいで」

「大丈夫だ。さて、どこに行こうか？」

2人は学院を出てクロリアの街をウロウロしていた。良さそうな店を見つけたら入って商品を見てまた他の店を探す。その繰り返しだ。

「ねえ、たまには学食以外も美味しいね」

「そうだな」

2人はレストランで食事をしていた。シルフィードがSランクになり、その特典としてほとんどの店で無料となる。

本人だけでなく同行している友人も無料で利用できる。

「マグナス君はSランクだから無料で食べれるね」

「でも街はあまり嫌だな」

「そう？ ……今日はごめんね」

アイリはうつむいて言う。シルフィードは首を傾げる

「何が？」

「もうすぐ学院祭。トーナメントに出るんでしょ」

「ああ。でも大丈夫だ」

「え？」

「俺は負けない。優勝するよ」

シルフィードはアイリを見つめ宣言する。

「たいした自信……でもマグナス君なら優勝しそうだな。頑張つてね」

「おう、お前に誓うよ」

アイリは少し顔を赤くする。アイリはシルフィードから目をそらし、しばらく何かを考えている様子を見せる。

何かを決意したようにシルフィードを見つめた。

「あ、あの、マグナス君」

「ん、何かな？」

「わ、わ、わ……私と付き合ってください！」

その声は店内に響き渡るくらいの音量だった。言うまでもなく店内にいるほとんどの人の注目をアイリは浴びる。

それに気づいたアイリは顔を真っ赤にして体を縮こまらせる。その表情は恥ずかしさからか今にも泣きそうだった。

「……なんで俺なんだ？」

「ま、前から好きだったんだけど……マグナス君がウインのことが好きって言った時、嫌な気分になって……それで……」

「……………」

「ウインが居ない今言うのも卑怯だと思うけど……考えてくれないかな？」

「……わかった、考えておく」

「う、うん……」

その後2人は口数が少ないまま店を出た。

「あ、あの……次はどこに行こうか？」

さっき食べたのは昼食なので、まだまだ時間はある。

「……どこでも良いよ」

「わ、わかった」

先ほどの告白の影響だろうか、アイリが話しかけてもシルフィードは素っ気なく答え、話が続かない。

「そ、そういえば王宮はどうだった？」

「ん、楽しかったよ。合宿もあったし同年代のSランク達と友達にもなれた」

「へえ、いいなあ」

「……あと王子と友達になった」

「お、王子！」

「ああ、国王の息子。同い年だった」

「へ、へえ。王子と友達なんて凄いな」

「まあな……で、どこに行くんだ？ このままだと学院に戻ってしまうが」

「あ……ま、マグナス君が行きたいところはある？」

「いや、ないな。あまり街は好きじゃないから」

「な、なら帰ろうか」

「そうだな」

アイリは若干落ち込みながら先を歩くシルフィードを追いかけた。

学院に戻った2人はそれぞれの部屋に戻った。

シルフィードが部屋に戻るとベッドの上にフィルが寝転がっていた。

「よお、デートはどうだった？」

「デート？　ただ単にアイリと昼食を食べに行っただけだろ」

「それをデートと言わず何という……そんなことより、3年のフレイル先輩も行方不明だ」

「同時期に2人もか……」

「ああ……それとキースがリトリッジでワインと会ったらしい」

「何！　姉貴がリトリッジに……」

「だが、会ったのはその時だけらしい」

それと、とフィルは付け加える。

「テスラがコーラルでワインを見かけたそうだ」

「こ、コーラルだと！」

「ああ、教会の近くで誰かを待っていたらしい」

「1人じゃないのか……もしかして」

「ああ、俺はフレイル先輩だと思っている」

「しかし、何故」

「それは知らん。だが、理由もなくウインがこんなことをするとは限らない。何か、理由があるはずだ」

「そう、だな。……まあ、生きていればまた、会えるだろうな」

「ああ……で、アイリ・シグニットとはどうするんだ？ 告白されたんだろ」

「なぜ、それを知ってるんだ」

「ふん、俺を誰だと思ってる。学院の事で知らないことはないんだ」

「そうだったな、情報屋のお前が学院内で知らない情報はないな」

「どうやって情報を手に入れたのか疑問に思いながらも、それが情報屋だと思うことにして納得した。」

「で、どうなんだ？」

「……俺は、ウインが好きだ。この思いは変わらない」

「そうか、なら……」

「だが、付き合ってみることで俺が知らなかったアイリの良さが見つかるともしれない」

「……つき合うんだな」

「
ああ
」

フィルは呆れたようにため息をついた。

第19話（前書き）

＊注意事項＊

久しぶりに更新。楽しんで貰えたら幸いです。が相変わらずの駄文
+ 短い。読んでいただけることに感謝です。

第19話

シルフィードとアイリが付き合うことになって数日、文化祭の朝を迎えた。

クラス対抗トーナメントは等部毎に行われる。シルフィード達中等部のトーナメントが行われるのは食堂横コート。

ちなみに、初等部は体育館裏コート、高等部はグラウンド、上等部は校舎屋上特設会場で行われる。

「シル君、頑張って！」

「ああ、優勝してくる」

シルフィードと付き合い始めてアイリはシルフィードの呼び方をマグナス君からシル君に変えた。

「……ふん、初戦からシルが相手だとはな」

コートの向かい側にはリサーバが立っていた。

「リサーバ！ マグナスなんてボコボコしちゃえ！」

「もちろんだ！」

「シル君！ リサーバ君なんかねじ伏せて！」

「あ、ああ」

対決開始の合図になり、2人はお互いを睨みつける。

「行くぜ！」

リサーバはシルフィードにむかって火の玉を撃つ。シルフィードはそれを避けリサーバに蹴りを放つ。

「っ！……はぁ！」

リサーバはシルフィードに攻撃を放つがシルフィードは軽々と避け続ける。

「……行くぞ。炎拳！」

ゴウウ……ドガアアッ！

シルフィードは自身の手に炎を纏わせリサーバを殴った。リサーバは受け止めきれず、後方に吹き飛ばされ気絶した。

『勝者、シルフィード・マグナス！』

審判が気絶したリサーバを見て高らかに勝者の名前を告げた。

「リサーバァ！」

すぐさまセレーナはリサーバに近寄り心配そうに抱きついた。

「……俺の勝ちだな」

コートから出てシルフィードはアイリに近づいた。

「ねえ、さっきのは魔法？」

「ああ、まあそうだな。……父さんから教えてもらった。魔法よりも武術に近いかな」

「へえ……で、次の試合はいつだっけ？」

「一回戦が全て終わった後……以外と早いな」

中等部トーナメントは全11試合……各学年の1位が決まったあと、1、2年が戦い、その勝者と3年が戦う。

「あ、あのさ……トーナメントが終わったら一緒にお店まわろう」
文化祭には学生が催した店がたくさんある。トーナメントだけでなく出店を目当てに文化祭に来る一般人も多い。

「ああ、良いぞ」

「……楽しそうね」

「せ、セレーナ」

アイリの視線の先では彼氏を見事なまでに打ちのめされふくれっ面のセレーナが2人を睨みつけていた。

「やっぱりアンタム力つく！ 来年は必ずリサーバが勝つから」

セレーナは不機嫌な雰囲気を漂わせ去っていった。ちなみにリサ

ーバは医務室に運ばれている。

その後、ほぼ一瞬でシルフィードは試合を終わらせて行き中等部1年1位となった。次は2年と勝負になりシルフィードはコートに入った。

「Sランクといえど1年、俺様の敵ではない！」

「先輩、そのセリフは死亡フラグだと思いますよ」

「ほう、後輩の癖に生意気だな」

対決の合図が鳴り、シルフィードは一気に間合いを詰める。

「……雷拳！」

ビリビリッ……ドゴオオッ！

電気を纏わせた拳が2年代表にたたきつけられ、2年代表はその場に倒れ込む。

『勝者、シルフィード・マグナス！』

審判が勝者の名前を告げたあと、2年代表が医務室に運ばれ3年代表が入ってきた。

「2年を倒すとは今年の1年はなかなかだね。さすがSランク」

「ありがとうございます」

「僕の名前はアーク・アルシエル。お手柔らかに頼むよ」

「生憎、先輩方に遠慮をする気持ちはありません」

対決の合図が鳴り、シルフィードが先に動き出す。

「炎拳！」

ゴォ……パシッ！

「な！」

シルフィードの拳をアークは左手で掴む。

「ふむ、熱いね」

「くっ！」

シルフィードはアークの手を振りほどき間合いを取る。

「次は……僕の番だね」

アークは脚を振り上げる。

「……炎脚！」

ポオオッ！

アークの振り上げられた右足が炎に包まれる。

「破！」

ドガアアアッ！

振り下ろされた脚がシルフィードにぶつけられ、シルフィードは後ろに吹き飛ばされる。

「ぐっ……」

シルフィードは地面に叩きつけられ気絶した。

『勝者アーク・アルシエル！ よって中等部トーナメント優勝はアーク・アルシエル！』

コートの周りから歓声が上がる。シルフィードは医務室に運ばれ医務室のベッドに寝かされた。しばらくしてシルフィードが目を開き、周りを見渡すとトーナメントで気絶した者達が寝かされていてその近くには友達や恋人がいた。

「シル君、目が覚めたみたいだね」

「……負けたんだな」

「うん。でも凄いよ2年生に勝ったんだし」

「……もう、夕方だな。ゴメンな、いろいろ見れなくて」

「大丈夫だよ。明日は体育祭だけど身体は良いの？ 痛まない？」

「少し痛むが大丈夫だ。心配してくれてありがとう」

「そ、そりゃシル君のこと好きだから心配するよ」

互いに顔が赤く染まりうつむいた。その顔は微笑んでいて、どことなく嬉しそうだ。

「はあ、見せつけてくれるわね」

「あ、セレーナ」

「ん、リサーバはもう大丈夫なのか？」

「おかげさまで元気だ」

リサーバはセレーナと手を握ってシルフィードに近づいた。

「2人もなかなか熱々かな？」

「アイリ達ほどではないよ」

「シル、今から夕食を食べに行くがお前はどつする」

「ん、俺達も行くのか」

「そうだね」

シルフィード達4人は医務室を出て食堂で夕食を食べた。寮の自分の部屋にもどったシルフィードはすぐさまベッドに入った。

「お、今日はお疲れだな」

「ああ、フィル。今日はゆっくり休ませてくれ」

「了解」

フィルは部屋の電気を消し、シルフィードと同じく自分のベッドに潜り込んだ。

第20話（前書き）

＊注意事項＊

駄文なことは変わらず……。気ままに書いてますがそれでも良い方は読んでください。読んでくださる方々に感謝です。

第20話

学院祭2日目体育祭。学生が催す店はないが、業者などにより数店あった。体育祭は学院初等部から上等部まで各クラス5人代表をえらび1チーム80人の4チームで行う。代表は各クラスのランクが高い者から選ばれる。ちなみにチームは1組だったらチーム1となり、クラスとチームは対応している。

シルフィードは2組で勿論代表に選ばれている。他にもアイリ、レイル、カシア、フィルがいる。

「おや、昨日ぶりだねSランク君」

「アルシエル先輩、一緒にチームなんですね」

「みたいだね。僕のことはアークって呼んで良いよ。……身体の子はどうだい？」

「大丈夫です」

グラウンド後方、選手待機席は和やかな雰囲気にも包まれていた……。

「はっはっは！ 今日こそはお前に勝つ！」

リサーバが高笑いしながらシルフィードを指さしているが誰もそれをみようとしなない。ちなみにリサーバは3組でリーチも代表だ。キースは4組の代表だ。ちなみに4組の代表にはブルムもいた。

中等部代表として選ばれているのは最低でもDランク……中等部

卒業時規定ランク以上の者達だ。

「ふ、また会ったな1年。昨日は油断したが今回は負けない」

「……誰だっけ？」

「昨日、お前に瞬殺されたイドリア・マケインだ！」

「……そっぴや名前知らなかった」

「まったく、面倒くさい」

キースは欠伸をしながらため息をついた。

「キース君、面倒くさいって何かな！」

「いや、何でもないっす負け犬先輩」

「マケインだから！ 負け犬じゃないから！」

「負け犬もマケインも大して変わらないっしょ……同じチームだから足引っ張らんでくださいね」

「……今年の1年どもは何で」

イドリアは嘆いていたが中等部はもちろん他の代表にも完全に無視されていた。

「な、なあユナイゼル。俺Dランクになったばかり何だけど……」

「あゝ？ ちょうど5人しかD以上がいなかった屑クラスだからし

「やあねえ」

「く、屑って……。ユナイゼルが一番屑じゃ……」

「何、喧嘩売ってんの？ 買っちゃうよ俺」

シルフィード、フィル、リーチ、リサーバ、テスラ、キースの6人は学院の教師から問題児達の集まりだの屑の集まりだと言われてきた。

それは生活態度や授業態度の悪さからだが、ランクは平均以上、シルフィードに至ってはSランクだ。教師達も少しずつ見方を変えつつある。……キース以外。

キースは授業を平気でサボることはもちろん、喧嘩も頻繁にすむ場合によつてはその喧嘩で相手が病院送りにされる。

それ故、クラスどころか学院内の生徒でキースに話しかける者はほとんどいない。だが、学院内の誰もがキースの名前を知っているも顔までは知らないこともある。キースとは知らず話しかけて、名前を知った途端おびえ始める。

ブルムは4組でキースに話しかける数少ない女子だ。

「け、喧嘩なんか売るわけねえだろ！」

「そもそも俺に話しかけるな」

「別に良いだろ！ 同じクラスだし……」

キースは不機嫌そうに顔をしかめる。

「クラスだあ？ は、あんなの1年間だけのもんだろ。俺はお友達
ごっこする気はねえ」

「だ、だけど来年同じクラスになるかもしれないだろ」

「同じクラスに居ないと話さないのか？ まあ、単なるクラスメー
トってやつが気楽だよな」

「お、お前何言って……」

キースは何かを思い出したような顔をしてプルムを見る。

「そっぴいやお前、俺を屑だと言ったが屑に負けるようなお前はそれ
以下だよな」

「な！」

「そうだな……屑以下だからゴミ屑か？ それとも塵か？ まあ、
何が良い」

「知るか！」

プルムはキースから距離を取ろうとする……が、その様子を見た
キースがニヤリと笑う。

「何だ、機嫌悪くなっちまったか？ 尻尾巻いて逃げんのか？」

「そんなんじゃないねえ！」

ブルムは再びキースに近づいた。2人の口論はかなりの音量だったが、周りのほとんどの生徒は見て見ぬ振りをしている。初等部に至っては泣きそうな生徒もいる。

「しかし面倒くさいよな、体育祭なんて……なあお前、何か問題起こせ」

「は、はあ！ 問題なんて起こしたら処罰対象だろ……それに噂じやかなりキツイ処罰もあるって」

「何だ、怖いのか？」

「お前は怖くないのかよ！」

「全然。そのキツイ処罰つての知りたくないか？」

「お、お前本気か？」

「ああ、安心しろ。しっかり巻き込んでやる」

「あ、安心出来るか！ まず、何をするつもりだ」

ブルムに聞かれた瞬間、キースは待つてましたと言わんばかりに微笑む。

「こうするんだよ！」

キースはいきなりブルムに炎を放つ。ブルムは反射的に水を放ち炎を防ぐ。

「な、何するんだよ！」

「く、くくく……はははははは！ 使ったよなあ、お前魔法使ったよなああ！」

「あ……」

そう、学院内での魔法使用は授業以外は禁止。処罰対象だ。

「それに、今日は体育祭で一般人も大勢……。そんな中で校則を破るなんて普通の処罰じゃすまねえよな！」

キースの言葉にブルムは真っ青になる。それに対してキースは愉快そうに笑っている。周りにいた生徒は2人から離れていた。周りの生徒が離れたのはキースが魔法を使用する直前だった。何かが起きると感じた生徒達が巻き込まれまいとすぐさま距離を取ったのだ。

教師達からは2人が魔法を使う瞬間がはっきり見えていた。それは他の人達も一緒だ。

「なあ、キツイ処罰を確定的にするには……もっと騒ぎを大きくする必要があるよな」

「も、もう止める！」

ブルムの叫びを無視してキースは魔法を使う。

ゴオオオツ！

キースの周りから炎が吹き出し炎柱が出来る。

「さあブルムウ、お前も魔法を……」

ドガアアア！

雷がキースがいた場所に落ちてくる。キースは素早く避ける。キースがその場を離れたことで炎は消える。

「貴様ア！ 俺とシルの勝負が出来なくなったらどう責任とるんだあ！」

キースが雷を放った主……リサーバを睨みつけた。リサーバの近くにいたリーチはブツブツ呟きながら頭を抱えていた。

「お前がSランクに勝てるワケねえだろ、現実見るやあ！」

「潰す！ シルを潰す前にキース、お前潰す！」

「やるのか？ 殺るってかあ！ いいぜえ、俺の本気……見せてやるよおお！」

キースが叫び再び炎が吹き出てリサーバに向かっていく。リサーバはそれに目掛けて雷を放つ。

「ウオオオオオッ！」

ズガアアアッ！

2つがぶつかり合い、周りに衝撃が伝わりグラウンドの砂が舞い上がる。その砂埃は周りの者の視界を完全に防いだ。

砂埃が晴れた後、そこにあつたのは後頭部を踏みつけられ頭が地面にめり込んでいるリサーバと踏みつけているアーク、腹を殴られうずくまるキースと殴ったシルフィードだった。

「馬鹿共が……」

その光景を見てリーチは頭を抱えてグランドの片隅にうずくまっていた。他の者達が呆然としていたのは言うまでもない。

第21話（前書き）

＊注意事項＊

短め、駄文、閲覧注意！

第21話

シルフィード、キース、リサーバ、アーク、プルムは学院長室に呼び出されていた。体育祭はあの後中止……その原因である5人は学院長室で1人を除いて平然としている。

「さて、呼び出されていた理由はわかるだろう」

「ちょっと待ってください。アークと俺は魔法を使っていません。それに、俺達が止めなければ被害はもっと……」

「わかっている。まあ、話を聞け」

シルフィードは抗議するが学院長の言葉で黙った。

「我々が確認した魔法使用者は3人……間違いはあるか？」

「ない」

「その通り」

「じ、ごめんなさい！」

上からリサーバ、キース、プルムだ。

「無論君達3人には処罰を受けてもらう。シルフィード・マグナス、アーク・アルシエル……君達は魔法を使わず己の武術のみで2人を止めたのは誉めるべきことだが、教師達の前で暴力行為はいただけない」

シルフィードとアークはその言葉で納得した。

「シルフィード・マグナスとアーク・アルシエルは嚴重注意……と
いいたいところだが、教師だけではなく一般人も居たわけだ。まあ、
3人ほど厳しい処罰ではなかるうがそれなりに厳しい処罰だ」

学院長は机上の書類に目を移す。しばらくして学院長は顔を上げ
5人を眺める。

「それでは処罰の内容だが……」

マジックゲート時計台

マジックゲートには時計台があり、学院敷地内のどこからも見え
るように校舎よりも高く作られている。その屋根から2人の生徒が
逆さ吊り下げられていた。

「なあ、こういう処罰ってどうなんだ？」

「問題無いんじゃないかな。どうやら見えないように認識阻害の結
界が張られているみたいだし」

シルフィードとアークは処罰として時計台の屋根から半日逆さに
吊り下げられている。学院祭の振り替え休日である今日はほとん
どの生徒は街に出掛けていて見られる可能性も低いが更に認識阻害さ
れている。

「……頭に血が上るね、これ」

「だな……。1人で吊り下げられていたら精神が壊れそうだな」

「ん、壊れるほどではないと思うけど高い所が嫌になっちゃうね」

「それにしても、こんな時に呑気に話せる俺達って……」

「うん、変わっているよ」

マジックゲート地下

キース、リサーバ、プルムの3人は学院の地下に閉じこめられていた。

「学院に地下があつたなんて……」

「ん、あそこに貼り紙があるが、どうやらここは迷宮らしい」

「迷宮？」

「ああ、迷宮から出れば解放……出ることが出来なければ一生さまよい続け屍となる」

「そ、そんな……。いくら何でもしばらくしたら助けてくれるはず」

「そついや迷宮には魔獣が放たれているらしいな」

「ま、魔獣!」

「フィルが言ってたからな」

「ん、フィルが言うなら本当なんだな」

キースとリサーバは呑気に話しているがプルムはガタガタ震えている。

「な、何で？ 魔法を使っただけどここまで重い処罰って……」

「十中八九俺のおかげだな。感謝しな」

「黙れキース。サツサと抜け出して外に出るぞ。俺はセレーナとイチヤイチャしないといけないからな」

「勝手に言ってる」

「こ、こんな奴らのせいで俺は……」

「何か言ったかプルム」

「い、言ってますん」

3人は出口を探すために迷宮を歩き出した。

マジックゲート学院長室

「しかし、迷宮行きとはねえ……伝説の魔術師がそんなことさせるなんて」

「伝説か……伝説と言っても中学生でSランクになり魔術協会の手伝いをしていただけだよ」

「謙遜すんなよ。……迷宮にミノタウロスを放った。ただのミノタウロスじゃない。俺達が異世界の技術を使って作ったミノタウロスだ」

「構わない。迷宮行きの奴らは何処にでもゴロゴロいる普通の魔術師。時計台の2人はかなりの実力がある」

「邪魔される可能性があるから時計台に吊り下げたんだな」

「ああ、人工魔獣の性能テストだからな。失敗するとかなりの損失になる」

「だがよ、迷宮行きの3人にミノタウロスを殺られることはないのか」

「あるわけないだろ、彼らは……落ちこぼれだからな」

第22話（前書き）

＊注意事項＊

久しぶりの更新です。相変わらずの駄文。

第22話

「108、109、110……」

「さつきから何してるんだ？」

「腹筋」

シルフィードとアークが吊り下げられて数時間。いきなりアークが腹筋をし始めた。

「こんなところでよく出来るな」

「こつしないとき、血が上るんだよ」

「分かるけど……」

「いつまでこのままだろうね……」

「もう少しじゃないですか？」

地下迷宮

リサーバ、キース、ブルムの3人は迷宮内の通路を走っていた。

「聞いてない！ 何でこんな化け物がいるんだよ！」

「あゝ？ あれだ、迷宮つていえばミノタウロスじゃねえか！」

3人の背後には顔は牛で体はムキムキの人型の化け物……ミノタウロスが凄まじい勢いで追いかけていた。

「で、でも……ミノタウロスが翼なんか生やしてるわけねえだろお
お！」

そのミノタウロスの背には立派な翼が生えて飛んでいた。

「速え！ あの牛速過ぎる！」

「リサーバ、あの牛に突っ込め！」

「死ぬだろ普通！」

「大丈夫、ミノタウロスの手を見てみる！ どでかいハンマーしか
持ってねえじゃねえか」

「潰される、絶対にぺしゃんこにされるから！」

男子2人は体力があるのだが、プルムは少しずつ2人から遅れ始め、ミノタウロスが迫ってきてた。

「き、キース！ 助けてええ！」

「自分で何とかしやがれ！ クソ女」

「薄情者！ 鬼！ 悪魔！ 人間のクズ！」

「薄情者で結構、鬼で結構、クズで結構……だが悪魔は取り消せえ
え！」

キースはクルリと振り返り手をブルムに突き出した。

ボオオオッ！

「ち、ちよつと！」

「ファイヤアアー！」

「キ、キヤー！」

キースは特大サイズの火の玉をブルムに向けて放った。ブルムは何かに躓き顔面から床に突っ込んだ。倒れ込んだブルムの上を火の玉が通り過ぎる。

「グオオオッ！」

火の玉はミノタウロスに当たりミノタウロスは炎に包まれた。リサーバは口を開けて呆然と、ブルムは涙目で、キースは顔をしかめ、その様子をみていた。

「外したか……」

「ほ、本気で俺に当てる気だったのかよ！」

残念そうに舌打ちしたキースにブルムはツッコミを入れた。

「お、おい。まだ動いているぞ」

炎に包まれたミノタウロスは翼を焼け落としても、侵入者を排除

しようとハンマーを引きずりゆつくりと3人に近づいている。

「ははは、ステーキにしてやるぜえ！」

ゴオオオッ！

キースはミノタウロスに向けて炎を放つ。キースの手のひら上に魔力が構成され発生した炎はとどまることなくミノタウロスに降り注ぐ。

……ブオン！

「……っかは！」

炎の中からハンマーが飛び出しキースの腹に直撃する。キースは壁に叩きつけられ気絶した。

「ブモオオッ！」

ミノタウロスは気絶しているキースに向かって突進してくる。

「く、油断しやがって……喰らえ！」

バシユッ！

リサーバはミノタウロスに電撃を放つ。ミノタウロスは動きを止めリサーバを見る。そして攻撃対象をリサーバに変更する。

「こ、コイツ、電撃も効かねえのか！」

「ブモオオオッ！」

「ぐっ……」

リサーバはミノタウロスを突進を受け壁にめり込み気絶する。ミノタウロスは振り返り最後の標的に狙いを定める。

「い、いや……こ、来ないで……」

ブルムは立ち上がれずガタガタ震えることしかできない。

ミノタウロスはゆっくりと確実にブルムに近づいている。

ドゴオ！

突然、炎に包まれたハンマーがミノタウロスに向かって飛んできた。ブルムは恐る恐るハンマーが飛んできた方向を見る。

「き、キース！」

「ム力つく……。化け物が、俺様にたてっこうなど、マジ、ム力つくんですけどおお！」

ミノタウロスの足下から炎が床を突き破って吹き出す。さらに両方の手のひらに魔力を集中させ炎をミノタウロスに向かって放つ。

「死ねよ、化け物！」

「グオオオオッ？」

「ヤケロヤケロヤケロヤケロヤケロ……焼け死ね！」

炎が赤から徐々に黒くなっていく。漆黒の炎はミノタウロスを覆う。しばらく炎は燃え続け、そこに残ったのは灰だけだった。キースはその場にうつむいて立っていた。

「き、キース？」

ブルムはおそろおそろキースの顔をのぞき込む。

「……なんだよ」

「ご、ゴメン。……さっきの炎って何だ？」

「……誰にも言わないか？」

「あ、ああ」

「もし、誰かに言ったら殺すぞ」

「ひつ……や、やっぱり教えなくていい」

「ふん」

キースはブルムから離れ壁にめり込んでいるリサーバを引き剥がす。

「起きろ、馬鹿」

「あ、あれ？ 牛はどこだ？」

「燃やした……灰だけしか残ってない」

「……そうか」

3人は迷宮を歩き、ようやく出口を見つけ外に出た時は、もう日が暮れていた。

「……食堂に行くか」

学院長室

「……驚いたな。まさかミノタウロスが」

「あのミノタウロスはSランクでも倒すのが難しい……何者だ」

「……要観察だな」

ちなみにシルフィードとアークは3人が迷宮を出た1時間前に解放されていた。

第23話（前書き）

＊注意事項＊

駄文。思いがまま書いてます。趣味で書いてます。

第23話

シルフィード達の処罰からしばらく、季節は秋から冬へと変わっていく。学院祭が終わりいつも通りの毎日が続く。体育祭の一件でキース、リサーバ、プルムの学院内の評判は最悪のものとなる。

3人を止めるような形になったシルフィードとアークは逆に評判は良くなる。2人が止めなかったら被害が広がっていただろうと周りが思ったからだ。

「な、なあセレーナ、アイリ」

アイリ、セレーナ、プルムは食堂で昼食をとっていた。周りにいる生徒はひそひそと3人を見て話している。

「ん、どうしたの？」

「お、俺と一緒にいたら悪い評判たつぞ？ だから、な」

「気にしないよ、私たちは。……そもそもセレーナはリサーバとつきあってるし、私はシルフィードとつきあってるから」

「……シルフィードは評判良いじゃん」

「でもシルフィードはリサーバやキースとも友達だよ」

「だ、だけど……」

「プルムは私たちのこと嫌いなんだね……」

セレーナの悲しそうな表情にプルムは慌て始める。

「ち、違う！ 俺は2人のこと好きだけど、だからこそ……」

プルムがそういうとセレーナは若干頬を赤く染めプルムを見つめる。

「す、好き！ わ、私は女だし彼氏いるし……」

「……セレーナ、今大事な話しているから」

「……ごめん」

「そ、そういう意味の好きじゃないからな！ ……ちょっとはそうだけど」

プルムがそう言うと2人は驚いたような顔をして、少しプルムから距離を取る。

「……え！」「」

「え、って！」「ごめん、冗談だから」

「えー」「」

今度は残念そうにため息をつく。

「な、どんな反応すれば良いんだよ」

「プルムはプルムで良いんだよ」

「……アイリ」

「男が好きでも女が好きでもプルムはずっと大切な友達だよ」

「あ、ありがとう……だけど、誤解しないでえ！」

何だか話がズレてきたと思うプルムだが、こういうのがずっと続いて欲しいと思いながら誤解を解こうと必死だった。

2人はもちろん冗談のつもりでプルムをいじっては楽しんでいるのだが、プルムはそれを知る由はない。

3人から離れていて見えないところでシルフィード、キース、リサバが昼食を取っていた。周りにいる生徒は視線を合わせないようにしていそいそと食べている。

「……プルムにバレしまったな」

「ん、黒炎のことか」

「ああ、忌々しい悪魔の炎だ」

「忌々しい……か」

「……プルムのことはどうする」

シルフィードに聞かれてキースは料理を食べる手を止め考える。

「炎のことは教えてないし、一応脅しておくか」

「……どんな風に？」

「あの炎は誰にも言うな、爪をはぎ取られ耳を引きちぎられ目をつぶされて良いのなら別だが……はどうだ？」

「うん、食事中に聞くセリフじゃないことはわかった」

リサーバは顔を若干青くしている。シルフィードは何かを考えるような素振りをしてキースを見る。

「目は潰すよりえぐり取る方が良さだろ、あと皮膚も剥がせばどうだ？」

「それ良いな」

「……お前ら」

リサーバは呆れたように呟くが、2人の会話は止まらない。指を潰すや一本ずつ切り取るなど、他にも口に出すのもはばかれるグロイことをためらいなく話している。

2人の会話を聞いた近くの生徒は顔を青くしている。中には料理を吐きそうにしている生徒もいて、女子にいたっては涙目……泣いている生徒もいる。

ちなみにシルフィードとキースはわざと近くに聞こえるくらいの大きさで話している。気持ち悪くなって立ち去ろうとする者はキ―

スに睨みつかれて恐怖により動けなくなる。

「……そろそろ昼休み終わるぞ」

「ん、もうそんな時間か……周りがまだ食べているから気づかなかつた」

「ああ。それにしても、みんな具合悪そうだな」

……お前らのせいだろ。

心の中でリサーバはそう叫んだ。

午後からの授業で具合が悪く保健室に行く者が多かった。不思議に思いながらもキースは授業を受けていた。

午後の授業が全て終わり、キースの近くの席の生徒が急いで教室から立ち去る。キースはブルムの席に向かう。

「あ、キース……」

「この間の炎のことは誰にも言うな。言った時はじつくりとお前を痛めつけて殺すから」

「な、何をする気だよ」

ブルムは顔を青くしながら聞いた。

「まあ非人道的なのは間違いないさ」

「わ、わかった。……なあキース」

「ん」

「なら、あの時の黒い炎のことを教えてくれないか？」

「駄目だ」

キースは即答した。

「あの時、誰にも言わないなら言っつて……」

「いつまでも条件が一緒だと思うな」

「な、なら、条件は？」

「そうだな……俺の奴隷になれ！　なんてな、ハハハ」

キースは愉快そうに笑いながら立ち去ろうとする。

「……奴隷になれば教えてくれるのか？」

「……ハア？」

キースがプルムを見る。プルムは真剣な顔をしてキースを見つめていた。2人以外は既に教室から去っていた。

「……本気か？」

「ああ、本気だ」

「何でそこまでして知りたい？」

「……俺はお前がいなかったら死んでたと思う。俺、お前の……キースのことをもっと知りたいんだ。お前が何を抱え込んでいるのか知らないけど、少しでもお前の支えになりたいんだ！」

「……何だか男らしいセリフじゃねえか」

「お、俺は女だ！」

「ははは……教えてやる。俺の過去から話すか……俺の両親は悪魔に殺された」

「あ、悪魔……」

「ああ。悪魔つてのは召還されない限り人間界には来ない。……呼び出したのは俺なんだ」

「な！」

ブルムは目を見開いてキースを見る。キースの言葉はキースが親を殺したことになる。

「そう……俺が、俺が召還した悪魔で、両親を殺した」

「な、何で！」

キースはブルムに睨みつけられるがヘラヘラと笑っている。

「両親が……ヤツらが俺のことを化け物扱いしたからだ」

「……え？」

「俺は生まれた時から魔力が高かった。そこまでは良いんだ……。俺の力はSランクにとどまらなかった」

「なっ」

「俺が力を発する度に広範囲が燃え周りからは化け物だの怪物だの……挙げ句の果てに悪魔だ。周りはもちろん親も俺を避け始めた……それで俺は本物の悪魔を召還した」

「……それで、どうなったんだ？」

「かなり上位の悪魔だったらしく、町を燃やし尽くした」

「そ、そんな……」

「その後がかなり愉快なんだ。悪魔が俺を気に入ってさ……取り憑いているんだ」

「な！　ならあの炎は？」

「あれはもともと俺の力だ。……あと、どうやら俺と悪魔は似たような能力らしい。……で、説明終わり。お前、俺の奴隷になるんだな？」

キースはニヤニヤしながらブルムを見る。

「あ……約束、だからね」

「なら、俺には逆らわないこと、ご主人様と呼ぶこと……良いな？」

「ああ……ご主人様」

「ん、口調も奴隷らしくな……はは」

「……わかりました」

「無論、人前でもだからな」

「……はい」

「良い返事だ……。夕飯食いに行くぞ」

「わかりました」

愉快そうに鼻歌を歌いながら前に行くキースをブルムは俯いてついて行く。その顔はつらそうだった。しかし、何かを耐えようとする顔じゃなく、誰かをどうにかしてあげたい……救ってあげたい、そんな表情だった。

第24話（前書き）

＊注意事項＊

やはり駄文。アイデアがあまり浮かばない……。

第24話

「……お前ってやつは」

「そうだな、俺も自分のことが理解出来ない」

「「やつちまったな」」

キースは部屋に戻ったあと、同室のテスラに今日の出来事を話す。

ブルムを奴隷？ にしたあと夕食を食べに食堂へ行く。今までにはなかった組み合わせに皆の注目を浴び、さらにはブルムがキースを「ご主人様」と呼んだことでさらに周りから視線を受ける。

いつもブルムと一緒に食べているアイリとセレーナは離れたところに座りキースを睨みつけてくる。キースが睨めば慌てて目を逸らすのだが……。ちなみにシルフィードとリサーバは啞然としていた。

一緒に食べているだけならまだマシだったのだがブルムはキースに敬語、「ご主人様と呼ぶので」「キースがブルムに何かをした」と周りが思う。

間違いではないのだが、周りの反応が予想よりも大きくキースは少し後悔していた。

……奴隷になれじゃなく話しかけるな、ぐらいにしとけば良かった。

そう思うキースだが、すでに手遅れだ。

夕食後、部屋に戻ろうとしたキースのあとをブルムがついて行くうとしたが、さすがに止める、と言って自分の部屋に戻らせた。

「なあ、キース。きっと明日には噂が誇張されてから広まってるんじゃないか？」

「だよなあ……。噂が広まる前に脅すか」

「誰をだよ」

「むっ……。妙な噂をたてた奴は殺すって貼り紙しとくか」

「……勝手に貼り紙したら処罰対象だ」

「……よし、フィルのところに行く」

「……え、何で？」

キースはテスラとともにシルフィード達の部屋に向かう。すれ違う生徒がキースを見てコソコソと話していたが、キースが睨みながら壁を叩くと怯えてそそくさと立ち去る。たまに睨んでくる生徒もいるが、これまたキースが睨めば慌てて立ち去る。

「……そっぴやブルムは意外と男子から人気なんだよな」

「なら俺を睨んでくる男子は嫉妬ってか？」

「だろうな」

「あゝ あ？ 面白くねえ」

キース達がシルフィードの部屋に入ると、シルフィード、フィル、リーチ、リサーバがいた。

「お、噂をすればなんとやら……」

「おい、フィル！ 俺の噂を教えてくれ」

「先輩をボコボコにして舎弟にした噂か？ 他にも、先輩の彼女を奪ったり、街の不良をボコボコにして子分にしたり、街でモテたりしてるって噂があるが……」

「2番目以外事実だ……じゃなくて、俺が知りたいのは！」

「キースとプルムがつき合って主従プレイしてるって噂か？」

「主従プレイって何だよ！ ってか俺がプルムとつき合ってることになってんのか……」

「それより先輩と街の不良をボコボコにしたのが問題だが……」

「うぜえ、眼鏡」

「……なあ、一度はつきりどっちが上なのか決めないといけないと思っていたんだ」

「ふん、今からやるか？ ここで」

「ここ、俺達の部屋なんだけど」

今にも喧嘩を始めそうな2人にシルフィードはため息をつく。

女子寮

ブルムの部屋には同室のセレーナに加えアイリがブルムと話していた。

「キースとつき合ってるって本当？」

「な、何だよその噂」

「だ、だって、今日の……主従プレイなんでしょ？」

「な、何そのプレイ？」

「え、違うの？」

ブルムは2人にキースとした話……炎のことは除いて話した。

「秘密つてのがよくわからないけど、奴隷になってまで知りたい秘密だったの？」

「うん、俺にとっては……」

「……？ 秘密を知りたいってことはブルムはキースに少なからず興味があるんだよね？」

「え……。そ、そんなことない、よ」

否定するプルムだが、顔は真っ赤だ。それを見てセレーナはニヤニヤしている。

「これってチャンスだよ、告れば？」

「だ、だから……」

「私で良ければ協力するよ」

「ほ、本当に？ ……あ」

アイリが協力すると言うと、プルムは思わず聞き返した。プルムがセレーナを見ると勝ち誇ったような笑みをしてプルムをみていた。

「やっぱりさ、気持ちを伝えるのが一番良いんだよ」

「む、無理！ それに俺のせいで変な噂がたってるし」

「なら、噂じゃなくて事実になれば？」

「……は？」

「つき合って、奴隷のままだったら事実ってことじゃない」

「え……。そうなるのか？」

「そつだよ！ 告白するのは明日だからね」

「私も応援してるからね。それじゃ、また明日」

「え。ち、ちょっと……」

アイリはブルムの部屋を去っていった。

「ついにブルムにも恋人が……」

「ついにつて……普通、中等部で恋人いるって早すぎじゃないかな
セレーナにはブルムのため息が聞こえないようで、どんな応援を
しようか悩んでいた。」

クロリア王宮魔術協会会長室

「魔術騎士団騎士長……バアル・ゼブル」
「はい」

「魔術騎士団第1隊隊長グレイ・グレファス、第2隊隊長ノエル・
エトワール、第3隊隊長ギルティー・クルーエル、第4隊隊長リユ
ージ・K・レクティード」

「……はい……」

「君達には海軍とともに調査してもらいたいことがある。ある島に
多大な魔力が集中していることがわかり、そこで君達を派遣して実
態を調べて欲しい」

「しかし、我々が国から離れるとなると……」

「問題ないだろう、第5、6、7、8、9隊隊長がいるからな。魔術六将もいる」

魔術六将とは魔術協会に在籍している魔術師のランク上位6名（会長・騎士長除く）のことだ。ちなみに、グノムスの後を引き継いで魔術騎士団騎士長になったのはバアルだ。

「所詮、魔術騎士団の下っ端相手でも勝てる者は少ないってことですね」

会長ルキフグスの言葉を聞いてノエルは頷きながら呟く。

「しかし、元騎士長はたった1人に殺されたんだろ、グレファス第1隊隊長」

「……ああ。だが相手は」

「魔人だったんだろ。つまり、魔人相手には騎士団はかなわないってことだ」

「……騎士団全体のレベルを上げる必要がある」

「問題ない。君達が調査に出ている間、特別講師に来てもらう。…君達が戻って来た時は下っ端相手に勝てなくなってるかもな」

「それは楽しみですな」

バアル以外の4人が部屋を出ると露骨に嫌そうな顔をした者がい

た。ギルティーだ。

「何だって俺達が孤島に調査に向かわなくてはならないんだ！」

「……落ち着けクルーエル。我々にしかできない任務だ」

「？ レクティード、どういうこと」

「エトワール嬢、その孤島は魔力が溢れている。よって、魔獣も桁違いに強いだろう」

「へえ、所詮他の隊長は頼りにならないってことね」

3人が調査のことで話していると、グレイは離れたところで考え込んでいた。

「……特別講師が気になるな」

4人が部屋を出て残されたバルはルキフグスと話していた。

「4人の監視、および始末を頼みます」

「了解した。で、ルキフグスよ。彼らを始末するために他の者が犠牲になっても構わないのだな」

「左様でございます。ところであの方はまだ見つからないのでしょうか？」

「ああ、確実にこの世界にいらっしゃるがどこにいるのかわからな

い
」

「そうですか。……しかし、4人を始末しなくとも……」

「彼らは我らが望む世界を脅かす存在になるだろう……グノムスと同じようにな」

「……そうですね」

バルが会長室を去るのをルキフグスは黙って眺めていた。

第25話（前書き）

＊注意事項＊

短め、駄文、作者に文才無し。趣味で書いてるため期待しないこと。

第25話

ある休日の昼下がりのこと、キースとプルムは街にある喫茶店のテーブルに向き合って座っていた。

「……もう一度言ってくれるか？」

「お、俺とつき合ってください！」

「はあ……お前は俺の奴隷。わかる？ 奴隷と主人との間に恋なんてありえない」

「お願いします！ 俺は、キースが好きなんだ！」

「……キースじゃなくてご主人様だろうか」

「なあ、頼むよ！」

プルムはテーブルをバンツと両手で叩き立ち上がり頭をかがめキースを見つめる。大きな音が店内に響いたことで他の客の注目を集める。

「……ゴンツ！」

「痛っ！ 何すんだよお」

プルムは頭を押さえて涙目でキースを見る。キースはプルムを叩いたあとため息をつく。

「お前……。そもそもまだ中等部1年だ。恋愛なんて早すぎる。……シルとバカリサーバは別だがなあ」

「ほら、知り合いが2組もつき合ってるんだから俺達も、な、な！」

「やかましい、屑が。奴隷のくせにつき合おうとか考えんな」

「な、なら……。今度あるランク分け試験でお前より高ければつき合ってくれないか？」

「お前が俺に……。面白い、いいだろう」

「ほ、本当か！」

「だが！……俺が勝ったら黙って俺の言うことを聞いてろ、お前から話しかけるな……。いいな？」

「う……。わかった」

「よし、なら決まりだ。楽しみにしてるよ……。プルム」

「お、おう」

キースにひさしぶりに名前を呼ばれたプルムは若干頬を赤く染めていた。

マジックゲート敷地内図書館

シルフィードは呪いについて調べていた。呪い、つまり呪術は魔法の一種だ。相手を頭の中にイメージして術をかける。

すぐに効果があるものもあればジワジワと効果が現れるものがある。術はしばらくすれば解けるものがほとんどだ。しかし、術者の能力が高ければ解けるまでに時間がかかる。能力が高い者の呪術のなかには自然には解けないことがある。

「……基本的には呪いの解き方は同じ。よく使われている解き方なら店に売っている本にも載っている。しかし、ミレイナにかかっている呪いには効果がない。やはり、『世界書庫』に行くしかないか」

シルフィードは読んでいた本を閉じ棚に戻す。

「おい、シル」

「ん、フィルか。どうした？」

「キースから招集がかかった」

なんだろう？　と思いながらシルフィードは自分の部屋に戻る。

「……なんで俺の部屋なんだ」

「気にすんな。それよりも次のランク分け試験のことだ」

シルフィードとフィルが部屋に来たときには、すでにキース、リサーバ、リーチ、テスラがいた。

「ランク分け試験がどうした？」

「ブルムにランクが俺より高かったらつき合ってくれと言われた。

だから本気をだす。……お前らも本気でやれ」

「えっと……俺達関係ないか？」

テスラの意見にキースとシルフィード以外の3人は頷く。

「そもそも俺はSランクだからな」

「……お前ら、俺達は平均か、少し高いかだ。だから周りから文句も言われるし注意される。だが、もし俺達がもつと高いランクだったら……。誰にも文句を言われず、自由じゃないか！」

「……俺達すでに自由だろ」

「お前らは、そんなんでも良いのかよ！」

「ランク高いと注目浴びるだろ、シルみたいに」

確かに、とシルフィードを含む4人が頷く。キースはまだ納得いかないようだ。

「そもそも、なんでつき合いたくねえんだよ」

「は、誰がプルムみたいなバカと……」

「そうかい……。試験で本気を出してコッチにメリットは？」

「俺が街であつた美少女達を紹介するぜ」

キースの言葉にリーチとフィル、テスラの表情が変わる。

「本当か？　嘘偽りはないんだな？」

「ああ、俺が街でモテるって噂あるんだろ？　あれ、本当だからな」

「」「よっしゃあ、のったああっ！」「」

どうやら3人はやる気になったようだ。他の2人はため息をつき、キースはニヤニヤしている。

「で、バカリサーバはどうすんだあ？」

「……俺にはセレーナがいるからな」

苛立った様子でリサーバはキースを見る。キースはニヤリとしてこう告げた。

「ランクが上がったらもつと好きになるんじゃないか？」

「……！」

苛立った様子のリサーバだったが目を見開いてキースをみる。

「……そうだな、そうだよなあ！　よし、セレーナのためにも高ランク目指して頑張るぜえ！」

単純だな、とシルフィードは友達のことを情けなく思いながらため息をつく。

「どうした？」

「いや、何だか悲しくなってきた」

「？ まあ、いい。お前らあ、ランク分け試験頑張るぞ！」

「「「「「おおっ！」」「」「」

「……はあ」

第26話（前書き）

＊注意事項＊

駄文につき期待しないこと。

第26話

ランク分け試験当日。筆記試験を終えてシルフィード達は食堂にいた。実技試験は午後からある。

「お前ら筆記試験はどうだったあ？」

「楽勝！ キース、約束絶対守れよ！」

「了解だ！」

「午後も頑張るぞ！」

「……オオオツ！」

「……元気だな」

シルフィードは深くため息をついた。ふと周りを見ると他の生徒がチラチラと見ていた。目が合うと慌てて視線をそらされたシルフィードは苦笑いする。ふと、アイリを見つけたシルフィードは食べている料理を持ってアイリ達が座っていれ席に向かった。

「アイリ、ここ良いかな？」

「あ、シル君。良いよ」

アイリはセレーナ、プルムと一緒に昼食を食べていた。

「何だか騒がしいね」

「ああ、何だかランク分け試験で本気だすってうるさいんだ」

「え……本気？」

ブルムは首を傾げてシルフィードにたずねる。

「ああ、あいつら……っていつか前の俺もだけど本気とかだす気が
まったくなかったんだよ」

「……つまり手抜きでDランクなのか？」

「そうなる」

ブルムはショックを受けたような顔をしてうなだれる。

「勝ち目ないじゃん」

「あ、勝負挑んだんだっけ？」

「……ユナイゼル君って本気でしたらどれくらい？」

「さあ？ まあSランクは超える」

「……ランクってSまでしかないんだけど」

アイリは呆然とキースがいる方を見る。

「ならリサーバも結構高いの？」

「少なくともAだな」

「さすが私のリサーバ！」

セレーナは顔を赤くしてリサーバの方を見る。プルムはなにやらブツブツ呟いている。

「自分から話しかけるなってあんまりだと思わないかシルフィード！」

「お、俺に言われても……」

「キースと友達だろ。お願いだよ！ 俺、嫌だよ。話しかけられた時ってことは返事するだけのことだよなあ……なあ、どうすれば良いんだよお」

プルムは涙目になりながらシルフィードを見る。アイリとセレーナは心配そうにプルムを見ている。

「だ、だから俺に言われても……」

「……わかった。直接頼む」

そう言ってプルムは立ち上がり、キースのもとに向かう。

「な、なあキース」

「ご主人様だろうが、屑が」

「す、すみませんご主人様……。あ、あのやっぱり話しかけるなっ

てのはあんまりでは……」

「お前はご主人様に口答えするのか？」

「い、いえ。申し訳ありません！」

プルムはゆつくりと席に戻る。

「無理だった……」

「だろうな」

「お、俺……実技サボるから」

「「え！」」

プルムは足早に食堂を出て行った。

「……サボりはGランクだったな。負け決定だな」

「プルムを追いかけないと！」

アイリは立ち上がるがセレーナに腕をつかまれる。

「もうすぐ始まる。それに勝負を言い出したのはプルム……悪いけど自分で言い出して逃げる人を助ける気にはなれないよ」

「ち、ちよつと！ 友達じゃ……」

「だからだよ。私はありのままのプルムを受け入れる。臆病なプル

ムでもね。プルムが好きなようにさせるべきだよ」

アイリは納得出来ないようだが、しぶしぶ頷く。

「……さて、俺もそろそろ行くか。実技も頑張れよ」

「うん、ありがとうシル君」

女子寮

プルムは自分の部屋に閉じこもっていた。

「……はあ、俺バカだよな。無謀な勝負挑んで勝てないとわかったら尻尾まいて逃げて……試験サボったからGランクか」

それも良いかな。俺は落ちこぼれだからな、とプルムは自分を嘲笑した。キースからは屑だと言われ続けていた。

実際そうだよな、とプルムは思う。それに奴隷になってまでキースを知りたいと思ったこともある。

どんな形でもキースと一緒に入れることに喜びを感じていた。

「……俺ってバカだよな」

勝負を挑まなかったら良かった……。

キースと一緒にいれても此方から話しかけられない……キースに

話しかけられなければずっと話せない。

どうせ負けるんだから実技を受ければ良かった……でも、受けてもまともに魔法は使えないだろう。

……コンコンッ。

「……誰？」

「……俺だ」

「き、キース！」

ブルムは慌てて部屋の扉を開けるとキースが立っていた。

「な、何で？」

「お前の友達のバカ2人にな……一発ずつ殴られたんだよ」

キースは頬を手で押さえながらブルムを睨みつける。

「ご、ごめん」

「……ふん。俺は言い過ぎたともやり過ぎたとも思っていない。……だがな、お前が実技をサボろうとしているのは俺のせいなんだろう？ だから、謝りに来てやった」

「……謝りに来たって態度じゃないな」

「うるさい、屑のくせに」

「謝る気あんのかよ？」

ブルムはニコツとしてキースを見た。キースは思わず顔を逸らした。

……コイツ、こんなに可愛かったんだな。

キースが顔を赤くしていると、ブルムは不思議そうに見ていた。

「まあ、なんだ……その……いろいろ悪かったな。奴隷のこととか」

「ほ、本当にキースが謝った……」

「お前、俺のことを何だと……」

「……それより、実技試験もう始まってるんじゃないか？」

「ランクなんかどうでもいいんだ。三学期の試験で本気だす」

「でもGランクになるんだぜ？」

「シルなんか一学期の試験まで何年間もGランクだったじゃないか。それにくらべればちよつとの時間、息抜き程度だな」

「そっか……ん？　なら勝負はどうなるんだ？」

「引き分けだな……いや、俺の負けでいい」

「へっ……それじゃ」

「ふん、つき合ってやっても良いぜ」

「あ、ありがとう！ キース！」

ブルムはキースに抱きつく。いきなりのことじびっくりし、さらにキースの顔は赤くなる。

そして、次の日

「キース、約束はどうした！」

「約束？ 何のことだか……」

「お前サボリやがってGランクじゃないか！ 拳げ句の果てに彼女まで作りやがって」

「この裏切り者め！」

「はは、言いただけ言いたまえ、Sランク共め」

キースはリーチ、フィル、テスラに詰め寄られていたが平然としていた。

「……ありえねえよな」

「だな」

少し離れたところにいるシルフィードとリサーバは張り出された結果を見ながら話していた。

『中等部一年フィル・フォモール

” テスラ・ヴァインス

” リーチ・ランダイン

” リサーバ・ランダイン

以上の者をSランクとする。』

ちなみに、アイリは変わらずCランク。セレーナは1つ上がってDランクになっていた。シルフィードはもちろんSランクだ。

キースとプルムは無論Gランクだ。

「……なあ冬休みって少ないのに王宮に行かないといけないのか」

「……そうだな」

冬休み、セレーナと過ごす時間が少なくなることによりサーバは残念そうにため息をついた。

第27話（前書き）

＊注意事項＊

駄文。期末試験期間中にもかかわらず投稿という暴挙により期待は禁物。

第27話

季節は冬……。冬休みに入ったある日のこと。その日は朝から雪が降っていた。雪はクロリアの街を白く染めていく。

「……ったく、寒いじゃねえか」

魔法学院マジックゲート中等部一年のキース・ユナイゼルは白い息を吐きながら街を歩いていた。その後ろからはプルム・メルビィーユがついてきていた。

「ま、待つてよ！」

「早く歩けよクスが……お前はグズなのか！」

「そ、そんなこと言っ たつて……」

「……ほら」

キースはプルムに手を差し伸べる。

「え……」

「お前がはぐれたら困るしな……今の時期は人も多いし」

冬になると街は賑やかになる年末には一週間に渡って忘年会ならぬ忘年祭が国中……世界中で行われる。また、年が変われば一週間新年祭がある。

冬には2週間も祭が続くのだ。祭の時期と冬休みは重なり街も様々な催しをする店が増える。

「……うん」

プルムは顔を染めて手を握る。キースはプルム以上に顔を赤くしていた。

「なあ、どこに行く？」

「どこでも良い。だけど、Gランクだからどこでも高いんだよな」

「……あそこにいるシル君に奢ってもらおう」

キースはニヤリとして指差す。プルムがキースの指差した方を見るとシルフィードとアイリがいた。

「で、でも……」

「さあ、行くぞ」

「……あ」

キースは強引にプルムを引っ張ってシルフィードのもとに向かう。

「やあ、シル君」

「キースとプルムか。……お前らもデートか？」

「ああ。というわけでなんか奢れ」

「……どういうわけだかわからないけど。まあ、良いだろう。4人でどこかレストランでも行こうか」

「お、さすがSランク、太っ腹だ」

「……ごめんアイリ」

「え？ 別に良いよ。大勢は大勢での楽しみがあるからね」

「……そう」

ブルムは意外そうにアイリを見たあとキースをみてこう思う。
私だったら2人つきりが良いのにな……。

マジックゲート男子寮

リサーバの部屋ではリサーバとセレーナがのんびりしていた。
「ねえ、リサーバ。私、街に行きたいな」

「街か……そうだな。面倒だから却下だ」

「な、何で！」

「今の時期街にはたくさんの人がいる。たしか明日から祭だろう？それに、俺はお前と2人つきりが良いんだ」

「り、リサーバ……」

「2人つきりが良いなら別のところに行ってくれ！」

リサーバとセレーナがなにやら良い雰囲気になりかけていると部屋のもう1人の住人リーチ・ランダインが叫ぶ。

「おい兄さん、今良いところだったのに……」

「そうよ。空気読めないの？」

呆れたように2人はリーチをみる。

「……俺にどこかに行けと？」

「おお、さすが兄さんだ。弟が考えていることがわかるなんて」

「……っち、夜になったら戻ってくるからな！」

そう言つてリーチは部屋を出て行った。

「……兄さんにも良い相手みつかるの良いのにな」

「リーチに好意を寄せている人はいるんだけどね……」

2人は部屋の扉をじっと見つめていた。

マジックゲート男子寮前

リーチはゆっくり寮から出てくる。

「……はあ。何で周りの奴らには彼女が出来るんだろうな。あとは俺とフィルとテスラか」

リーチは、やっぱり人間顔なのか、とため息をつく。しかし、本人は気づいてないようだがリーチを含めシルフィード等6人組はかなりルックスが良い。

そんなリーチを物陰からコソコソと見ている女子達が出た。

レーヌ・ブラウニー、フラム・ブラウニー、ラルム・ブラウニー。中等部1年の三つ子だ。長女はレーヌ、次女はフラム、三女がラルムだ。

「ね、姉さん。リーチ様だよ」

「落ち着きなさいラルム。……ランダイন兄弟の兄であるリーチ様。ボサボサした髪にメガネという地味な外見。……しかし、私は知っている、リーチ様が格好良く素敵な方だと言ったことを！」

「アネキ、あんまりうるさいと気づかれるぜ」

フラムの言葉にレーヌはハツとする。

「危なかったわね……。リーチ様はSランクになったことで人気が急上昇中。この前なんか女共がキャーキャーリーチ様によってきて……。私達は初等部の頃からリーチ様が好きなのに！」

「アネキ、落ち着けよ」

「あ……。私ったらまた」

「……何かようですか？」

「……り、リーチ様！」「」

リーチがなんだかうるさいな、と思って振り返ると髪型は違うが顔の似ている3人が騒いでいた。たまに自分の名前が呼ばれているのでリーチは気になって話しかけた。

リーチに話しかけられた3人は顔を真っ赤にして口をパクパクさせていた。しばらく沈黙が続きリーチが気まずそうに頭をかくと、レーヌが口を開いた。

「あ、あ、あの、私達、リーチ様のファンなんです！」

「ふ、ファン？」

「はい！ あ、あの……握手してください」

「あ、ああ」

リーチがおずおずと手を差し出すとレーヌは物凄い勢いでリーチの手を両手で握る。

「ああ幸せです。リーチ様とお話してこういう風に握手してもらえるなんて……」

普段のフラムとラルムならば「私も！」とか言つのだが、今の2人は緊張してそれどころではない。

「……えっと」

一向に手を放す様子を見せないレーヌを戸惑ったようにみるリーチ。ふとレーヌと目が合いリーチは慌てて目を逸らす。それを見てレーヌはニヤリとする。

「リーチ様、もしかして女子と手を繋いだりすることってないんですか？」

「ま、まあな」

「そう、ですか」

レーヌはニヤニヤしながらリーチによりかかる。リーチはいきなりこのことで若干赤かった顔がさらに赤く染まる。

「な、なんだ？」

「……私、リーチ様が好きです」

「は、はあ？」

レーヌはリーチに抱きつく。

「付き合ってください」

「「ぬ、抜け駆け！」」

レーヌがリーチに告白したことにフラムとラルムは驚く。リーチは目を見開いてレーヌを見ている。

「ダメですか？ リーチ様」

「い、いきなり言われても。俺、君のこと良く知らないし」

「付き合つことで私のすべてをさらけだすので私のすべてを知ってください」

「アネキ、大胆！」

「ね、姉さん本当に中等部1年なの？」

「え、えっと。俺まだ恋愛とか興味ないし、恋人とか高等部からでも……」

「なら予約です」

「予約？」

「はい、高等部になった時、付き合つてくれると約束してください」

「だ、けどまだ中等部1年だから高等部になるころには他に好きな人が……」

「私は初等部の頃からずっとあなたが好きです」

「き、気持ちは嬉しいけど……」

「なら、付き合ってください」

……きゅっ。

レーヌはリーチを強く抱きしめる。リーチはなんとかして抜け出せないか考えるが、相手は女子。力を入れて怪我させてしまうといけない。ふとリーチは考えが浮かぶが、それは駄目だと躊躇う。しかし、その方法しかないかもしれないと思ったリーチは実行する。

「あ、あの」

「はい？ ……！ え？」

顔を上げたレーヌの唇に自分ね唇を重ねる。レーヌが驚いたように目を見開き、腕の力が弱まった瞬間、リーチは抜け出した。

「ご、ごめん。とにかく、今は恋人とか考えてないから！」

リーチは逃げるようにその場を走り去った。

「……わ、私、リーチ様にキスされた」

レーヌは自分の唇に触れながら呆然としていた。フラムとラルムはうらやましそうにレーヌを見ている。

「アネキばかりズルイ」

フラムの言葉にラルムは頷くが、レーヌは心ここにあらず、という感じでまったく聞いてなかった。

第28話（前書き）

* 注意事項 *

駄文、閲覧注意。

第28話

港町コーラル……海軍本部

グレイ達魔術騎士団とバルは海軍本部の応接室に居た。海軍のトップは元帥、次に大将、中将、少将、大佐、中佐、少佐、大尉、中尉、少尉、候補生、曹長、軍曹、伍長、兵長、一等兵、二等兵、三等兵と続いていく。

グレイ達5人は海軍のトップではなく、階級的には5番目の大佐と呼ばれている人物達と会うことになった。

ちなみに元帥はもちろん1人で、大将も1人、中将は2人、少将は3人いる。大将、中将、少将をまとめて海軍6将と呼ぶ人が多い。

大佐、中佐、少佐は各6人となっていてそれより下は人数は定められていない。なお、各階級の定数は国によって違う。

「私達は魔術騎士団の隊長陣なのよ。言わば国のトップレベル。それなのに相手は大佐？ なめられてるのかしらね私達」

ノエルは納得がいかないようだ。それを見てギルティーは鼻で笑う。

「俺達と共に孤島に向かうのが大佐さん達ってことだろ。俺達は打ち合わせをしてすぐに出発するんだからな」

「……すぐに出発するって本当？」

「……王宮を発つときに言われたが、覚えてな……聞いてなかった

な」

グレイは呆れたようにノエルを見る。ノエルは恥ずかしそうに顔を染めてうつむく。

「は、さすがエトワール嬢。温室育ちのお嬢様は一味違うね」

「あらクルーエル、所詮あなたも温室育ちでしょ？」

「まったく。温室にはほど遠い過酷な環境だったぜ」

「へえ、その環境詳しく教えてくれない」

「お、聞いてくれるか？　なら教えてやる」

ギルティーが話そうとすると部屋に4人の大佐であろう者達が入ってきた。

「はじめまして。少将以上は会議とかで行けないから今回大佐が4人だけとなってしまいました。もちろん船にはサポートする兵士達も乗りますので……」

「わかりました。よろしくお願いします」

大佐の1人とバルが握手をする。その後、軽い打ち合わせをしたあとすぐに船に乗り込む。船に乗り込んだノエルは海を見ながらため息をつく。

「船……。孤島に行くのでなければ楽しいのに」

「……エトワール嬢は船には何度も？」

「まあね。船上パーティーも何度も……レクティード、顔色悪いよ？」

「船、苦手なんだ」

リユージは顔を青くして口を手で覆っている。ノエルは苦笑いしながらリユージの背中をさすっている。

「……さて、エトワール嬢。到着まで時間がかかるから俺が育った環境についてじっくり話そう」

「そうね。聞いてあげる」

「俺は捨て子なんだ」

「……え？」

「首都クロリアの北にある樹海に捨てられてたらしい。それでルキフグスさんに拾われて王宮で育ててもらった。まあ、温室育ちではあるかもな」

「……ごめん」

「何に対して謝ってるんだ？」

「捨て子ってこと知らなくて……」

「まあ、気にしてないからな」

「……そう」

「あー、何だかすぐに終わっちまったな。船の中ウロウロしてくる」

そう言ってギルティーは船の中へと入っていった。

「……人にはそれぞれ悩みがある。あまり触れないことだ」

「そうだね。……えっと、本当に大丈夫？」

見るからに悪化しているリ्यूジを見てノエルは心配する。

「……部屋で休んでくる」

リ्यूジはフラフラと歩きながら船の中へと向かう。ノエルは姿が見えなくなるまでリ्यूジの後ろ姿をみていた。

バルは立ち入り禁止と貼り紙が扉に貼られている部屋にいた。バルの前にガル・ファトウスが居る。

「よお、ガル。調子はどうだ？」

「まあまあだね」

「正体はバレてないよな」

「ええ。正体を知った奴はコチラに引き込みましたから」

「そっいえば今日は忘年祭最終日だな」

「……新年早々生き物の血を見ることになりますね」

「だな」

薄暗い部屋には薄気味悪い笑い声が響いていた。

首都クロリア

街は人で溢れ、賑わっていた。そんな街中を走る影があった。リーチだ。リーチは何度も人にぶつかりそうになりながらもしきりに後ろを振り返っていた。

「く、いくら何でもしつこすぎるぞ」

「待ってくださいリーチ様！」

リーチを追いかけるのは数日前キスされたレーヌだ。あれからリーチの部屋に毎日押し掛けては逃げるリーチを追いかけている。

「ここまで来たら変態だぞ！」

「それでも構いません、リーチ様と話せるならば！」

「俺が嫌なんだよ！」

ちなみにレーヌの妹達は姉の異常なまでの執着心に若干引きながらも一応応援している。

「何で、何で私の気持ち受けとってくれないんですか！」

「だから俺は、中等部のうちに付き合う気はないんだ！」

「で、でも……きゃっ」

何だろうとリーチが振り返るとレーヌがつまづき転んでいた。リーチはレーヌに近寄り「大丈夫か？」と話しかける。

その瞬間、レーヌがリーチに抱きついた。リーチはしまった、という顔をしたが時すでに遅し。レーヌの腕はしっかりとリーチを捕らえていた。

「やっと捕まえました、リーチ様」

レーヌは恍惚の表情でリーチの背中に頬をこすりつける。

「お、おい。街中で止める」

「ああ、リーチ様の匂い」

レーヌはリーチの匂いを嗅ぐ。

「や、止めるって！」

「……なら付き合ってください」

「はぁ？ 何でそうなるんだよ」

「私、リーチ様が好きなんです」

「……それは何度目聞いたよ」

そう言つてリーチはふと思う。

……こんなに好かれてるって幸せなことなのかな？

「……なあレーヌ」

「な、何？」

リーチはゆっくりと後ろを向きレーヌを見つめる。レーヌは怒られるのではと恐る恐る見ている。

「俺なんかで良いのか？」

「え？」

「俺が彼氏で本当に良いのか？」

「……はい」

「……そうか」

「……えっと、どうかしまし……！」

リーチがレーヌの唇に自分の唇を重ね合わせる。レーヌは目を見開いて呆然としている。レーヌの腕の力が弱まる。

レーヌはハツとしてリーチを逃がさないようにしようとするが、リーチに逃げる気がないことに気づく。不思議に思っていると、今度はリーチがレーヌを力強く、なおかつ優しく抱きしめる。

……しばらくしてようやくリーチは唇を離す。

忘れてはいけなのはここは街中で、多くはないが少ない通行量だということ。幸いにも周りを通る人々は2人を見ないようにして歩いていること。

レーヌは顔を真っ赤にしている。さすがに恥ずかしいのかリーチから離れようとするがリーチが抱きしめたまま離さない。

「り、リーチ様……離してくれませんか？ あ、誤解しないでください。嫌ではなくて恥ずかしいからです」

「……言うことを全く聞かなかった奴の言うことを聞くほど俺は優しくないぞ」

リーチはさらにギュッと抱きしめる。

「あ、あの……」

「俺なんかで良ければ付き合ってくれ」

「！こ、こちらこそお願いします」

「ああ、よろしくな」

そして、再び唇と唇が重なり合った……。

第29話（前書き）

＊注意事項＊

駄文、短め、注意です。

第29話

クロリア王国は新年を迎え、いたるところで祝いが行われている。王宮では国内から様々な者が招かれている。各街の魔術協会支部会長、町村長、海軍の少将以上、大企業・財閥の当主や社長、それらの家族などなどだ。

ルベライト・セイファートはグラスに注がれたジュースを空に瞬く星を見ながら飲んでいた。招かれている人物の家族にルベライトと同年代は結構居るが、ルベライトは王子だ。王子という立場が話しかけづらくしている。

「ルベライト様」

「ん、ロフォカルさん」

ルキフグス・ロフォカルは1人寂しそうにジュースを飲んでいるルベライトを見つけ話しかける。

「元気ありませんね」

「まあ……な。冬休みはSランク昇格者は来ないんだな」

「まあ、休みが少ないですから。それに今回の昇格者はマジックゲートから4人だけですから各自王宮に来てもらい国王様に会ってもらいます」

「そうか。……マジックゲートといえばシルの学校だったか」

「シルフィード・マグナスですね。そういえば夏期休業中に友達になられて……」

「ああ。……最近会えてないな」

たまにだが、休日にシルフィードが王宮に顔を出し、ルベライトと話している。今ではルベライトの一番の楽しみとなっている。

「ルベライト様はもう少し積極的になるべきです。今まで同年代の方にお会いしてもまったく話そうとしませんでしたから」

「ふん、何でパーティーに招かれている奴らが子供を連れてくるかわかるか？ 俺と仲良くなつて贔屓されようとしているんだ。所詮、親が子供を利用しているだけ」

「ふむ。否定はしませんかね」

「……そういえば魔術騎士団に特別講師が来ると聞いたんだが、俺も稽古つけてもらえるか？」

「お望みならば、伝えておきます」

「ありがとう、恩に着る」

ルベライトは空のグラスを使用済み食器置き場に置きに行く。こつそりと部屋に戻ろうとパーティー会場（大広間）を出ようとするふと、壁にもたれ1人飲み物を飲んでいる少女を見つけた。ルベライトはその少女に近づき声をかける。

「同年代の輪の中に入らないのか？」

「……別に群れる気もないし、私は無理やりつれてこられたただだから」

少女はルベライトを見ずに答える。誰とも話す気はない、というような雰囲気を出していた。

「へえ、そっか」

ルベライトは少女の隣で壁にもたれる。少女はため息をついてグラスに残ったジュースを飲み干す。

「あのさ、私1人でいる方が気楽なんだけど」

「確かにそうかもしれないが、1人でいると楽しくないぞ?」

「わからないかな? 私に構わないで欲しいん……だ?」

少女はイラついた様子でルベライトを見る。見た瞬間、少女の目が見開かれる。

「ん、どうかした?」

「え、えっ……ルベライト様?」

「そうだけ様はつけないで欲しいな」

「さ、先ほどは失礼なことを言ってしまい申し訳ございませんでした!」

「ああ、大丈夫だよ。気にしてない」

「あ、ありがとうございます」

「君、名前は？」

「は、はい。ネージュ・ニューアージュです」

「……ニューアージュというとクロリア最大の財閥、ニューアージュグループか」

「そうです」

ニューアージュグループは魔法を使ってつくられた道具である魔法具や宝石、薬品、造船など他にも様々な分野で活躍している。

その中では魔術とは違う技術、科学を使っているモノがある。だが、電気や電波や大きな音をだすモノは魔獣を引き寄せる可能性があるためそこまで発達はしていない。

「あ、ルベライト様は何で私に声をおかけに？」

「敬語なんて使うな。……部屋に戻ろうとしたらネージュをみかけてな」

「そうですか」

「……敬語禁止」

「わ、わかりま……わかった」

「よし。そういえばなんで群れるのが嫌いなんだ？」

「……私さ、ニューアージュグループをいずれ継ぐんだ。だから私の機嫌を取ろうとみんな近づいてくる。まだ中等部だよ……クラスでも休み時間になると他のクラスからも私に会いに来る。1人の方が落ち着くんだ」

「ああ、何だかその気持ちわかるな。大人がまだ子供である俺に頭下げたりご機嫌取ろうとしたり……。なあ、友達にならないか？」

「えっ？ 私と……ルベライトが友達に？」

「ああ。友達なら気を使う必要もないだろ？俺は王子である前に1人の子供だ。おかしいことはまったくない」

にこやかに話すルベライトをネージュは驚いたようにみている。ネージュには友達はある。だが、どちらかと言うとご機嫌を取ってばかりでまったく友達っぽくはない、とネージュは思っていた。

「私なんかルベライトの友達なんて……」

「俺には友達と呼べる者はいなかった。だが、夏期休業中に来たSランク達と友達になった。立場とか関係ない。気楽に話せて笑い合える。そんな友達になりたいんだ。……嫌なら仕方ないが」

「い、嫌なんてとんでもない！……私で良ければ友達になろう、ルベライト」

ネージュはルベライトに手を差し伸べる。ルベライトは笑顔でそ

の手を握る。

「よろしくな」

「ええ、こちらこそ」

ルベライトとネージユが握手している様子を遠くからジッと見て
いる者がいた。

「あれが王子か。それにしても俺に稽古をつけて欲しいって変わっ
てる」

「まあまあ、我々も期待してますよ。明日からアナタ流の稽古で騎
士団を強くな。……我が軍が攻め込んだ時、少しでも張り合いがな
いとつまらないですから」

「了解、ルキフグス殿。我等が栄光のために……」

第30話（前書き）

＊注意事項＊

グダグダ、駄文注意。

第30話

船がコーラルの港を出航して数日。目的地である島が見えてくる。リ्यूジは口を押さえながら島を見つめる。

「えっと……本当に大丈夫？」

「……あと、少しで着くんだ。……そのくらい大丈夫だ」

リ्यूジはそう言うが、顔を真っ青にして言う様子は誰がみても大丈夫だとは思わない。やせ我慢しているのは一目瞭然なのだが、本人が大丈夫だと言うので周りはどうしようもない。

「……まだ離れているが空気中の魔力濃度が高まっているな。この距離でこれほどなら島の魔力濃度は凄まじいだろうな」

「そうだな……。なあグレファス……あれ、海賊船だよな」

ギルティーは双眼鏡をグレイに渡す。グレイはギルティーが指差す方向を双眼鏡を覗きながら見る。

「……みたいだな。調査のついでに海賊退治をしないといけないみたいだ」

その頃バルは船内の一室で4人の大佐と話していた。

「わ、我々に、仲間を裏切れと言ってるのか？」

「ん、簡単言つとそうかな。君ら大佐4人はガルー以外の搭乗海軍兵士と魔術騎士団隊長陣を魔獣どもと戦っている隙に始末する。……いや、隊長陣の1人ギルティー・クルーエルは俺が殺る」

「……本気ですか？」

「ああ、この船に乗っている大佐……君達是我々の理想実現に必要なだからな。君達以外の搭乗者は邪魔だ。……此方側に来て欲しい奴もいるがな」

「……理想実現」

「ああ。我々の……な。さて、そろそろ行くぞ、ネビロス、アイペロス、ナベルス、グラシヤラボラス」

「」「」「承知」「」

「……僕は様子見と行きますかね」

船に搭乗している全員が降りる準備を終え、ついに島に到着する。真っ先に陸に足をつけたのはリユージだ。

「はっはっは！ これは凄い。魔力が満ち溢れている。今日の俺は絶好調だ！」

「陸に上がった途端に元気になったわね」

「それがレクティードアビリティーだ！」

「……意味わかんない」

陸に上がった瞬間テンションが上がったリュージに若干呆れながらノエルも島に上陸する。グレイとギルティーは大佐4人とともに船から降りる。その後からはバアル、ガル、海軍兵士が続く。

その様子を草むらから見ている者達がいた。

「……なんで海軍がこの島に来てるッスか？」

「俺っちが知るわけないっしょ。……早くディザに報告しなきゃいけないっしょ」

「……いや、今の俺達は海軍よりも強い筈っす」

「……海賊下っ端の実力を見せましょっか！」

次の瞬間、草むらから海賊2人が飛び出す。その先にいたのはノエルだった。

「！ か、海賊？」

「海軍死ねっス！」

海賊の1人が刃物に電気をまとわせノエルに切りかかる。ノエルは魔力を手に集中させ円盤状の防壁バリアを作り出す。

「そんなバリアで防げるとは思わないことッス！」

……ピシッ、ピシピシ。

「ば、バリアにヒビが！」

「イタダキツス！」

ガシャーン！

バリアが粉々に砕け、呆然としているノエルに向けて海賊が刃物を突き刺す。だが、ガルーが間に入り込み刀で防ぐ。

「……海賊、コイツは魔術騎士団だ。僕が海軍。相手を間違えるな」

「な、防がれたツス！」

「俺が居ることを忘れるなっしょ！ ……ぐへえ！」

もう1人の海賊がガルーに攻撃しようとするが、リユージに防がれる。

……海賊下っ端2人は縄で腕を縛られ、他の海賊のところへ案内する役割をもらった。

「……本当に良いんスカ？ わざわざ殺られに行くなんて正気の沙汰じゃないツスよ」

「うるさいな。サツサと歩いて案内しなさいよ！」

「……バリアを破られた瞬間怯えていた奴がなに言ってるんスカ」

「お、怯えてなんかいない！」

「……図星かあ？」

「く、クルーエル！」

しばらく騒ぎつつ歩き、周りが木に囲まれた道に來ると先頭を歩いていた海賊下っ端2人が急に足を止める。後ろに続くグレイ達と海軍兵士達は不思議に思いながらも足を止める。

「おい、何で止まって……！」

グレイが海賊下っ端の顔を見た瞬間、言葉を止める。海賊下っ端2人は笑みを浮かべていた。

「海軍も馬鹿ツスよね、警戒することなくついてくるなんて」

「間抜けにも程があるっしょ！」

その言葉に合わせるように木の陰から海賊達がぞろぞろと出てくる。グレイ達は海賊に囲まれた。

「ははは！ こんな島に何のようです、海軍および魔術騎士団……
もとい魔術協会の犬共オ！」

「こ、子供？」

道の奥から海賊を数人引き連れディザとウィンディーネが現れる。海賊達と一緒に子供がいることにグレイ達は驚く。ふとグレイはウィンディーネを見て、気づく。

「な、何故行方不明の学生が此処に！」

「……そういえば私、学生でしたね。忘れてました」

「そういうことはどうでも良いんだ。……魔術騎士団相手にどれだけやれるか、試すか……。行くぞ、野郎共オ！」

ディザの掛け声で海賊達が武器を手に襲いかかる。中には魔法を使っている者達もいる。

「く、賊共が……」

「ふん、魔術騎士団の力なめんなよ！」

リユージは刀を手に海賊達を斬っていく。ギルティーは魔力を集中させ魔力弾を作り海賊達に撃ち込んでいく。

「やるしかないようね。所詮賊、数で押そうなんて浅はかな考えだね！」

「く、学生であろうと海賊の仲間なら手加減はしない！」

ノエルは空気を刃状に固め、海賊に向けて飛ばしていく。グレイは剣に炎をまとわせかかってくる海賊達を迎え撃つ。

「……予想外の好機ですね」

「ああ。しばらく様子を見よう」

バルとガルは海軍大佐4人と共に少し離れて様子を見ている。もし、海賊達が勝てば海賊討伐をすることになり、グレイ達や海軍

が勝ちそうならば海賊もろとも殲滅する。どちらにしろバル達以外生き残りがいないようにする。

普通ならば魔術騎士団や海軍は訓練など怠っていないければ海賊を簡単に討伐出来るほどの実力を持っている。

だが、この海賊達は頭によって訓練を強いられ、この魔力満ち溢れた島にいることでかなりの力、Sランク以上の実力をつけている。

最初はグレイ達や海軍が優勢だったが、時間が経つにつれて海賊達が優勢になっていく。すでに多くの海軍兵士が殺された。海賊達はほとんどが生きて、その中には無傷の者達もいる。

グレイ達魔術騎士団隊長陣にも焦りの表情が浮かんでいた。

「な、何で海賊がこんなに強いのだよ！」

「お前らと訓練のやり方が違うツス！ こっちは命がけなんスよ！」

「ぐっ！」

下っ端がノエルの腹を蹴る。ノエルは蹴り飛ばされ木に叩きつけられる。さらに下っ端はノエルに向けて魔力弾を放つ。

「エトワール！」

それを見たグレイはノエルを助けに向かおうとするが、周りの海賊達に阻止される。

「く、邪魔だ！」

グレイは剣を振るうが呆気なく防がれ、剣を弾き飛ばされる。

「ちいっ！」

ゴオオオッ！

グレイは海賊目掛け炎を放つ。海賊達が怯んだ瞬間、海賊の包囲から抜け出しノエルに駆け寄る。

「……気絶してるな」

ノエルは動いていなかったが、息をしていることに気づきグレイはホッとする。だが、このままだといつ海賊にやられるか分からない。運ばうにも海賊にやられる可能性が高くなる。

「お困りのようだなあ」

「クルーエル！」

木の上からギルティーが飛び降りてきた。ギルティーの姿を見てグレイはギョツとする。ギルティーの顔や服には返り血がビッシリと付いていた。

「ん、海賊どもを背後から斬りまくっていたら血がベツタリだ」

「……さすがギルティー・クルーエル、優秀ですね」「……ゼブルさん！」

ギルティーに声をかけてきたのはバルだった。その後ろには海

軍大佐4人がいる。

「君とゆつくり話をしたいのだが、周りが邪魔だな……殺れ」

「ハッ！」「」

シュッ……………ドゴオオオツ！

ゼブルが合図をすると海軍大佐4人が海賊達に向かって魔法を放つ。その魔法は光線のようなものや、視覚では捉えられないもの、様々な魔法が海賊達を襲う。

魔法は地面に当たり砂煙を起こす。砂煙が収まった時にはほとんどの海賊と魔法に巻き込まれた海軍兵士達がボロボロになって倒れていた。息をしているかどうかすらも分からない。

「な、味方まで巻き込んで……」

「味方？ ああ、海軍兵士達のことか。ただの駒にしかすぎない。味方は海軍大佐4人と海軍兵士1人だ……そのことで相談なのだがギルティーよ、我々についてこないか？」

「……え？」

「私は君が小さい頃から知っている。君は優秀だ。我々の力になってもらいたい。ルキフグスもそれを望んでいるぞ」

「ロフォカルさんが……」

「それに君が我々の仲間になるなら魔術騎士団には手を出さない」

「！……わかった。仲間になります」

「クルーエル！」

「良いんだ……。だがゼブルさん、これほどのことをしていて王宮に戻るのか？」

「いや、我々は別の場所に行く。グレイ・グレファス、君は海軍と魔術協会にこう報告するんだ。……途中で海賊に遭遇。船を破壊され気づいたら浜に打ち上げられた。……で良いだろ」

「船無しでどうやって？」

「なあに、魔法だよ。テレポート……そこに隠れているリユージ・K・レクティードを含め3人飛ばしてやる」

「……バレてたか」

木の陰から頭を掻きながらリユージが出てくる。グレイとギルティーはまったく気付かず驚く。

「……さて、転送しよう」

「ま、待て……」

グレイが何かを言い終わる前にバアルはテレポートを使う。ギルティーとバアルの前からグレイ達3人が消えた。

「……ギルティー、君は生き残っている海軍および海賊達を始末し

てくれ」

「了解しました！」

ギルティーは海軍や海賊を殲滅させるため、走り出した。ギルティーの姿が見えなくなつてバアルは草むらを見る。

「いい加減にそこから出てきたらどうだい？」

「……ツチ」

草むらから出てきたのはディザとウィンディーネだ。

「何で君のようなガキ共が居るんだい？」

「……魔術協会を潰すための修行だ！」

「……君はもしや裏の奴らを見たのかい？」

「……裏だと？」

「ああ、魔術協会の一部……主に上層部の奴らが集まってできた裏魔術協会。彼らは平気で犯罪を起こすんだ。まあ彼らは数年前に滅んだよ」

「滅んだ？」

「そう。君が恨みを持つ奴らもとつくに死んでるだろう……それにしても天人がいるとはね」

バルはウィンディーネを見つめる。ウィンディーネは自分のことを魔人だと思っていたので驚いたようにディザを見る。

「……そうだ、お前は天人だ。ルーと相性が悪くてな、刃向かわせないように嘘をついていた。もう、復讐は出来ないようだからバラすかな」

「ほう。私の言葉を信じるか……。まあ事実だからな。さて、少年、少女よ。我々についてこないか？」

「「え？」」

「もうこの島で生き残っているのは私達だけだ。それに少なからず復讐心は残っているのだろう？　なら、そんな魔術協会を……国を支配しないか？　我々になら出来る」

バルの言葉を黙って聴いていたディザは、バルを見つめゆっくりと口を開く。

「俺は……」

……クロリア王国に少しずつだが確実に危機が迫っていた。

第31話（前書き）

＊注意事項＊

駄文、短め。読んでくれる皆様に感謝です。

第31話

王宮に特別講師アスタロト・ヴァイヤーが来て数日。冬季休業も残りわずかと迫った日のこと。魔術騎士団訓練所でアスタロトはルベライトに稽古をつけていた。

「ふむ。悪くない、むしろ素晴らしい。ルベライト様は才能があります」

「そ、そうかな？」

ルベライトは恥ずかしそうに頭を掻く。

「……ですが、技の出し方が雑、実戦にはまったく向いてません。まず剣を振るときに安定していません。ぶれていると威力が格段に落ちます。力任せに振っているのは強くなれません。まずは基礎から始めましょう」

「あ、ああ」

「頑張ってください、ルベライト様。技術はダメダメですが才能はありますから」

「……わかった」

才能はあるが技術はない。ハッキリ言われたルベライトは落ち込みながらも再び訓練を始める。

マジックゲート敷地内図書館

キースとプルムは2階で読書をしていた。キースは黙々と読んでいるが、プルムはつまらなそうにパラパラとページをめくっている。

「なあ、キース。窓から外見て見ろよ。雪、積もってるぜ」

「そうだな」

「雪合戦って楽しいよな。他にも雪だるま作ったり、かまくら作ったり……」

「そうだな」

「……察しろよ！　こんな日に室内で読書なんてつまらない！　外に出て遊ぼうぜ！」

チラリとプルムをみたキースはため息をつき、こう言った。

「寒いし面倒だ」

バンツ！

プルムは机を叩き立ち上がる。その音が図書館に響き渡る。ちなみに2人以外に図書館職員しかない。

「寒いなら体を動かせば良いだろ！」

「疲れるだろ、面倒だ」

「彼女が遊ばうって誘ってるんだ！ 彼氏としてどうなんだそれは！」

「今もこうして2人つきりにいるだろ。それに外では学生達が馬鹿みたいに遊んでるんだ、それともお前は2人つきりは嫌なのか？」

「そ、それは……。もちろん2人つきりが良いよ。だけど……」

「……ツチ、わかったよ。その代わり今度何か奢れよ」

「え、良いの？ わかった、ありがとう」

はしゃぐブルムに苦笑いしながらキースは立ち上がり、2人は外に出る。

「……帰ろっか」

「ぶっ殺すぞテメエ！ 外に出て第一声がそれかよ、テメエが外に出たって言ったんだろっか！」

「だ、だってこんなに吹雪いてるなんて」

そう、今日は吹雪だ。数メートル先までは見えるがそこから先はよく見えない。さらには冷たい風と雪が絶えず体に叩きつけられる。

「絶対に帰らせないからな！ さあ、まず何する雪合戦か？」

「え、ええー」

ブルムは若干引きながらキースをみている。すると、どこからか笑い声が聞こえてきた。

「はっはっは！ これはこれはキース君ではないか」

2人は声がした方をみる。するとイドリアが腕を組んで笑いながら2人を見ていた。

「ああ、負け犬先輩ですか。お久しぶりです」

「だ・か・ら、負け犬じゃなくてマケインだろうが！」

「そんなことはどうでも良いんです。ってか負け犬もマケインも変わらないでしょうが、馬鹿なんですか先輩」

「どうでも良くないから、変わるから、馬鹿じゃないから！ 何でそんなこと言われてんの俺！」

「負け犬だからじゃないっすか？」

「ねえ、キース君。君喧嘩売ってるよね。しょうがない、自称雪合戦の貴公子が雪合戦で勝負するよ」

「雪合戦の貴公子ってなんだよ……」

「自称って……」

2人してイドリアを呆れたように見つめる。

「さあ、まず第1投目だ」

シュッ……ベチャ。

イドリアが投げた雪玉はキースの顔面に直撃する。

「……受けて立ちますよ、負け犬先輩イ！」

ビシュッ……ゴッ！

キースが放った雪玉はイドリアの顔面に当たる。

「イタッ！ 石入ってるよねキース君！」

「石入れてこそその雪合戦でしょうが！」

「危険すぎる！」

「行きますよ先輩！ 必殺分身玉！」

キースはたくさんの雪玉（石入り）をイドリア目掛けて投げまくる。

「それ分身じゃない、たくさん投げているだけじ……イタアッ！
何、全部石入り？ これ雪合戦じゃ……ギャアアッ、目があ！」

「……えっと、帰ろう」

ブルムは2人をおいて部屋に戻る。2人の雪合戦（というなの一

方的なイジメ）は夜遅くまで続いていた。

翌日、雪合戦が繰り広げられていた場所には雪の上に赤い液体が飛び散っていたそうだ。

第32話（前書き）

＊注意事項＊

駄文、短文注意。随時アイデア等募集中！

第32話

冬季休業最終日、学院の敷地内に学生が作ったかまくらでアークは寝ていた。かまくらの中には火がついたロウソクが暖房としておいてあった。

アーク・アルシエル、中等部3年2組15歳はAランクだ。実際、試験は手抜きなのでSランクなのかもしれないが。

「あ、アーク君みつけ」

ふとかまくらの外から声が聞こえる。アークが目を開けてかまくらの入り口を見ると、少女がのぞき込んでいた。アークは体を起こし少女に話しかける。

「エニアか……どうしたんだ？」

エニア・フィサリス、中等部3年2組で密かにアークに好意を寄せている。アークはカッコ良く女子からだけではなく男子からも人気がある。

エニアはアークに告白しようと何度も考えた。しかし、アークが中等部だけではなく高等部の女子から告白されるがことごとく断っていることを知り今ではあきらめている。告白に失敗してギクシャクしてしまうのは絶対に嫌なので、それなら友達以上恋人未満の関係で居続けようとしている。

「かまくらを見かけたから誰か居るのになって……1人で作ったの？」

「ああ、魔法を使った。……他の奴には内緒にしていってくれないか？」

「うん。というか魔法使ってよくバレなかったね」

「……まあ、僕は魔法の天才だからね」

「自分で天才って……」

「事実だから。エニアも中に入れば？ 2人くらいは入れるし、暖かいからな」

「ん。じゃあ、お邪魔します」

エニアはかまくらの中に入り、アークの隣に座る。体が密着しているがエニアは気にしないようにしている。エニアはドキドキして顔も赤い。エニアはアークに顔を見られないように注意している。

「うわあ、暖かいね」

「そうだね」

2人はかまくらの中でまるで恋人のように体を寄せ合っている。エニアは、恋人だったら抱き寄せられたりしてるのかな？ と妄想していた。しばらく、2人は話すこともなくジッと座っていた。

「……そういえばアーク君は好きな人居ないの？ 噂で聞いたんだけど中等部以外にも高等部の先輩達からも告白されて、でも全部断ってるらしいって……」

「噂は本当だよ」

「へえ。なら、やっぱり好きな人居るのかなあ？」

エニアはニヤニヤしながらアークを見る。

「……そうだな。居るよ」

「え？ あ……そ、そうだよ。やっぱりか」

明るく言うエニアだが、内心ガツカリしている。

「……エニアはどうなんだ？ 好きな人は居るのか？」

「わ、私？ ……私は……居ないよ」

「ん、そうなんだ……」

「うん。……好きな人に告白してないの？」

「ああ。……人に告白するのが不安でね。告白されることは多いんだけど、女子が告白するのと男子が告白するのって違うだろ。それに、もしかしたら相手の方から告白して来てくれるんじゃないかって考えてね。……僕って自意識過剰なところあるよね、自分が両思いだと思っているって」

アークは自嘲している。その様子を見てエニアは何か声をかけたかったがかける言葉が見つからなかった。

「……どうしたら良いと思う？ 自分から告白した方が良いと思う

か？」

「わ、私に聞くの？」

「ああ、今ここにいるのはエニアだけだ。……それに信頼してるんだ」

「え？……私を？」

「ああ。そういえばエニアとは学院に入る前、幼稚園の頃からの付き合いだよな。エニアが告白した方が良かったって言うなら告白する……どうなんだ？」

エニアは迷っていた。アークの告白はほぼ確実に成功するだろう。だが、正直に言うとなアークが他の女子と仲良くしている様子は見たくない。もし、告白しない方が良かったらアークは相手からの告白を待ち続けるだろう。

「わ、私は……告白した方が良いと思う」

「そうか、ありがとう。……1つ聞くがエニアは僕のことどう思う？」

「……どうって？」

「……いや、考えている時なんだか辛そうな表情をしていたから」

「もしかして……私がアーク君のこと好きなんじゃないか、とか思ってた？ 仮にそうなら告白した方が良いとか言わない。それに……私、アーク君のこと仲が良い友達くらいにしか思ってたし。」

言っちゃ悪いけど、自意識過剰すぎ」

「……すまない」

アークは俯く。エニアの目には何だか震えているように見える。
……言い過ぎた、エニアはそう思う。心にもないことを、自分が言われたら傷つくことを……だが、もう後には引くことはできない。

「……ほら、早く告白して来なよ」

「そう、だな」

アークはゆっくりとかまぐらの外に出る。……行ってくる、エニアにそう言ったアークは駆け出した。

「……はあ。私、なんであんなコトを」

自分のことを信頼していると言った。好きな人にそう言われかなり嬉しかった。……だからこそ告白するように言った。

告白は成功するだろう。それでもアークは何時も通りに接してくだろう。もしかしたら、そのことがアークの相手に誤解を生むかもしれない。それでアークが不幸になるくらいなら自分が嫌われても良い。

きっと、明日からアークは自分に話しかけることはかなり少なくなるだろう。

……これで良いんだ。

エニアは自分に言い聞かせる。だが、何故か寂しく感じる。これで良いはずなのに……涙が流れてくる。

エニアは1人がまくらの中で泣いていた。

第33話（前書き）

＊注意事項＊

駄文。短い。あまり話は進んでない。

第33話

アークはクロリアの街をふらふらと歩いていた。アークが告白しようかと考えていた相手、それはエニアだった。そのエニアは自分のことを友達としか見ていなかった。

「……ふ、ふふふ」

……本当に自意識過剰すぎたのかもしれない。学院では努力という努力はしたことはなかった。それでも、基本的に何でも出来た。他人にもてはやされ、天狗になっていた。

「く、はは、ははははは！」

……馬鹿だ。自分でもそう思う。エニアとは所謂幼なじみ。小さな頃から過ごしてきてエニアのことが異性として気になりだしたのは初等部6年の頃だ。

……自分で言うのも何だが初等部の頃からモテていた。女子は話しかけてくるがすぐに恥ずかしそうにして去っていく。そんななかで普通に接してくれた女子はエニアだけだった。

アークは歩きながらどこか自嘲気味に笑っている。すれ違う人達はアークを気持ち悪そうに見ている。それもそうだ。街中を笑いながら歩く様子は変になったようにしか見えない。

「く、くくく……」

気づくとアークは街を出てクロリア北の森を歩いていた。クロリ

アの北、東、南には森が広がっている。西には草原が広がっている。……今は雪で一面真っ白だ。クロリア北の森には精霊が棲むと言われている湖がある。

アークはその湖に来ていた。光に照らされ湖の表面と積もっている雪がキラキラと輝いている。水は澄んでいて魚が泳いでいる様子が見える。湖の真ん中には陸地があり祠が建っている。

「……綺麗だな」

アークは湖の近くに腰を下ろし、水中で泳いでいる魚を見ている。春ならば花畑も見れるらしい。

「あれ？先輩何やってるんですか？」

「ん、ああ君か。いや……ちょっとね」

アークが振り返るとそこにいたのはルクス・フィサリス。中等部2年でエニアの妹だ。ルクスは首を傾げてアークの隣に座る。

「悩み事なら私に相談してください！微力ながら協力しますよ」

「はは、気持ちだけで嬉しいよ」

「そうですか？……あ、あの、先輩」

「なに？」

「寒いので、え、えっと……寄り添っても良いですか？」

「あ、ああ。かまわないよ」

「あ、ありがとうございます！」

ルキスはアークにピタリと寄り添って、腕を組んでくる。ルキスは顔を赤くしているがアークはちよつと驚いているだけだった。

しばらく、2人は無言で湖を見つめていた。ときどきルキスはアークを見てはいるが、ルキスの視線の先に映るのは変わらない。

「……先輩、好きです」

「……え？」

「好きなんです先輩のことが！ 私、幼稚園の頃から先輩に惹かれていました。初めは兄のように感じていましたが、だんだん恋心になって……。先輩が告白を断り続けているのは知ってます。ですが……も、もしよろしければ付き合ってください！」

ルキスは言い終えた後、恥ずかしそうに俯いた。

「……ルキス、顔を上げてくれないか？」

「は、はい。なんですか？」

「気持ちは嬉しい。だけど付き合えない」

ルキスは悲しそうな表情をしたあと俯く。俯いたままルキスは口を開いた。

「……どうして、先輩は告白を断り続けているんですか？」

「……好きな人が居るんだけど、告白しようと思っていてね。……まあ、相手は友達にしか見てないみたいだけどね」

ルキスはゆつくりと顔を上げる。

「……先輩、私はそれでもあきらめませんから。絶対に先輩を虜にしてみせますからね！」

「……そっか。期待してるよ」

微笑むアークを見てルキスは目を奪われる。……いつか、この笑顔……先輩を自分のものになりたい。

そして、ルキスは決意する……。

絶対に先輩を落としてみせる！

第34話（前書き）

＊注意事項＊

駄文注意です。読んで下さる皆様、お気に入り登録をして頂いた皆様に感謝です。

第34話

グレイ、リユージ、ノエルの3人はコーラル近くの浜辺に倒れていたところを海軍のパトロール隊に発見された。3人は海軍に報告した後、クロリア王宮に戻った。

魔術協会会長室

「……答えてください！ アナタも今回の件に絡んでいるんですか？」

「口を慎め……それに貴様等には魔術騎士団を辞めてもらう」

「ど、どういことですか？」

「ふん。魔術騎士団であるにも関わらず任務に失敗し、ノコノコと自分達だけ戻って来た。魔術騎士団始まって以来の恥さらしだ」

「……それが事情を知らない者達からの我々の評価ですか」

「ああ。事情を知るのはほとんどいない。……国中に広まるのも時間の問題だ。ああそうだ、国王様からの評価も同じだ」

「私達は悪くない！」

「何と言おうが貴様等が王宮を出て行くことは決定事項だ。これは他の魔術騎士団隊長、魔術協会6将が会議で決めたことだ。その意見に賛同した者、団体を1つずつ言っても良いが日が暮れるだろう」

「……我々はどうすれば良いのですか？」

「まずは王宮を去ること。そして街を去る。……幸いにも魔術騎士団のメンバーを知っている者は限られわずかしいない。出来る限り遠くの街、または国外で静かに暮らせば良い」

「……わかりました」

3人は会長室を出る。

「……実家に帰ろうかな」

「エトワール嬢の実家というと、魔法具の一流メーカーだったな。最近では小型魔力増幅装置が売れているとか聞いたな………ついてきて良いか？」

「良いよ。レクティードはどうするの？」

「俺は旅に出る。前から行こうかと思っていたが良い機会だ。クロリア王国中を自分の足で回る」

「そっか。なら行こうかグレファス」

「ああ、じゃあなレクティード」

「ああ、またな」

リユージは2人を見送ると歩き出す。向かったのは北の森にある湖。その奥には樹海が広がり常に霧がでている。別名迷いの森。樹海の途中に小さな村がある。その村の建物はツリーハウス、木の上

に立っている。上に登るハシゴはあるが、霧で気づかない者が多く、村の存在をしる者は少ない。

樹海の先には山脈がある。山脈は大陸を半分にするように横に広がっている。なお、大陸全体がクロリア王国で、他にも大陸は存在するが、大陸全体が1つの国であることはクロリア王国以外はない。

ちなみに大陸の端から端まで続いている山脈の中に世界で一番大きい山がある。その山は平地からだと言上は見えない。頂上には竜が居て世界を見守っていると言われている。

リユージは樹海の村ナイリアに着き、ハシゴを登る。ハシゴは1つしかなく、ハシゴのさきは宿屋の中だ。

「あ、おかえり、リユージ様」

「久しぶり。師匠はどこにいるかわかるかい？」

「……シヨウゾウ様でしたら2階の大広間で酔っ払っています」

「変わってないな」

「リユージ様は立派になられてますね」

「……ありがとう、ミラ」

「いえ……それにしてもいきなりどうされたんです？」

リユージはミラに自分が魔術騎士団を止めたことを伝える。島でこのことも包み隠さず。

「……つまり、そう遠くはない未来に王宮を中心に戦いがあるんですね」

「そうだな。……王宮内には既に敵が潜伏してと思う。戦いが始まる前に信頼できる仲間を探さないといけない。その旅に出ようと思う」

「そうですか……まずは師匠に協力してもらいそうですね」

「ああ。行ってくる」

リユージが2階に上がり大広間に行くと酔っ払いがいた。酔っ払いがリユージに気づくと立ち上がって近づいてくる。

「久しぶりじゃなリユージ」

「お久しぶりです。師匠は相変わらずのようですね……」

「ふん、お前以降儂の修行についてこれる奴が来ん」

「確かにあの修行は何度も死にかけましたからね」

「それに最近の若者は根性が足りん」

「だからって昼間から酒ですか……」

「暇なんじゃからしょうがない……で、どうしたんじゃ？」

「実は……」

リユージはミラに話した内容をシヨウゾウに話した。話をしている間、シヨウゾウは難しい顔をしていた。

「……わかった。出来る限りのことは協力しよう。教え子達にも連絡しておく」

この世界の連絡手段に電話がある。だが、電波は魔獣を寄せつける可能性があり、電波の代わりに魔力波を使った魔力電話が使われている。魔力波とは魔力を電話に送ることで発せられる電波のようなものだ。魔力と異なり魔力波は魔獣に感知されない。

「ありがとうございます」

「それで、まずはどこから行くのか？」

「クロリアの西にある都市ヴェールに行って飛空艇に乗って山脈を越えようと思う」

飛行艇は数種類存在する。普通の船にプロペラやエンジンを使って浮かす物、気球のように袋状の物をガスを入れてゴンドラのようなものを浮かせる物、潜水艦にプロペラやエンジンを使って浮かせるような物など多くの種類がある。

「……気をつけるんじゃない」

「ああ……お爺ちゃん」

クロリアーヴェール往復大型魔獣車内

魔獣車には種類があり、小型・中型・大型の三種類がある。小型は3人乗り、中型は6人乗り、大型魔獣車は大人数用の移動手段として用いられる。どれも魔獣が引つ張る。

また、乗り物専用の魔獣の研究も行われているようだ。

ノエルの実家に行くには飛行艇に乗って行くのが早いので、飛行艇に乗るためにヴェールに向かっていた。大型魔獣車に乗り込み、2人は話をしていた。

「へえ、グレイは元騎士長の奥さんに会ったことがあるんだ。……私と奥さん、どっちが綺麗？」

「それは……ノエルだよ」

「ちょっと！ さっきの間は何よ」

「何でもない」

グレイとノエルは仲良くなり、名前で呼び合うまでになった。

「そういえば、グレイの実家は何処なの？」

「俺？ 俺は北クロリアの一番北だ」

クロリア王国は真ん中に広がる山脈から上を北クロリア、下を南クロリアと分けて呼ばれている。首都クロリアは南クロリアだ。

「一番北ってクルクだよ。コーラルの次に大きな港町の」

「そうだ。……さて、そろそろ着くな」

「みたいだね」

魔獣車がヴェールに着いた時には日が沈みかけていた。2人は宿に泊まることにした。

「えっと、申し訳ありませんが今部屋が1つしか空いていません」

「だって。一緒の部屋で良いよね」

「は？ ま、待て。男女が同じ部屋だぞ？」

「私は気にしないよ。それにグレイのこと嫌いじゃないよ。むしろ好き。……変なことはしないでよ」

「あ、当たり前だろ！」

顔を真っ赤にして言うグレイ。ノエルは、即答しなくても良いじゃん……とつぶやいた。

宿屋の食堂で夕食を食べ、2人は眠りについた。ちなみに部屋はダブルベッドが1つだけしかなく、冬であることから密着して眠ることになり2人はドキドキしてなかなか寝付けなかった。

第35話（前書き）

* 注意事項 *

短め駄文。

第35話

冬季休業明け、三学期初日。体育館にて始業式が終わったあと、この日は帰りのホーム後午前中で下校となる。

帰りのホームが終わり放課後……。

「シル君、食堂行こう」

「そうだな」

アイリはシルフィードと一緒に食堂に向かう。食堂につくと人だかりが出来ていた。

「？ 何だろうな。……食事の邪魔だというのに」

「はは……。あ、ブルムが居るから何かあったのか聞いてくるね」

アイリは人だかりの近くにブルムを見つけ、歩みよる。ある程度近づいてくるとブルムもアイリに気づいた。

「あ、あ、アイリ！ 大変、大変なんだよ！」

「ど、どうしたの？」

「な、なんと……王子が学院に通うことになってね。俺達4組に入ってたんだ」

「お、王子ってルベライト様？」

「それ以外に誰が居るんだ？」

「あ、キース」

「学院も何を考えているんだろうな。Gランクが2人もいるクラスに将来国のトップになる人間を……」

まあ、クラスの生徒も教師も俺等を王子と話さないように見張っているが、と遠目で様子を眺めている教師を睨みながら話す。

アイリが苦笑いしていると、ルベライトは何かを見つけたよう歩き出す。生徒達は邪魔にならないように道を作り、その様子を見ている。

「……久しぶり、シル」

「ああ、そうだな」

王子とシルフィードが仲良く話している様子を見て、ほとんどの生徒、教師が目を見開いて驚いていた。

「え、シルと王子は知り合いなのか？」

「王宮に行った時に友達になったらしいよ」

「へえ……。こ、こっちに来るぞ」

2人が向かってくるのに気づいた3人は若干緊張したような表情をする。

「はじめまして、ルベライト・セイファートだ」

「は、はじめまして」

「アイリ、そんなに緊張するな」

シルフィードは笑いながら言うが、気軽に王子に話しかけることが出来るのはほんのわずかだ。

「もしかして、シルの彼女かい？」

「は、はい」

「こんな美人の彼女が居て羨ましいな。俺なんか出会いは全くないからな」

「中等部じゃないか。まだまだこれからだ」

「シルにはもう彼女がいる。説得力はないな」

「ははは」

「ほ、本当にルベライト王子と友達だったんだね」

「そうだ、シルの友達なら俺とも友達になってくれ」

ルベライトはアイリ、プルム、キースを見る。3人は驚いたように顔を見合わせる。

「え、えつと……私達なんかでよろしければ……」

「よし、ならば決定だ。敬語は無しで良い……よろしく」

「」「よ、よろしく」「」

ルベライトはいまだに戸惑っている3人に手を差し伸べ握手を求める。3人はおそろのおそろ手をだし握手した。

「えつと、みんなは昼食は食べたのか？」

ルベライトの問いに首を横に振る3人。

「なら一緒に食べよう」

5人が適当に席について昼食を食べていると周りから視線が突き刺さる。5人中1人が王子、1人がSランク、2人がGランク……注目を浴びるのは当然かもしれない。

アイリとキース、プルムは緊張しているからか、いつもより食べるスピードが遅い。対してシルフィードとルベライトはしゃべりながらもパクパクと食べている。

「そういえば、何で学院に？」

「ああ。今、魔術騎士団に特別講師がいるんだけど、その講師から学院について知っておくと良いと言われてな」

「なるほど。だが、学院行きたかったんだから願いが叶って良かったじゃないか」

「ああ、そうだな……寮は1人部屋らしいからさ、たまに遊びに来いよ」

「約束する……。さて、昼からどうするんだ？」

「学院のどこに何の教室があるか分からないから案内してくれないか？」

「ああ、わかった」

シルフィードとルベライトは立ち上がり、食堂をあとにした。3人は2人が出て行ったあとホッとため息をつく。

「緊張したぁー」

「王子と友達か……悪くない」

「わ、私が王子と友達なんて……」

ブルムはまだ緊張していたのだが……。しばらく3人は周りから視線を浴びていた。

第36話（前書き）

* 注意事項 *

かなり短めです。

第36話

「ほら、早く行かないと出航するぞ」

「ま、待つてよ」

グレイとノエルはヴェールの飛行艇乗り場に居る。ヴェールの飛行艇は船にプロペラなどがついていてるタイプだ。飛行艇は客1人1つもしくは数人で1つの部屋が用意される。

2人は1つの部屋で過ごす。飛行中は外に出て空からの景色を見ることができる。

「ねえ、グレイは飛行艇初めて？」

「いや、一回だけ魔術騎士団に入る時に乗った」

「そういえばグレイって私が騎士団に入る前にはすでに隊長陣に選ばれたんだよね。同い年なのに凄いや……まあ、でも私達隊長陣って高等部の頃から騎士団に入ってる人多いんでしょ？」

「まあな。高等部から魔術協会や海軍の協力のためならば出席しなくて良いとあるからな。最低条件として成績を保ち続けることができるけどね」

「そうだったね。……私は上等部の時に入ってたんだよね」

「途中でマジックゲートに転入したんだっけ？」

「そう、その時に初めて飛行艇に乗ったんだ……よし、そろそろ出航だから外で景色みようよ」

「ああ、そうだな」

2人が甲板に出た時には既に船は浮き上がっていた。ふと、グレイは酔ったのか気持ち悪くなったらしい男を見つけ話しかける。

「大丈夫ですか？」

「あ、ああ。何のこれしき……グレファスとエトワール嬢か」

「なんでレクティードが？」

「ああ……仲間探しだな」

「ま、まさか戦う気？ 無理だよ、あんな強かった海賊達を楽々倒すような相手でしょ……」

「それでもだ。世界は広い。このクロリアにも、まだまだ知らない猛者達が居るはずだ。魔術騎士団よりも強い奴らが……」

「魔術騎士団よりも強い奴らなんて……」

「……元魔術騎士団か」

「そうだ。マジックゲートの学院長を初めとする伝説の魔術師達も居る」

「……でも」

「別に協力してくれと言うつもりはない。協力してくれるとありが

たいがな」

そう言ってリユージは、ふらふらと部屋に戻っていった。その様子を2人は心配そうに見ていた。

3人の話を聞いていた者達がいた。顔はフードで見えず、ローブを着て怪しげな雰囲気を出している2人組の男だ。

「……伝説の魔術師、ねえ。……どう思うルー君？」

「サア。デスガ、ナニカガオキルヨウナキハシマス」

「だね。さて、私達の出番は来るのかな？」

「ドウデシヨウカネ。……オレハアナタニツイテキマスカラネ」

「いきなり何だい？ 気持ち悪い」

「……ヒドイデスネ。オレヲタスケテクレタノハアナタデス……メシア」

「ああ、そういえばそうだったね。かなり昔のことだったから忘れてたよ。何年くらい前の話だっけ？」

「ニヒヤクネンホドマエノハナシデスネ」

「……そっか。もうそんなに経つのか。……早いね」

「……オレハナガクカンジマシタ」

「はは、君も後数百年生きれば分かるよ。私達はちっぽけでこの世界の一部にしか過ぎない。だが、少しずつ行動を起こしていけば世界は変えられる。現に同士も世界中にいる」

男は手を太陽へと伸ばし、拳を握る。もう一人の男はそれを眩しそうに見ている。

「……イヨイヨデスネ」

「ああ。……世界の破壊。そして再生。それを成し遂げた時、私は変わるんだ。救世主^{メシア}から神へと……」

第37話（前書き）

＊注意事項＊

駄文です。読んでくれる方々に感謝。

第37話

ヴェールを出発した飛行艇は数時間で目的地であるヨルガの街に着く。ヨルガは北クロリアと南クロリアを行き来する飛行艇乗り場がある。飛行艇は北クロリア間を行き来するものもあるが、南クロリアに行き来する飛行艇はヨルガからしか乗ることが出来ない。

ちなみに、南クロリアでは飛行艇があるのはヴェールだけだ。

グレイとノエルの目的地はエクステンドという北クロリア最大の街だ。そこは山に囲まれた街で飛行艇を使って行く場合がほとんどだ。2人はエクステンド行きの飛行艇に乗り込んだ。

リ्यूジは歩いて北クロリアを回ろうで、2人と分かれて行動することにした。ちなみに、飛行艇に乗り込んだ2人はまた同じ部屋だ。

「思うんだが、北クロリア最大の街が山に囲まれてるなんて不便すぎないか？ 山を越えるか飛行艇に乗らないとこれないなんて……」

「だから北クロリア最大の街になったんじゃないかな。わざわざ苦労してまで来る盗賊ってほとんどいないし、他の街に比べたらかなり平和だと思う」

ノエルは自分の産まれた街エクステンドに対して誇りを持っているようで、嬉しそうに話している。

「安全なんだ」

「うん、安全だよ」

ノエルが微笑んだ時、急に周りが騒がしくなる。何事だろうと耳をすませると……。

「俺達はエクステンドの盗賊だ！ 金をだせえ」

グレイとノエルは顔を見合わせる。

「……安全なんだ」

「……うん」

2人は巻き込まれたいと考え、部屋でおとなしくしていることにした。……が、盗賊が扉を蹴り飛ばした。

「おうおう、邪魔して悪いねカップルさん。金目のもの渡してくれれば今すぐ立ち去るけ……ど……」

部屋に入ってきた盗賊の1人がノエルを見て、目を見開く。ノエルも、盗賊を見てどこか見覚えある顔だと思う。

「えっと……誰だったかな」

「お、俺だよノエル姉」

ハツとノエルは思い出す。自分のことをノエル姉と呼んでいたのは1人。家の近所の年下の子供で幼なじみ。

「もしかしてロツシー？」

ロツシュ・クワルツ、ニックネームはロツシー。エトワール家の近所。ロツシュの父親は一流魔法具メーカー・エールの製品制作部門の部長をしている優秀なエンジニアだった。ちなみにエールというメーカーの社長はノエルの父親だ。

「なんで、ロツシーが盗賊なんか……」

「家が火事になってよ、全焼して1人生き残ってしまったんだ」

「だからって盗賊になんか……。私の父さんに頼めば……」

「……ヴォームさんにはエトワール家で暮らさないかって言われた。だけど、今までずつと助けてもらってきた。もう、これ以上迷惑をかけたくないんだ」

「迷惑だなんて父さんは思っていないよ」

「……それでも、俺は」

ノエルとロツシュが言い合っているのをグレイは黙ってみている。その時、また盗賊が部屋に入ってきた。

「おい、何やってんだ！」

「す、すいません」

「ん、だれだその女」

「あ、エトワール家の長女です」

「……エトワールって言ったらエールの。おい、その女を捕らえろ」
「は？」

「その女を捕まえてエトワール家から金を巻き上げるんだ……早くしろ」

「どうやら、入ってきた盗賊はリーダーのようで、ロッシュともう1人の盗賊は慌てて縄を持ってくる。」

「……私がそう簡単に捕まるとでも？ 私はSランク、連れもSランクよ」

「ふん、だからどうした？ これ知ってるか」

盗賊リーダーは懐からビンを取り出す。中には小さな蜘蛛がびっしりと入って蠢いていた。

「蜘蛛……気持ち悪い」

露骨に嫌な表情をするノエルにムツとした盗賊リーダーだが、蜘蛛について説明する。

「この蜘蛛はな、吸魔蜘蛛って言ってな、高い魔力を持った生物にまとわりつき魔力を吸い取るんだ。野生の吸魔蜘蛛にまとわりつかれたら、早く取り払わないと魔力が吸い尽くされる。」

魔力がなくなったと吸魔蜘蛛が感じると今度は血液を吸い取る……まあ、吸魔蜘蛛に覆い尽くされた生物は助からないと言っても過言じゃあない。

この吸魔蜘蛛は、手懐けているから俺の意のまま……」

盗賊リーダーはビンのフタを開ける。

「……やめなさい」

「黙れ、温室育ちのお嬢様が！」

盗賊リーダーはビンをノエルに向かって投げる。普段であれば余裕で対応できるのだが、盗賊リーダーの言葉に一瞬動きを止めてしまった。

……防ぐことにノエルは失敗し、ビンの中から飛び出て来た吸魔蜘蛛に身体中にまとわりつかれてしまう。吸魔蜘蛛は身体に貼りついた瞬間に糸を吐き出し振り落とされないように身体を固定する。

「や、ヤバ……ぐわああああっ！」

吸魔蜘蛛が魔力を吸い取るために一斉にノエルに噛みつく。ノエルは激しく痛みを感じるとともに急激に魔力が抜けていくのを感じた。ノエルは激しい痛みに悶え苦しむ。

「ノエル！」

グレイは吸魔蜘蛛を操る盗賊リーダーに攻撃しようと駆け出す。

「おいおい、俺が意識を失ったりしたら吸魔蜘蛛は本能がまま……わかるよな。そうなたらエトワール家の長女は死ぬ」

「ぐっ……頼む、吸魔蜘蛛を止めてくれ！」

「……なら、金目のものを置いてこの部屋から出る。そうすれば吸魔蜘蛛を止める。だが、長女は解放しない。エトワール家から金を巻き上げないといけないからな」

「……わかった。ノエルには絶対に手を出すな。……ノエルを傷つけないでくれ！」

「もしかして、この女が好きなのか？　ははは、そっか、なら助きたいよな」

「いいから、早く！」

「……さらに条件をつける。吸魔蜘蛛をまとわりつけて飛行艇から飛び降りろ」

「……何？」

「お前のことだ。愛する者を危険を顧みず助けようとするだろ？　計画の邪魔をされたら困る。……手を出さないことは約束する」

「……わかった」

「……戻れ」

吸魔蜘蛛達がビンに戻っていく。ノエルは魔力をかなり吸い取られたが激しい痛みから解放された。ホッとしたノエルは床に横になったまま大きく息をしている。

「もしかしたら、生きているかもしれないが、高いところから落ち

さらに吸魔蜘蛛をまとわりつかせていれば、ほぼ死ぬ。別れの挨拶ぐらいさせてやる」

グレイはノエルに近づく。足音にビクツとしたノエルだがグレイだて気がついて安心する。

「……大丈夫か？」

「うん……まだ、体に力が入らないけどね」

「そっか……話は聞こえていたか？」

「……ダメだよ。グレイが私のために死ぬなんて」

「……すまないな」

グレイはそう言ってノエルから遠ざかって行く。

「グレイ！ ダメ、私を……私をおいていかないで！」

「……ノエル？」

「……こんな時に言うのはおかしいかもしれない。でも、今だから伝えたいの。私……グレイが好き」

「……はははははははははは！ こりゃあ驚いた。まさかの両思いかあ？ お互いの思いをわかりあえたのに、無残にも引き裂かれる2人……もう二度と会えない想い人……泣かせるねえ！ ぎやははははははははははは！」

最後にやつちゃえば？ 最後の思い出くらい作らせてあげるぜ……
……くかかかかっ！」

「……金目のものは置いた。あとは蜘蛛をまわりつかせて飛び降りるだけだ」

「……ふん。思い出作らないのか？ つまんねえな」

「俺はお前を楽しませるために生きてるんじゃない」

「ふうん、もう楽しめたけどな……行け」

盗賊リーダーのかけ声で吸魔蜘蛛が 그레이 にまわりつき、糸で身体を固定する。

「……ぐう……。こ、これで飛び降りれば良いんだな？」

「ああ」

「ダメ、 그레이。 그레이 が死んだら……」

그레이 は激しい痛みに耐えながら ノエル を見つめる。

「ノエル……お、俺は…… ノエル に…… ふさわしく、 ない…… だが、もし…… 生きて、 また…… 会えたら…… その、 時は…… じゃあな」

그레이 は部屋を飛び出し甲板へ出る。 ノエル は盗賊を押しつけて追いかける。 盗賊達も追いかけた。

ノエル が甲板に来た瞬間、 그레이 は飛行艇から飛び降りた。

「ぐ、グレイ！ そんな……なんで……」

ノエルはその場に座り込み涙を流す。

「……ノエル姉」

「おい、ロッシュ。女を縛って倉庫にプチ込んで……今すぐに」

「わ、わかりました」

第38話（前書き）

＊注意事項＊

駄文、グダグダ注意。よくあることだ、気にするな。

第38話

北クロリアにあるエクステンド、その街は山に囲まれ、山の周りには森が広がっている。

「……何のようだ」

「金目のものを置いて行きな」

森の中で1人の学生が盗賊に囲まれていた。盗賊達のアジトはエクステンドの周りにある山のどこか。ちなみにそのリーダーは今、飛行艇の上にいる。

「……山にも盗賊がいるんだな。まあ、海の盗賊だから海賊、山の場合は山賊というからな」

「なにゴチャゴチャ言ってやがる」

「まあ、慌てるな。俺は逃げないから安心しろ……それより、仲間にならないか？」

「あ？ 結局は命ごいかよ」

「つい最近、仲間達が消息不明になってさ……」

「俺達には関係ないな」

「そ………だったら死ね」

シュツ……。

「……うつ」

学生が刀を鞘から抜くと同時に周囲の盗賊は切り裂かれ息絶える。それを見ていた他の盗賊達は一目散に走り逃げ出す。

「……もう誰もいないか。……と、言ったら良かったな。……そこに居るのはわかってる。今すぐ出てくれば、たぶん殺さないかもしれないのだろうと心の中奥底深くで少しくらい思っているはずらしいことをどこかで聞いた気がするようないような」

「どれだけ曖昧なんだよ！　ってか途中から本人の意思じゃないからね！」

「お、間違ったようだな。正確には、今すぐ出てくれば、たぶん殺さないかもしれないだろうと誰かが言ったような気がしないわけではないわけだが、心の奥底深くで少しくらい思っているやつがいるはずらしいってことをどこかのだれかさんの友達らしき人が言ったらしいことを聞いたことがあるかもしれないと存在したかどうかさえ怪しい人が言っていたので殺されないはず……と思えるほど人生は甘くはない」

「なんか複雑になってるし、結局私は殺されるの？」

「黙れメス！　山賊みたいな輩と仲間な時点でお前の人生終わってんだよ！　海賊こそ男のロマンだ！」

「意味分らないし私は女だし」

「ああ……海が恋しい」

「話聞けよ！」

「ふ、今の状況でそんなことを言えるとは余裕だな……目の前に居る男に今にも殺されるかもしれないというのに」

「急に真面目になった！……やっぱり私を殺すのか？」

「気が向いたらな」

「え？　なんかいい加減」

「ああ、海を見たい、海に帰りたい、海を飲みたい」

「……飲みたいは流石にないよ」

「なに言ってるんだ？　スープを思い浮かべろ、スープはにこむこ
とで具材の栄養やらなんやらがスープに溶け出すんだ。そしてスー
プは美味しくなる」

「……なら海も？」

「そんなわけあるか脳無し。海とか熱せられるか馬鹿。海水とか飲
んでも塩辛いだけで、なおさらのどが渴くじゃねえか」

「……泣きたい」

「泣きたいときは泣けばいい」

「……アンタのせいだよ」

「人のせいにするのは良くない……で、女性が山賊なんかに入ってるなんてな……汚れてる」

「な！ 汚れてなんかいない！ ま、まだ処女だし……」

「……は？」

「……え？」

「いや、汚れてるってのはな精神的にとかそんな感じで……まさかそんな回答が来るとは思いもなかった」

「だ、だって……」

「ま、どうでも良いし興味もないからな……さて、今からお前に選別肢を与える」

「……なんだよ」

「ここで死ぬか、俺についてきて服従を誓うか？」

「……お前っていったい何者なんだよ」

「俺か……海賊かな」

「ここ、山だぞ」

「山にいるから山賊、海にいるから海賊という固定概念は捨てたほうがいい」

「はあ……。お前が強いのはよくわかった。だが、何で私を仲間にしようと思うんだ？ 足手まといだろ」

「駒は多くても困らない。それに俺の好みだからな」

「……っ。賊つてのはそればかりだな。私が山賊に入った時も山賊達はそんな目で私を見て……」

「賊だけじゃない。男は誰しもが抱く感情だ」

「……正直そろそろ危ないと思っていた。それに、山賊に入ったのは家族の敵をとるためだった。だけど、敵である盗賊の副リーダーはお前が……。もう賊になる気はない……殺してくれ」

「……駄目だ。お前は俺の仲間にする」

「……選択肢の意味がないじゃない」

「ふん。嫌になったらすぐにも逃げれば良い。ま、お前には帰るところがないんだろう。逃げれば望み通り死ねるはずだ」

「……最悪だね」

「さて、今から賊の残党を探して仲間を引き込む」

「残党って……まだリーダーは死んでない」

「逃げたのか？」

「リーダーは上にいる」

女山賊は空を飛んでいる飛行艇を指差した。

「へえ……なんか振ってきてない？」

「……え？」

飛行艇から何かが落ちてきてる。それも、2人の真上に……。

「……人だな」

自称海賊は振ってきている人を受け止めようと構える。

「な、無理だろ！」

「ふ、固定概念は捨てる！ たしかに高いところであればあるほど物の落下時の威力や速度は増す。普通は受け止めようとしたらかなり危険だ。だが、俺の力を侮るなよメス！」

ヒュウウウツ……ズンツ！

「ぐ、何のこれしき！」

宣言通り自称海賊は受け止めた。

「き、吸魔蜘蛛！」

「……燃え尽きる」

落下してきた人にまわりついてた蜘蛛だけを燃やし自称海賊

はゆつくりと地面に下ろす。落下してきたのは男で気絶している。

「おい、メス。何か心当たりは？」

「この男は知らないけど、吸魔蜘蛛はリーダーの……」

「……何とか生きてるな。魔力もまだある。落ちてくる少し前にまとわりつかれたようだ。連れて行く、メスお前にまかせた」

「は？ 私女なのに……。しょうがない……。格好いいし良く考えたら得かも」

「黙れメス」

「ひどくない！ どこに連れて行けばいいの？」

「そうだな、エクステンドまでだ」

「ま、まだ山にすらついてないのに……」

「さあて、仲間探しの始まりだ」

元山賊、さらに落下してきた男を加え自称海賊はエクステンドへ向かう。

第39話（前書き）

＊注意事項＊

駄文。グダグダ。今年中にもう1話は投稿したいです。

第39話

飛行艇は山賊達に乗っ取られた。ノエルは倉庫に閉じこめられている。手足は縛られ、身動きが出来ない。

「……グレイ」

「悪いけど、あの高さから落ちたら助からない。それに、吸魔蜘蛛もいる。吸魔蜘蛛の恐ろしさはノエル姉は身を持って知ったと思うよ」

「……私の実家に帰ろうとしたばかりにみんなに迷惑がかかるなんてね」

「ノエル姉……」

「……ロツシー頼みがあるの」

「何だい？」

「私を今すぐ飛行艇から落として！ 家族にまで迷惑かけたら……」

「……今、縄をほどく」

「え、でもそんなことをしたらロツシーが……」

ロツシュはノエルを縛っている縄を解く。

「……今、リーダーは吸魔蜘蛛を持っていないはずだ。俺がリーダ

「の足止めをするからそのうちに逃げてくれ」

「ろ、ロツシー！」

「……ノエル姉、生きてたらまた会おうな」

「私のせいで、また……」

ロツシュが開けた扉を見つめ、ノエルは涙をこぼしている。

「私だ……私がいるから……」

「……少女よ、何事も前向きに捉えるんだ！」

「キヤアアツ！　だ、誰？」

自分以外に誰もいないと思っていたノエルは驚いて周りをキョロキョロする。

「騒ぐな、後ろだ」

「う、後ろ？　……ギャアアアアツ！」

ノエルが振り向くと、ライオン（たてがみ付き）のマスクをかぶり、革ジャンを着ている男がいた。いきなり、目の前にライオンの顔が現れ、ノエルは悲鳴をあげた。

「おいおい、何を叫んでいるんだ。山賊達にバレるかもしれないだろ」

「だ、誰？」

「俺？　俺はレオだ」

「……レオさんは此処で何を？」

「昼寝だ……気づいた時には飛行艇が動いていた」

「……そうですか」

「話は聞いていた。逃げるのだろう？　どうやって逃げる？　空間移動系の魔法があれば良いが、空間移動系は消費魔力がかなり高い。今の君の状態だと無理だろう。空間移動系を正確に使うにはかなりの技術も必要だから使おうとする人間も数えるくらいしかないだろう。ミスって壁の中にも移動したら最悪だからな」

レオは腕を組んでどうしようかと考えている。ノエルも考えているが、なかなか思いつかない。

「……やっぱり飛び降りるしか」

ノエルは結局他に方法を思いつかなかった。レオは何かを決めたように腕を組んだまま頷いた。

「よし、飛行艇を墜落させる」

「は？　墜落させたら乗客はどうなるの！　それに、街に墜落したら大変じゃない！」

「む……ならば山賊を殲滅させれば良い」

「た、確かにそうだけど……今の私は万全の状態じゃ……」

「……出来る出来ないかが問題じゃない。やるかやらないかだ。さつき行った少年を助けることも出来るかもしれないんだ」

「……そうだ。守られてばかりじゃダメなんだ。でも、その言葉……誰かから言われたような」

「行くぞ、少女よ！」

レオは部屋を飛び出す。ノエルはそれを追う。しばらく走ると、ロツシュが山賊のリーダーにボコボコにされ倒れていた。

「ロツシー！」

「の、ノエル姉……」

ロツシュはノエルが来たことに目を見開く。山賊のリーダーはノエルではなく、レオを見て顔をしかめた。

「ん。来たのか……それと、レオ。貴様、何のつもりだ」

「助けてもらった恩は感じている。だが、俺は間違ったことをする人間を止める義務がある。たとえ、恩人であっても……それが、人生の先輩である俺が出来ることだ」

「……レオ、貴様は。……っち、良いだろう。俺を止めてみる」

山賊リーダーは手を前にかざす。すると、魔法陣が現れる。

「……召喚術か」

バチ……バチバチッ！ 魔法陣から現れたのはライオンの頭と腕を持ち、鷲の足、背には四枚の翼と蠍の尾を持った怪物だった。

「……何コイツ」

ノエルは今までみたこともない魔獣で、なおかつ高い魔力を感じて後ずさった。

「コイツは悪魔だ。……さあ、ソイツ等を殺せ！」

「……キサマか。我を呼び寄せたのは……我が眠りを妨げたのは！」

悪魔が目を付けたのはノエル達ではなく、山賊リーダーの方だった。

「な、なに？」

「人間のような下等生物に呼び出されただけでも屈辱的であるのに……覚悟は出来ているのだろうか」

山賊リーダーは雲行きがだんだん怪しくなっていると思い、慌てるが……。

「え、え……ちょっと待ってくれえ」

「問答無用だ」

悪魔は山賊リーダーを驚掴みにしてどこかに飛び去っていった。それをノエルとロッシユは呆然と見ていた。

「さて、盗賊の残党を殲滅させる。お前達は倉庫でまってる」

そう言っレオは走り出した。レオの言葉で、我に返った2人は顔を見合わせる。

「いったい、何だったんだ……」

「わからない……。でも、良かった、無事で」

「……まさかリーダーが召喚術を使えるなんて」

「……そうだね。召喚された悪魔……かなり強そうだった。戻ってこないといいけど」

「召喚されたものは術者が気絶したり魔力切れを起こしたら元の場所に戻る」

時折、山賊達の悲鳴が聞こえる。それも普通の悲鳴ではなく断末魔の叫びに聞こえるが、2人は聞こえないふりをしてレオを待っている。

「そういえば、レオさんって何者？」

「リーダーが山で気絶しているところを助けたらしい」

「気絶？」

「なんでも修行していたら砕いた岩が頭に飛んできて気絶したそう
だ」

「……もしかして、若干馬鹿？」

「……多分。でも、キャラ作りしている感があるんだよな」

「マスクも怪しいよね」

「そうだな。マスクの下は傷だらけの顔だったり」

「かなり格好いいかもしれないよ」

「ん、楽しそうに何を話しているんだ？」

「「うわっ!」」

2人は話に夢中でレオが近づいてきているのに全く気づかなかつた。もしかしたら話を聞かれたかもしれない。レオの表情はマスクでわからないが、わからないこそ2人は不安で仕方ない。

「何を慌ててるんだ? ……ああ、このマスクについてか？」

「い、いえ……」

「マスクについて……だよな」

「は、はい」

謎のオーラがレオの背後に見えたような気がしたノエルは怯えな

がらも肯定した。レオは、ふうとため息をついて腕を組む。

「……秘密だ」

「……え？」

「このマスクについては秘密だ。それに余計な詮索はするな」

「は、はい」

若干、このやりとりに納得いかないが、2人は頷く。

「山賊は殲滅完了。無事にエクステンドに着くようだ」

その報告に2人はホツとする。どんな手段で殲滅させたかわからないが、何故だか知らない方が良い気がしたので気にしないようにした。そして、報告通りに飛行艇はエクステンドに到着する。

「ロツシーはこれからどうするの？」

「旅に出るよ……南には言ったことないからね」

「そっか……えっと、レオさんは？」

「しばらくこの街の宿屋に滞在する。困った時には来たまえ」

「……はい」

絶対にレオに会いに来ることはないと思いつつもノエルは頷き、実家へ向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2059w/>

魔法学院生徒物語

2011年12月29日22時20分発行